

第 1 卷

(1)

「高清水通り 調査報告書」

ダイジェスト

～五大に宿る不思議アーカイブ解凍大作戦ものがたり～

「高清水通り 案内マップ」解説

2023(令和 5)年 12 月末日

・ 高清水通り調査隊 ・

(^{ディー}T – ^{エフモ}FMO)

『高清水通り』は出羽三山登拝参詣古道 本道寺口

この山道はとにかく謎と神秘がぎゅっと詰まった不思議な道

何の変哲もない山道に奇妙で異様なものが点在

それらは「日月星」（自然）と古人(清浄行・利他行・喜捨行)の交響的精華

単なるピークハント山道ではない

“昔、参詣道であった” の過去表現は崩れた

今、歴史の息吹を放つ新しい道に蘇り蘇生した

往路専歩・復路散歩、（往路精察・復路謎解）

あなたの想像力の全部をお待ちするやさしい道

—Mysterious & Romantic Road—

その心は次の二つのフレーズを産んだ

高清水通り

折々の季節 とき あなたを 神秘と

不思議の世界に誘う いざな

この参詣道は みち 御山行者の拠り所

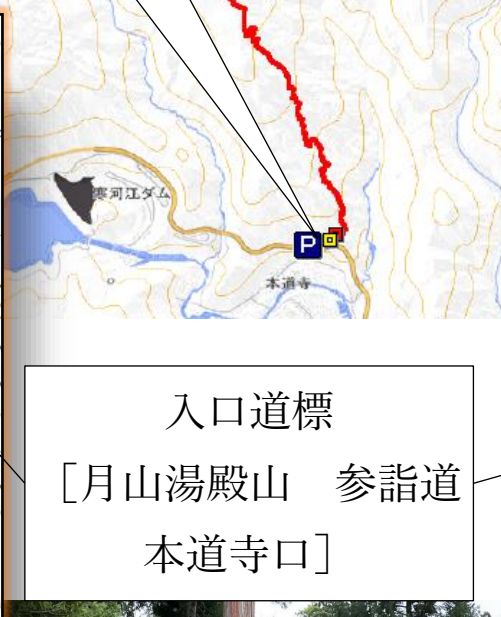
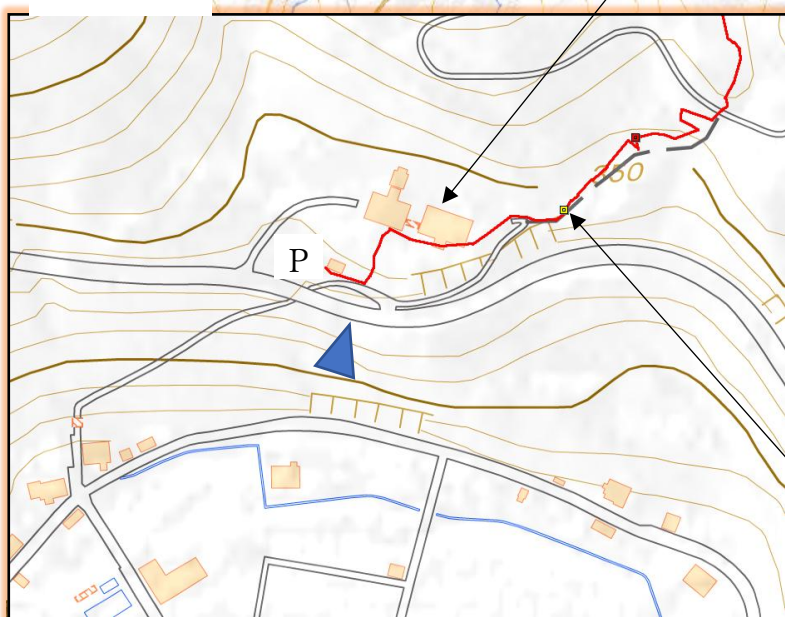
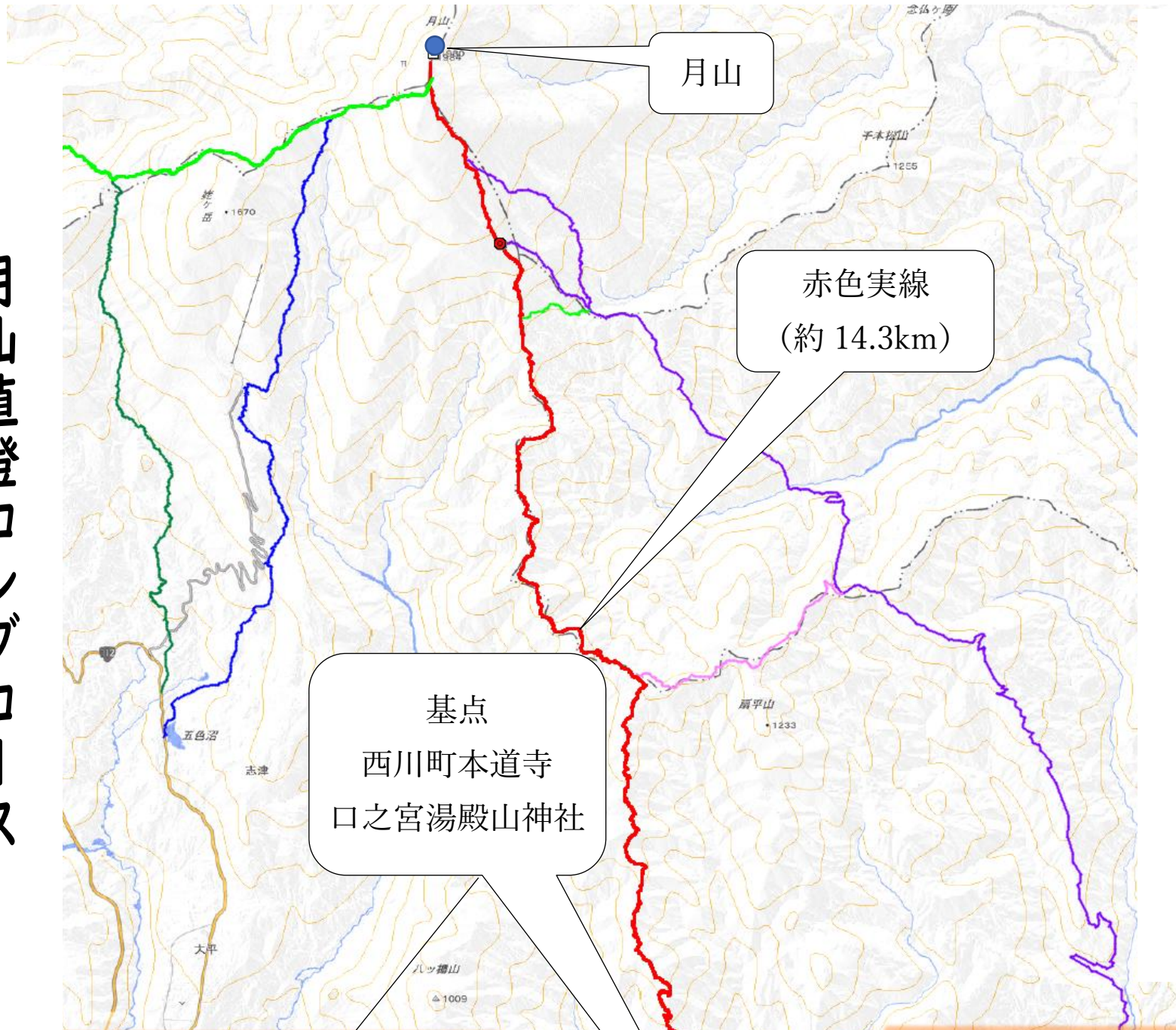
よろずの神仏が塔となり かみ 五大に宿る ※※

※ 地・水・火・風・空

「高清水通り」基点

月山直登ロングコース

”不思議と謎”めく 骨太尾根筋一直線登拝参詣道



[迎えてくれる花たち]



日本遺産 出羽三山 月山・湯殿山 参詣道 **本道寺口**

出羽三山には、八方七口と云われて来た登拝するための登り口があって、かつてはそれぞれの所に寺院や宿坊街があり、宗教集落・宿場町を形成しておりました。この「高清水通り」は、そのうちの一つであり空海が開基した旧月光山本道寺（現口之宮湯殿山神社）からの参詣登拝道であります。

近年、「大黒森プロジェクト」の活動等を通じ、本通りにも関心が高まり、道標の設置や丁石（里程標）の調査など道普請（保全・整備）に取り組み、さらなる魅力づくりを進めております。

ありふれた景観ではありまじょうが、特有の霊氣漂う聖地・丁石が点在しています。安全に十分留意され、素晴らしい古道トレッキングをお楽しみ下さい。

<丁石を探そう！>

起点記念碑から“元高清水”まで96体の丁石を安置したことが判明した。令和4年11月末現在、30体の現存を確認したものの66体は未確認である。

200年の時を経て探して欲しいと待っている！

高清水通り案内マップ

折々の季節 あなたを 神秘と

不思議の世界に誘う

この参詣道は 御山行者の拠り処

よろずの神仏が塔となり 五大に宿る

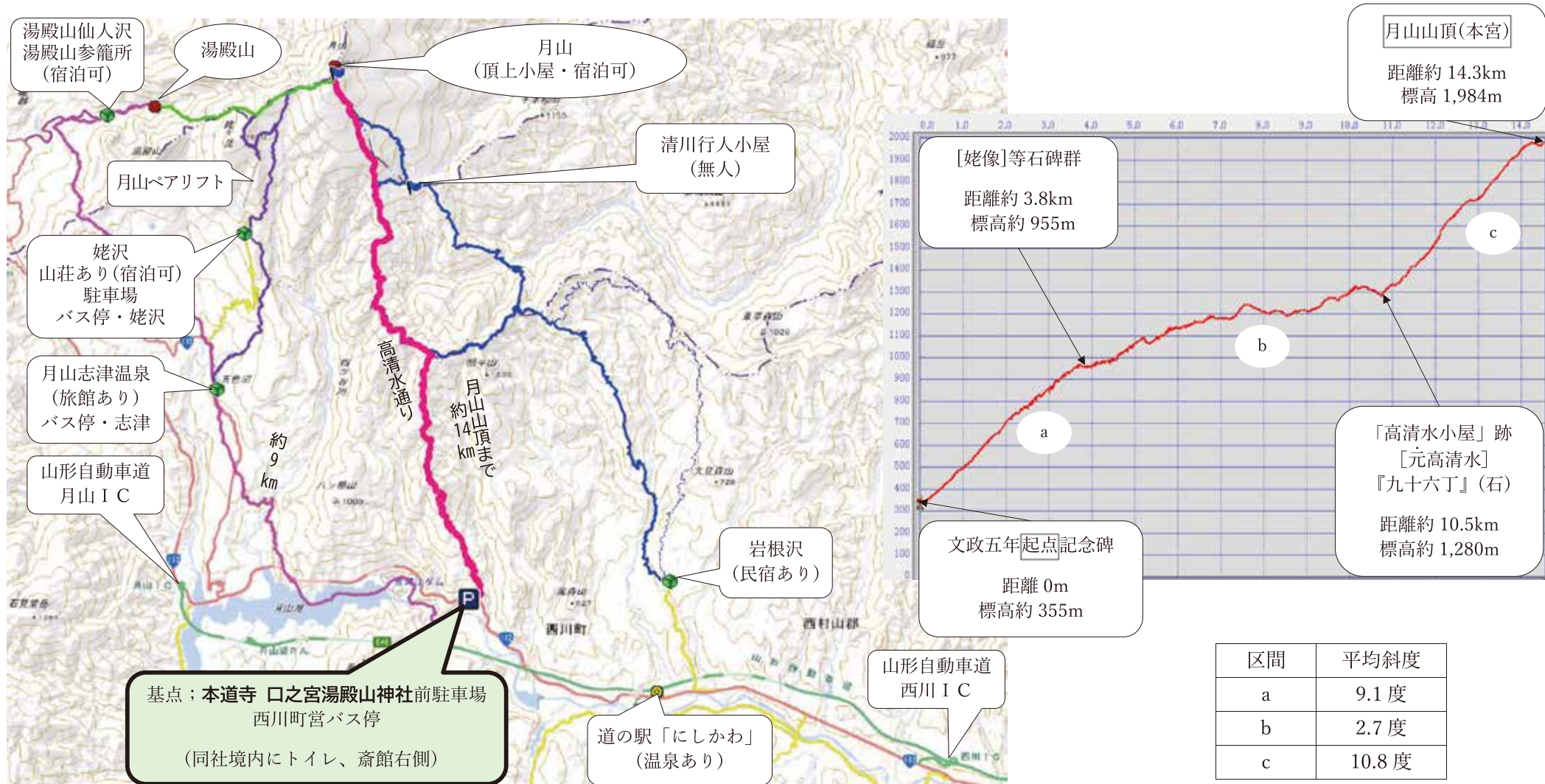
※川・地・水・火・風・空



人の本道、探し旅

湯殿の道と踏みしめて どうあらん

【 月山・湯殿山往来 ― アクセスエリア 】



(※1) 月山山頂小屋は期間営業

(※2) 湯殿山往来は、高速バスと庄内交通送迎バスの組合せて期間運行

(※3) 姥沢行きの西川町路線バスは期間運行

(※4) 月山ペアリフトの運行は4月から10月までの期間運行

(※5) 志津温泉行きのバスは夏季と冬期の運行時刻が変更

(※6) 季節や社会情勢を踏まえた対応となることから事前に確認すること

月山山頂と
後方北遠方に
鳥海山
<標高 1,984m>

胎内岩は大きな二つの
岩が寄り添い、間は潜り
抜けられる。岩の上部と
周囲には夥しい数の墓石
と供養碑が奉納されてい
る。
<標高約 1,878m>

大雪城ルート沿いに『天空石 橋』? <標高約 1,733m>

ごだつし
御立石
<標高約 1,576m>
天を突くように急坂が続くが
大雪城はもうすぐ!

『高清水小屋』跡
〔元高清水〕
に現存する最終の
『九十六丁』(石)
<標高約 1,280m>

横道分岐
(大きな二つのこぶ岩)

支え合う
『夫婦岩』?
(胎内岩よりも
大きい姿)
<標高約 1,796m>

ビューポイント～月山方面

お花畑
(池塘)

ビューポイント～
西南方向
朝日連峰を望む

〔高清水〕道標と「五十九丁」
(文字に朱ベンガラが残色)
直ぐ北隣には枯れない清水

〔石船〕道標より
西側 15m に水場
意味深な舟!

〔姥像〕道標と石碑群
墓石 2 基、供養碑 1 基
「姥」像・「祖母神」像

九
多右衛門
同村
現存する
最初の丁石

〔岩根沢分岐〕

〔柴燈場〕道標 <標高約 1,307 m> 『柴明場』(護摩焚き祭場?)

悟りの窟行場?

ビューポイント～
東方向
右手の蔵王から
左手へ奥羽山脈

脳みそこぶ?

二股絡み?

〔夫婦清水〕道標と
「十三丁」
手前には
枯れない清水

〔山神〕碑
『山神』碑より
少し東南に
虚空蔵山碑

〔口之宮湯殿山神社境内東端〕
「高清水通り 本道寺口」最初の道標
.....
少し先に文政五年(1822)年建立
起点記念碑
『従是高清水迄九十六丁處』

〔注記〕 国土地理院地形図を使用しているが、「カシミール 3D スーパー地形セット」(開発者 D A N 杉本氏) ソフトで記録したもの。

表 紙			
「高清水通り 案内マップ」			
[目 次]			
目 次	1	[以下、M1～M6 以外]	
留意点	2	(半体) 地藏菩薩 (?) 像	30
第 I 部	3	「胎内岩」	31
調査活動前後（発見の連続、大変貌）	4	「禅定尼」の墓石	32
2022(R4)年度～ 調査活動主要経過	5	月山の万年雪「大雪城」の有り様 おおゆきじろ	33
ミステリアス・ポイント配置概観図	6	山の“園芸・盆栽塾”フィールド	34
M1-丁石寄進奉納の起点記念碑	7	ビューポイント	35
「起点記念碑 建立地」の意味合い	8	本通り「やまみち」と、点在する丁石	36
「起点記念碑」の再建立	9	本通りの安全対策（1）「大雪城」帯域	37
本通りに現存する（弥勒仏） みろく 丁石 30 体	10	本通りの安全対策（2）「元高清水」背後地	38
M2-「姥像等石碑群」	11	背後地復元ルート衛星写真	39
「祖母神」像からはこのエリアは古い！	12	「高清水通り」水場	40
このエリアは“観音浄土”	13	水場装置	41
M3-山中に意味深な「石船」の地勢	14	第 II 部	42
「石船」は寄進奉納されたもの	15	「三十六」と「九十六」の聖数融合	43/44
舟（船）は生命起源所縁聖地の印	16	神秘と不思議を生む源泉「因陀羅網」 いんだらもう	45
M4-「柴燈場（柴明場）」は“祭祀の舞台”	17	本通り行者の神仏対話による清浄行	46
M5-『高清水小屋』跡地(1)『九十六丁』（石）	18	「薬師如来」登場の意味合い	47
「高清水小屋」跡地(2) 人工的削平加工	19	「旧跡神舩明鏡」を成した聖数	48
「高清水小屋」跡地(3) 周辺域は鉾山の匂い	20	“天・地・人” 共生繁栄の道！	49
「高清水小屋“旧本道寺奥の院”」検証	21	お大師とお行様をつないだ宿坊	50
「高清水」検証	22/23	第 III 部	51
「高清水小屋（跡地）」諸説を整理	24	2022(令和4)年 T－FMO 活動 以前(従来)の実態	52
「(弥勒仏)丁石順礼古道」の地形的因縁果	25	「高清水通り」史蹟に係る従来認識の2事例	53/54
「高清水小屋」跡地の周辺域俯瞰	26	T－FMO 活動以後（事態は動いた、大発見の連続！）	55/56
M6- [天空石橋] しゃつきょう （天空石堤）	27		—
この橋（堤）向きの意味合い	28		
高清水通り“謎の源流Gスポ”	29		

留 意 点

- ☑ 本冊子は細部の調査報告書（作業中）の内容をダイジェスト（要約）版として纏め、かつ、「高清水通り 案内マップ」解説（説明）用とし、大づかみで把握出来るように作成したもの。
- ☑ 本冊子は本通りの地勢・史蹟等調査活動の範囲に限って（焦点を当て）、記録を大眼目に記述したものであり、出羽三山の歴史に係る解説や研究書ではない。
- ☑ 記録重視のために発掘・発見年月日と対応者名を敢えて明記した。
- ☑ 本冊子は温故知新・不易流行の心、すなわち、

①往古に思いを致すこと
②今価値を生み出すこと

を意識した記述である。飛躍していると感じる部分もあろうが、往古の万事・万象を 100%完全復元不可にあって、既存言説（既成概念）の真偽のほど五分五分であることから、その部分は新しい解釈・読み解きの付加価値であるとする。
- ❑ 本冊子は本通り調査を担った「※^{ティー エフ モ}T-FMO」自家発電ハイブリットマンマシーン渦巻活動の可視化を図ったもの。 ※；調査隊の「布施・宮林・大沼」を指す。
- ❑ その成果を簡略すると、本通り史蹟等調査のみに特化・集中した現地探査を 4 か月間で完了、全 9 か月間の取組みで、案内マップを作製・一般配布し、西川町交流センター「あいべ」会場にて報告発表に至った。
- ❑ 本件活動の最大の特徴は、本調査活動の結果を一般に開示、共有、公表・公開したことにある。（個人所有物的に秘匿・隠避していない。）
- ・内容のほとんどは 2022（令和 4）年度に対応したもので、翌年度以降にフォローした若干を追加記述した。
- ・写真は、註釈以外は大沼が自身のスマホ（iPhone 13 mini）で撮影した。
- ・トラックログ（歩行軌跡）を記録した国土地理院地形図は、「カシミール 3d スーパー地形セット／開発者 DAN 杉本氏」ソフト（有料）から転写した。
- ・参考文献等はその都度記述した。
- ・T-FMO メンバー氏名の敬称は省略した。

本体付属	補填資料;[丁石・石碑・墓石]の碑文・銘文刻字解説・活字化一覧 付録（おまけ） おわりに（全部まとめて最後に）
------	---

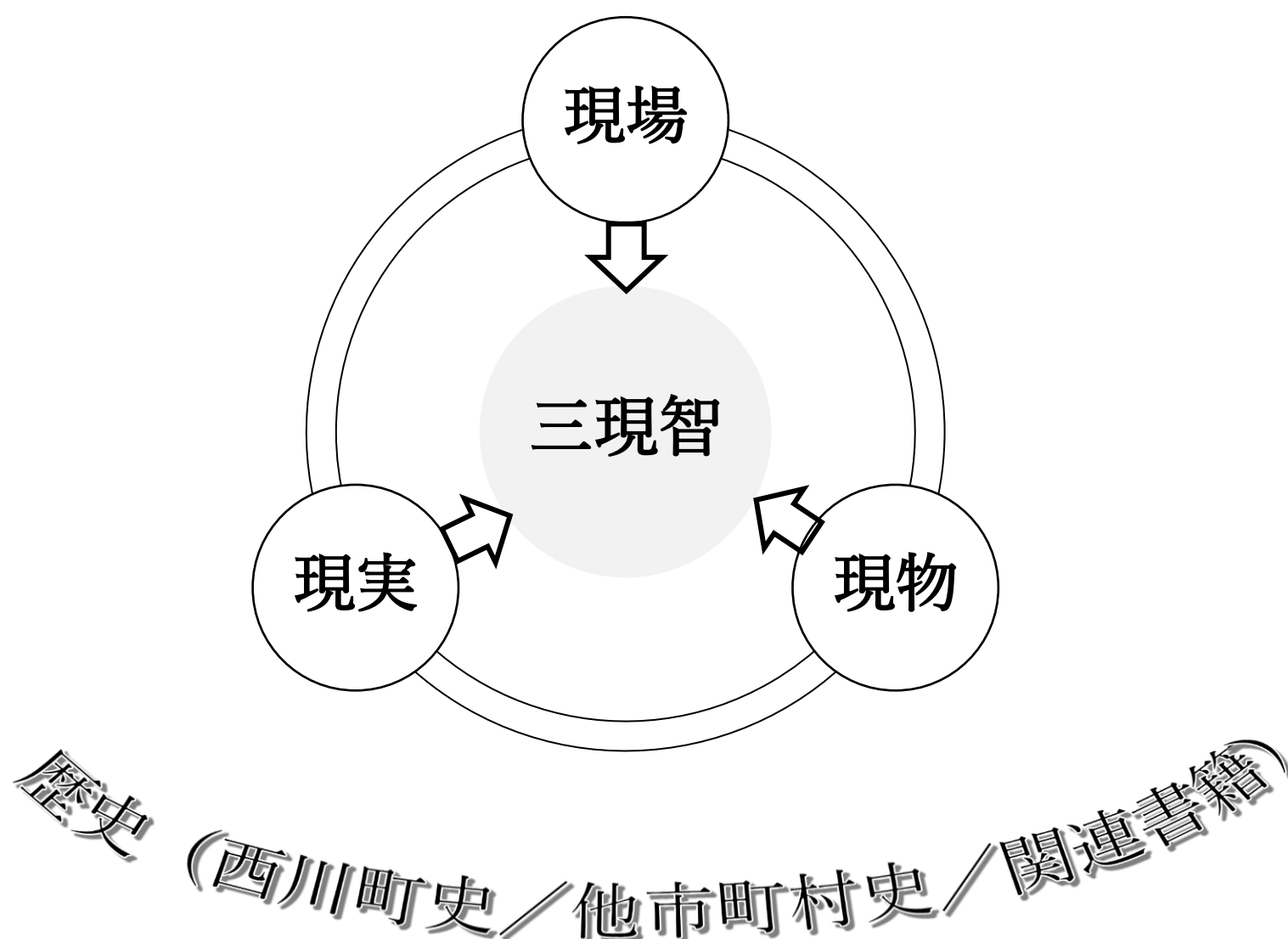
第 I 部

直接的視線

マジカル・ミステリー解剖劇場の始まりです。

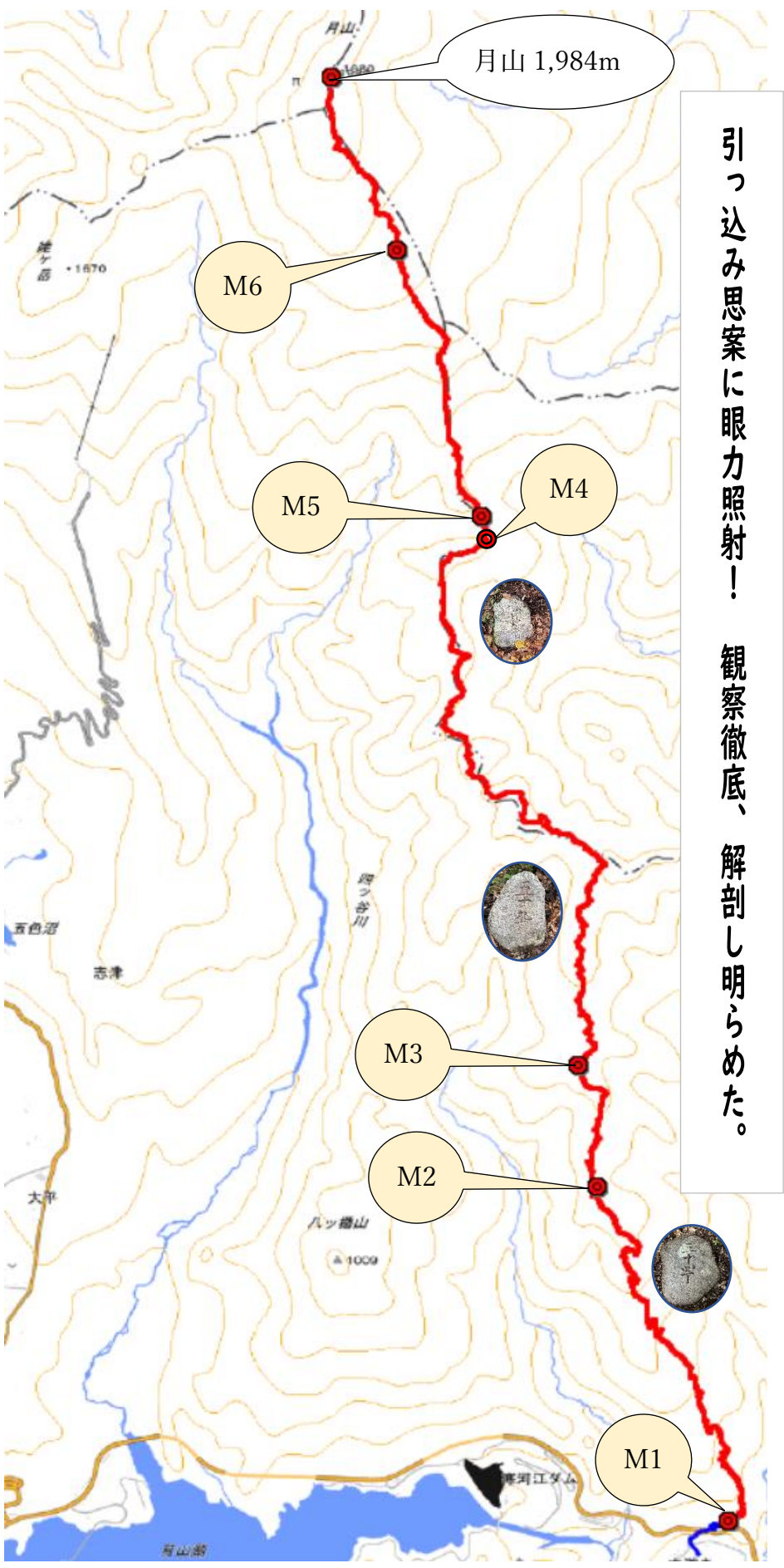
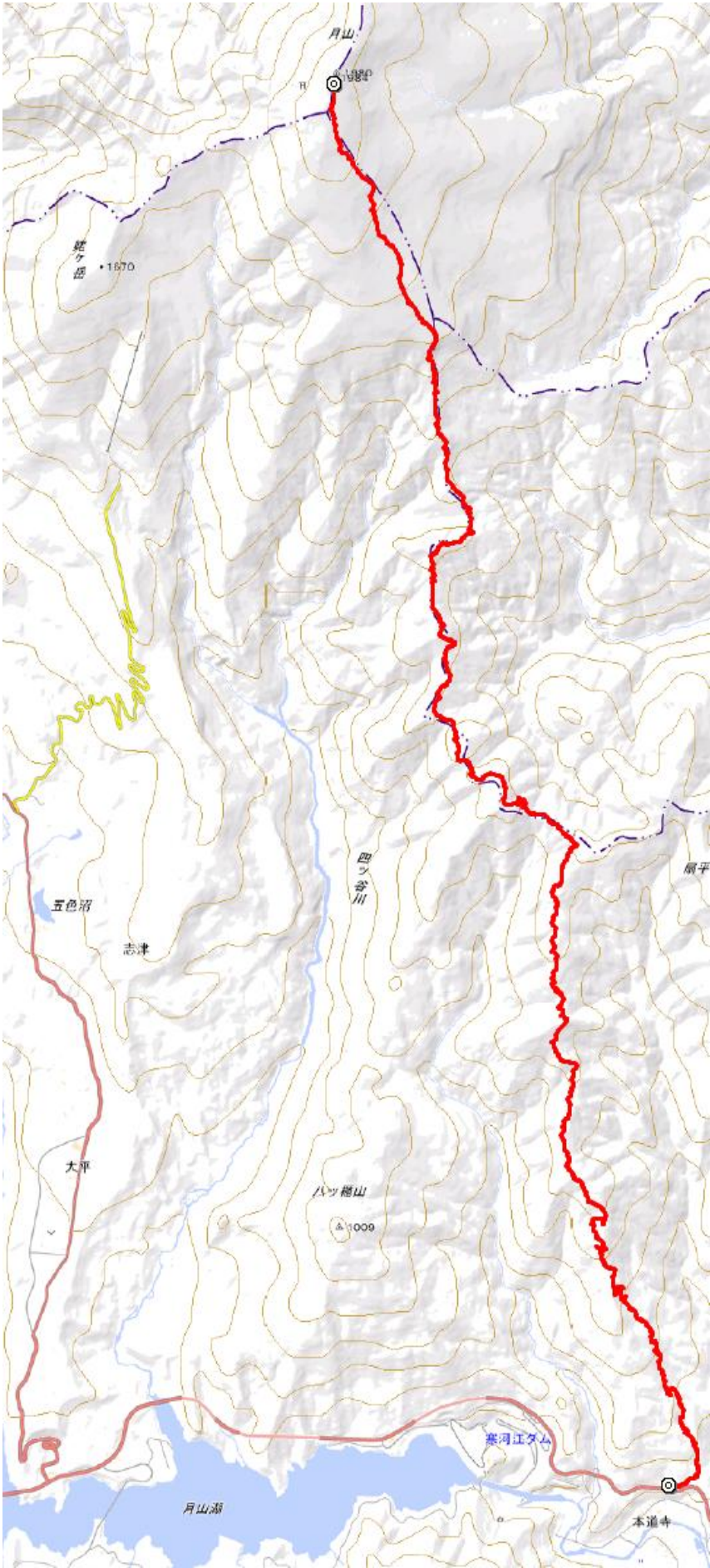
本通りに幾度となく分け入って調査・確認した結果を踏まえ、山道や自然と、史蹟（丁石・石碑・墓石等の文化財石造物）と、それらに係る歴史等について書き込んでいく段があります。

素人目線を以って三現主義（現場・現物・現実）徹底に基づく体験智——三現智（三現主義＋知行合一）の展開を意識し、机上の空論・文献知を振り回さないように留意します。



調査活動前後（発見の連続、大変貌）

ティー エフ モ T－FMO活動以前（未発の状態）	分岐 点	ティー エフ モ T－FMO活動以後（事態は動いた！）
✓ 古くからの参詣道と言いながらも近年は普通の山道になっていた。 ✓ 本通りに、一部の丁石や石碑類が在るというのは分っていた。在ることさえ分らないものもあった。 ✓ その分っているものでさえも、そのままになっていた。あるだけで止まっていた。	2022 （R4） 年 6 月 26 日（日）	✓ T－FMO 自家発電ハイブリットマンマシーンが始動し、地勢・史蹟等調査を精力的に行った。 ✓ ミステリアス・ポイントを付定した（注目地点と位置付けた）M1～M6 の6個所とその周辺を重点的に調査し、結果を書面化の上で記録・整理した。 ✓ 点在丁石の現存数とその位置情報(緯度・経度)を特定した。



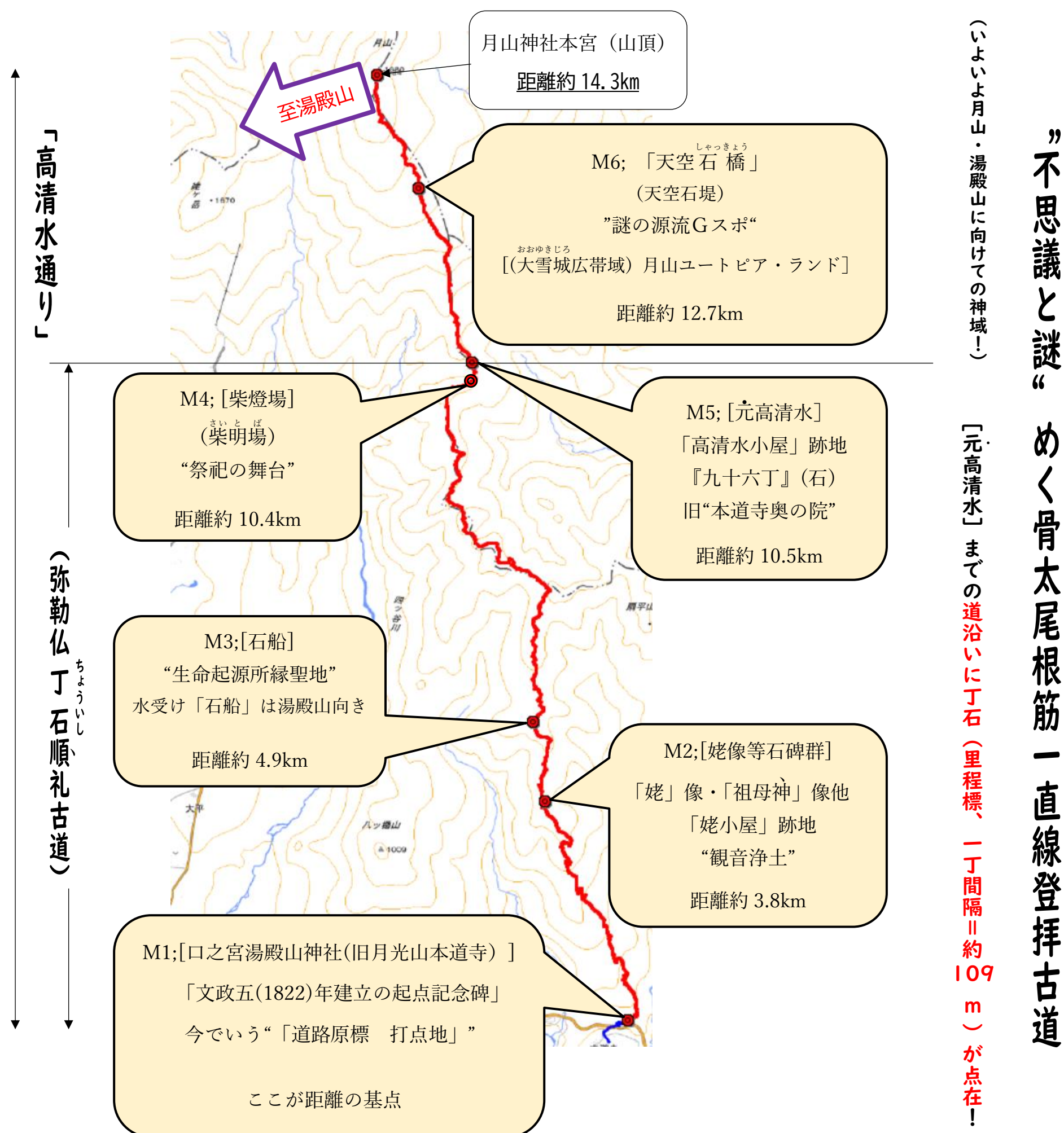
2022(令和 4)年度～ 調査活動主要経過

■2022（令和4）年6月26日（日）				本通りに大沼は初めて入った。	
2022（令和4）年7月24日（日）、高清水通り調査隊（ ^{ティー} T－ ^{エフ} FMO）立上・初会合				丁石・石碑類全数の碑文等刻字を活字化、GPS位置特定記録化	びつたり4か月間で現地調査を完了
○調査結果の主要項目（記載は史蹟等に係るもののみ）					
M1；文政五年建立起点記念碑碑文刻字の活字化を図り、その後の新展開を動機付けた。					
M2；不明な石像について、従来「懸衣翁 ^{けんえおう} 」と間違っていたものを、背面調査による刻字発見を踏まえ、「祖母神」像であることを突き止めた。また、隣接する人工的な削平地「姥小屋」跡地と関連水場を発見した。					
M3；舟形水受け石造物『石船』の山側面調査で刻字を発見、寄進奉納された物であることを突き止めた、本通り沿い石碑類中最古のものであることを判明せしめた。（R5y）					
M4；柴燈場はいわば見晴し台で石碑類はないが、祭祀の舞台であったろうと確信した。					
M5；『九十六丁』（石）と墓石2基を発見、「高清水小屋」跡地を発見、後日引き続き周辺エリアを詳細調査し、関連水場を発見、山師（鉾山師）が跋扈したと思われる古道を発見、小屋跡背後地に旧道ルートを発見し安全対策で復元した。					
M6「 ^{しゃつきょう} 天空石橋」発見し、その設置方向の意味深を解明、座禅石発見、夫婦岩命名、安全対策で旧道ルートを復元した。また、「月山・湯殿山 追分碑」を含む大雪城広帯域を「月山ユートピア・ランド」と名付けた。					
✓本格調査前に既存丁石20体を確認し、その後に発見した10体と合わせて計30体をGPSで位置（緯度・経度）特定、一覧化を図った。					
✓本通りを山の「園芸・盆栽塾フィールド」と銘打って珍奇なブナの表情を一覧化、ビューポイントを一覧化した。					
調査結果の外部に対する途中経過公表	2022(R4)年9月20日(火) 西川町商工観光課に情報提供（説明報告）				
	2022(R4)年11月10日(木) エコプロ関係者との情報交換会（プレゼン）				
	■2022（令和4）年11月26日(土) 調査最終日（宮林・大沼が「元高清水」まで往復）				
	2022(R4)年12月14日(水)「大黒森プロジェクト」10周年記念・令和4年度納会での 情報提供（プレゼン）				
	2023(R5)年2月10日(金) 西川町教育委員会に情報提供（説明報告） 2023(R5)年2月24日(金) 中山町教育委員会に情報提供（説明報告）				
何もなかった真っ白なキャンバスに描き入れたまったく新しい四つの成果					
□1；「高清水通り 案内マップ（初版）」作製・一般配布					
□2；「大黒森プロジェクト10周年記念事業」と共催、本通りパネル作製・展示 ^{R5} 3/9(木)～3/26(日)					
□3；「高清水通り 調査」報告発表 2023(令和5)年3月12日（日）於西川町交流センター 「あいべ」（100人超）					
□4；「高清水通り調査報告書」ダイジェスト版（初版・第二版）作成・配布					
・「高清水通り調査報告書」；調査に係る一切を文書に記録、100か所超の名所ポイントを整理					
・それらに掲載した西川町史等周辺市町村資料は布施範行が収集					

全9か月（見える化・可視化、写真一覧化、文書化、開示・共有・公表・公開を以って本通りの歴史的価値を高めた。）
2023（R5）年3月

ミステリアス・ポイント配置概観図

- 本通りは、古文書に基づき、古来、現「口之宮湯殿山神社」（旧本道寺）から月山頂上までの約 14km の範囲である。本通りに分け入り、月山経由の湯殿山へ、あるいは横道（今は通行不可）経由で直に湯殿山を目指した悠久の古道である。（西川町史編集資料 第六号他）
- 謎と不思議がギュッと詰まった注目すべき史蹟拠点 6 個所に対し、ものがたり・祭儀・奉斎の舞台として、ミステリアス・ポイント M1～M6 を設定・付与した。
- 沢・河川の渡渉・横断や V 字状に深く切れ込んだキレットは一個所もない。
- 登り口から約 2km 先はブナ林となり、生育途上の二次林⇒老荘混在林⇒原生林に変化して行く。



M 1 – 丁石寄進奉納の起点記念碑

- ・ 2018（平成 30）年 11 月 15 日（木）に T – FMO メンバー外**布川浩久さんが発見**（**建立から 196 年目**）した。これは重要・重大な発見であった、しかし、そのままに放置していたことからそこで止まっていた。
- ・ その 4 年後、T – FMO 立上げ後の 2022（令和 4）年 8 月 15 日(月)、**大沼が碑文刻字を活字化・解読を図り**「これより高清水まで九十六丁あって、そのとおりの里程碑九十六体を奉納安置した」という文政五年建立の起点記念碑であることを突き止めたのである。**『高清水』という目的地（目標点）と『九十六丁』の距離と奉納数九十六体を特定**している。 本通り歴史ものがたり一番の旗印（スタート基点）になったのだ。
- ・ この解読までは、全部で九十五丁とか、九十八丁や百丁、あるいは、もっともらしい百八丁とか、はたまた月山山頂までとか、様々な声があったが、悉く打ち消された、打ち消したのだ。
- ・ この解読は、本件調査活動を次のまったく新しいステージに上げたのである。



文政五^十年 達磨寺村
里先達 不動院
山先達 長清坊

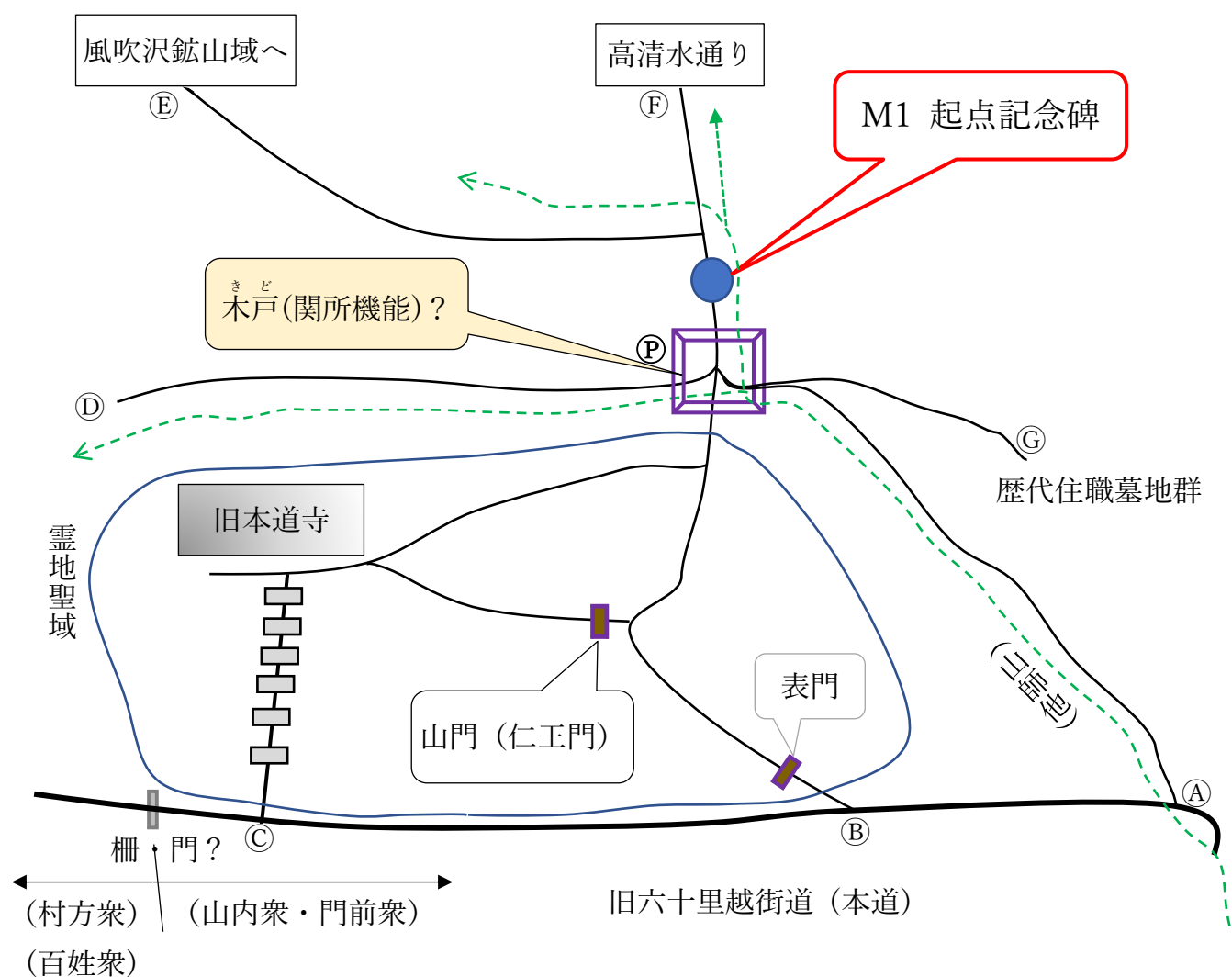
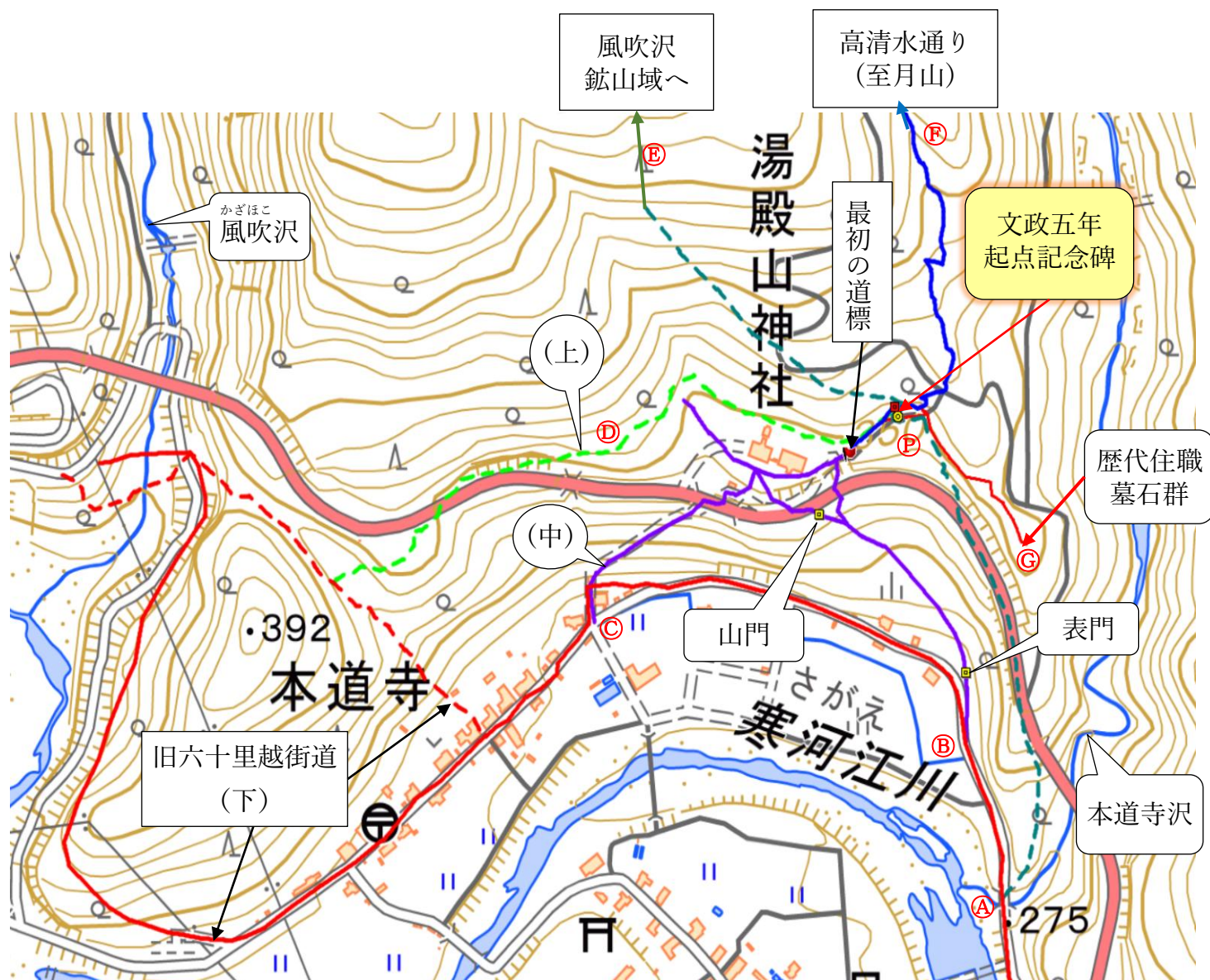
從是高清水迄九十六丁處

七月吉日 世話人 佐藤九右衛門
原田善兵衛

今様の「道路原標」打点地(西暦 1822 年建立)	
高さ約 66cm、幅約 30cm、奥行約 20cm	
10人以上も係った大事業！	□ 丁石奉納者延べ 96 人と起点記念碑記名の 5 人、以上とは、その他関係者を含む意である。
	□ 当時の本道寺住職宥勝 ゆうしょう を導師とし、関係者一同が集結し、入魂儀式・開眼供養の祭儀を盛大に挙行したことでしよう。
	□ 刻字の人達は企画立案、統括、資金提供者であろうが、里と山の先達、世話人 3 人を合わせて 5 人（奇数・陽性）からは、バランスと発展志向が窺える。
	□ 残念なことはこの大事業の経緯を記述した古文書が見付からないこと。また、本道寺（寺、あるいは集落）の名前がないこと。
□ この事業の目的は何だったのか、疲弊していた本道寺を救済するための慈善事業、利他行・喜捨行（「無償の愛」の実践）の一貫だったのか？ その他の政治的意図の有りや否や？	

「起点記念碑 建立地」の意味合い

同碑の場所には意味があったはず。「道の起点であり、心の基点」と位置付けたのだろう。



※；起点記念碑周辺を誇張した記述

○左図は、関係古絵図、西川町史、新旧国土地理院地形図等を参考に、さらには残存する古い道型を辿る等の現地踏査（GPSトラッキング）を踏まえて、往古の通行道・参詣道のルートを想定したもの。

○地理的には所要の道が交差し、今でいう「道路原標 打点地」に相応しい地点、様々な思惑を抱えて往来した人々の離合集散の交差点、ならびに俗域・神域の第一結界点と見做した重要な場所であったことだろう。関所機能の木戸を置いたはずである。

○起点記念碑には里先達と山先達両者の平等併記であり、この地点はまさに里と山の境界と見立てられたのだ。

「起点記念碑」の再建立

2023（令和5）年5月10日（水）、布施範行と大沼は図中『ここに』の所に改めて建立した。



現状を踏まえて下記の点に留意しつつ、その上で、今後長年に渡り、人目に付き易い位置として、発見時地点から現道の反対側法面に設置した。なお、一冬を越し雪の影響を見て、必要であれば所要の対策を講ずる。

留意点

- ✓ 1；2018（平成30）年11月15日（木）発見時の場所を最大限尊重すること。その地は倒伏した長年の重みで窪んでいる。
- ✓ 2；発見場所は現道と比較して一段低いことから水はけが悪いこと。
- ✓ 3；発見場所は夏場の草木繁茂期にはその背丈に隠れて分かり難くなること。
- ✓ 4；文政五（1822）年建立時の厳密に正確な位置は不明だが、前8頁の考証や現況に照らしてここらを起点と見て大きな間違いはないと判断出来ること。なお、ここから古来の「高清水」（九十六丁地点）までの距離は、GPS測定値と理論値は近似する。

本通りに現存する（弥勒仏）^{みろく}丁石 30 体

従前は数さえも特定していなかった ⇒ 以下のことを鑑識した

2023(令和5)年11月末現在



(※1) 起点記念碑を含めると 31 体である。

(※2) 向かって左下に寄進者名、右下に全て『同村』（達磨寺村であろう）と刻字されている。

(※3) 丁石は、単なる石ころではなく、開眼供養祭で祈祷され仏心を注入された弥勒仏である。

(※4) 凡そ平均の高さ 48cm、幅 28cm、奥行 10cm、推定重量 30kg ほどの自然石（川原石？）である。

(※5) 各丁石の位置を GPS で位置(緯度・経度)を特定、このように写真一覧化、現存位置にテープ垂下で明示した。

M 2－「姥像等石碑群」

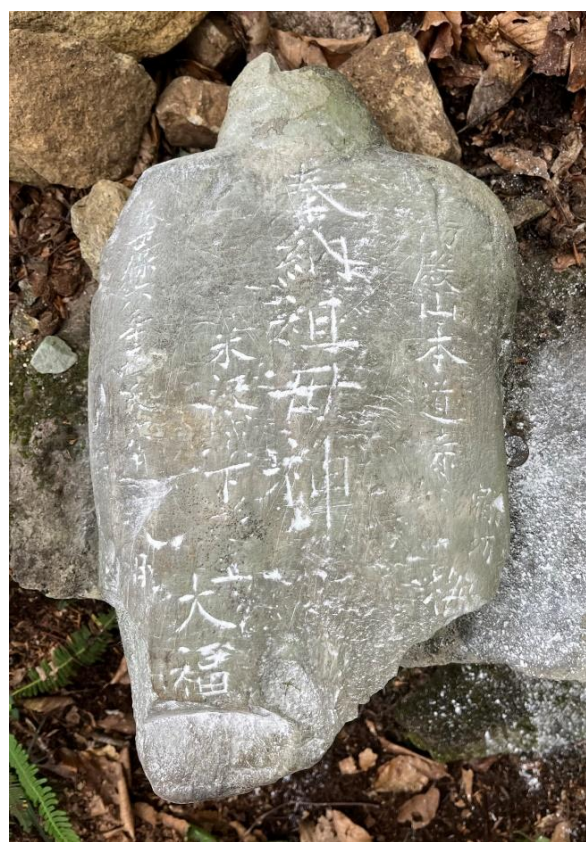
「三十三丁」(石)と「三十四丁」(石)の間にある霊地



①墓石 明治十六年建立、仙台亘理郡荒濱の人が施主となつて、本通りを愛した、強い縁を持った二人の死去に伴い、分骨、供養のために建立したものなのか？	②「南無三十三観世音供養」塔 明治十五年建立、仙台名取長町の人を供養するために、地元本道寺の山先達（阿部秀学）が、その方が檀家であったことに対する恩返し of 意で建立したものなのか？	③墓石 明治十六年建立、宮城縣亘理郡荒濱の人を施主とし、地元本道寺の山先達（佐藤養清）が導師役となつて、分骨、建立したものなのか？	④「姥」像 刻字はなし。（風化したのか？）	⑤「祖母神」像 背面に「祖母神」と刻した字が明瞭に残っている。施主は米沢の人、地元本道寺の梅本坊が享保六（1721）年建立したものか？ 頭部と胴体下部が欠損している。	⑥道標 「姥像 令和2年秋建立」
字数が多い①②③刻字の読み解き・解釈は様々であろうが、一つの見方を略述したもの。					

「祖母神」像からはこのエリアは古い！

- ❑ 従来の俗説は、欠損し正確に把握出来なかった⑤像をまこと けん え おう 実しやかに「懸衣翁」と見ていた、背面には土(約 2cm)とこけ(約 1cm)が厚くこびりついており、一見、何も刻されていないだろうと判断するのは止むを得なかった。(その先入観で思考が停止していた。)
 - ❑ 地元を含め皆「懸衣翁」^{みんな けん え おう}と思っていたが、それは、誰かが自らの著書に「懸衣翁」と書いたものだから皆な鵜呑み・信用して来たのである。
 - ❑ しかし、大沼はかすかな疑念を持っていた、2022(R4)年 9 月 14 日(水)の午前、**大沼がその背面調査で下記のと通りの刻字を発見し、「祖母神（そぼしん）」像であることを突き止め、碑文の活字化を図った**、仏教色の姥ではなく（神道色の濃い）神像一女性特有の天性（慈愛・仁徳・優美・母性・・・）を神格化した表象なので貴重であり、山形県内では初見と言われている。
 - ❑ 従来、明治期建立の供養碑（3 基）を以って当地の形成は新しい（古くない）という通説であったが、「祖母神」は今から **301 年も前に奉納されたもの**であること、賽銭の中に江戸期寛永通宝の古銭も確認していること、後記するこの先の「三十四丁」石と、その前の「姥小屋」跡地の発見も合わせると、当地エリアは**古くから（古来）**観音霊場と観想して来たことだろう。
- 従来、不明なことからは、女の「姥」に対する男の「懸衣翁」^{けん え おう}を期待して、“対であるべきという思い込み”でもっともらしく噂していた像であったが外れた。結果して両方共に“女”である。

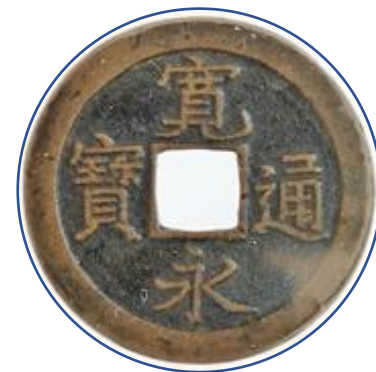


(碑文)		
享保六 ^{辛丑} 天六月初八日	奉納祖母神	高さ 約 45cm
	湯殿山 本道寺 梅 ^{欠損} (本坊)	幅 約 27cm
大福(以下欠損)	米沢城下	奥行 約 14cm
	宿坊	自然石？
		推定重量 約 34kg
		台座高さ 約 22cm
		享保六年=1721 年



「姥」
像

- ・ 仏教色が濃い
- ・ 顔立ちが優しい



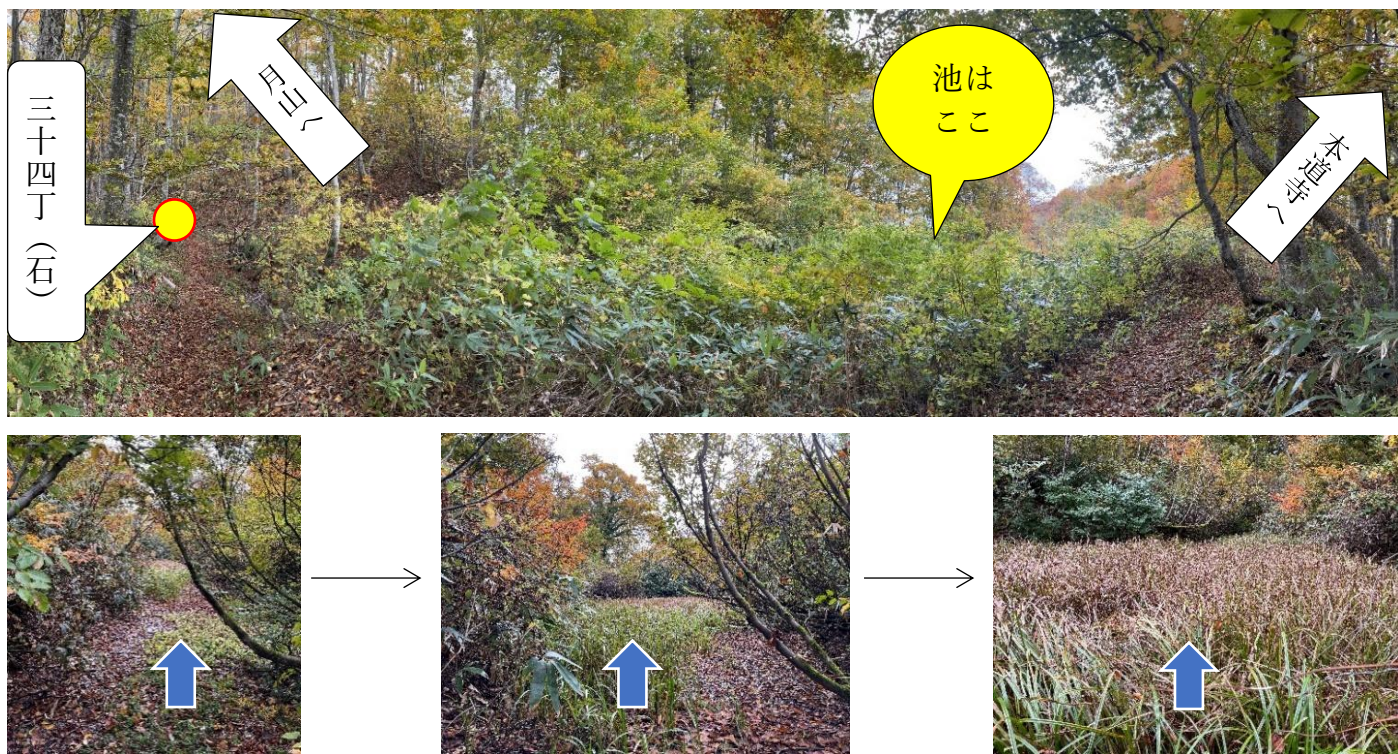
左がここの賽銭の中にあった。(右は同種の参考)

このエリアは“観音浄土”

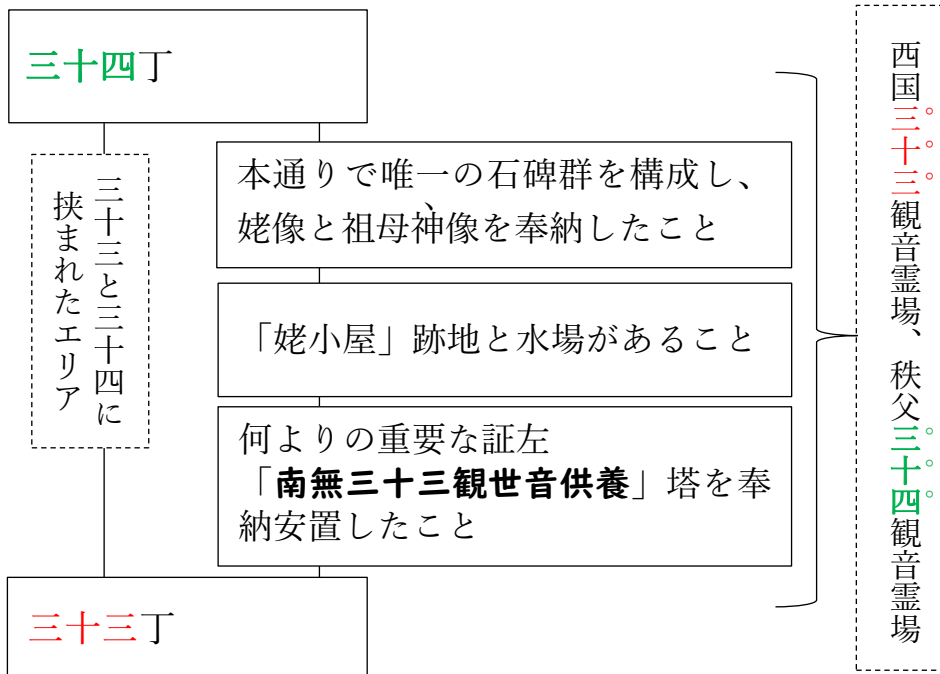
前頁の状況と共に、このエリア「姥小屋」跡地の発見を合わせると、“観音浄土”と見做して来たのだろう。①には小屋を掛け、その営業期間中は、②には祭壇を設け、観音様やお不動様を安置したのではなかったろうか。



今はヨシ原の人工的円形状池は、「三十四丁」(石)から東南のくぼ地に向け緩やかに下り、約 80 m 先にあって右下のとおり。また、人工的な削平地①・②が造成されているが、姥小屋跡地と推定する。2022 (R4) 年 10 月 26 日 (水)、有志と共に 2 回目の現地探査を行った。



2022 (R4) 年 10 月 20 日 (木)、大沼が初めてこの地に入り、「姥小屋」跡地と関連水場を発見・特定した。ここは「高清水小屋」跡ではない。

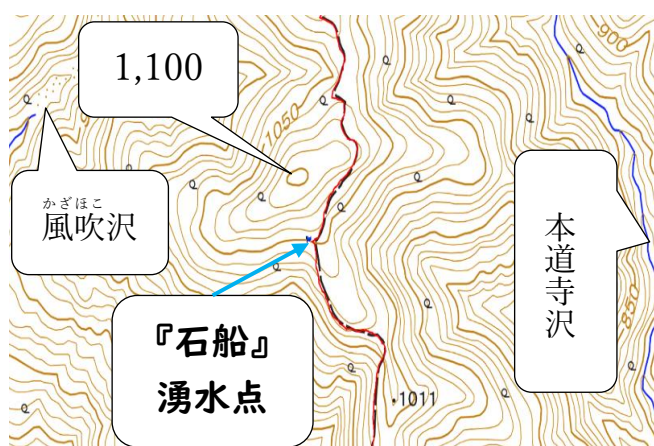


- ・三十三と三十四は「諸経の王」とされる法華経で説かれる観世音菩薩と妙音菩薩の象徴、合わせて薬王菩薩の応現力を発揮する。薬師如来とは「薬(薬効)」で共通することから、当地は健康守護・抜苦・安楽の観音浄土(観音霊場)として観想・観念されて来たと推察する。
- ・その応現力にすぎる「観音信仰」は、女性の人気を集め国中に広まり、身近な存在としての(写し)観音霊場は 100 を超えるという。
- ・三十三と銘打ちながら番外を設けて実質・実態は三十四観音霊場としている処が多々あり、山形県内出羽百観音霊場もそのとおり。

M3－山中に意味深な「石船」の地勢

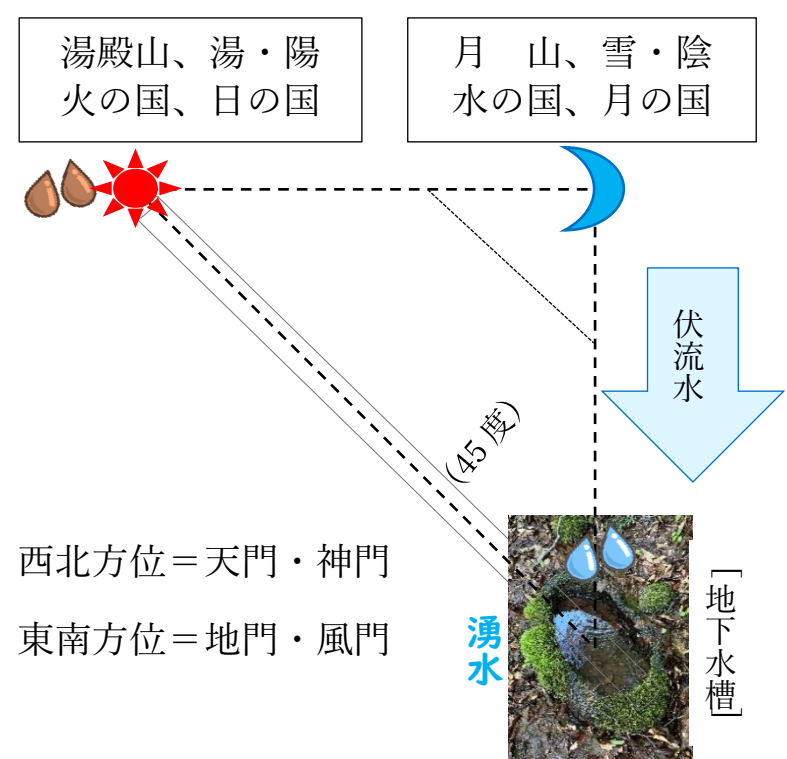
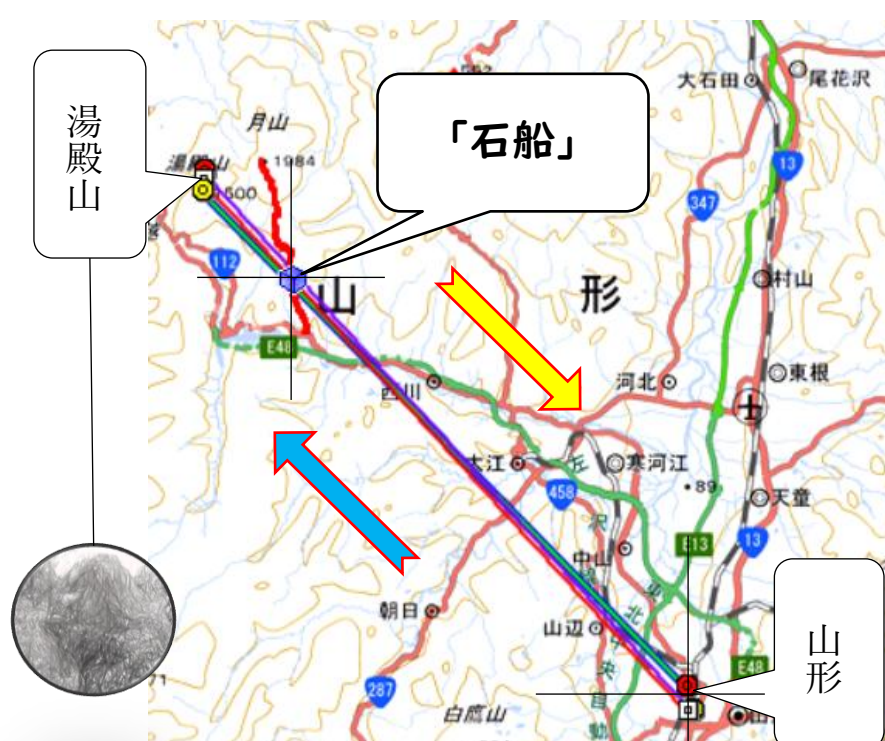
大沼はかねてより、この異様（奇異奇妙）と思える水受け石造物「石船」は寄進された物のはずと直感していたが、見える範囲においては濃いコケで刻字されている状態は認め難く、また、山側を見たく一度一人で動かそうとしたが重く、約1年近く調査を断念していた。さらには**周囲の人達全員からは“何も書かれていないだろう”という声があった、しかし、諦め切れなかった。**

水受けの置いた向きが水流（重力）に並行でも直角でもなく、**斜め置き(向き)**は何を意味するのか？ 寄進したとすればどんな身分なのか？ この山奥に、そもそも、なぜ、舟形なのか？



ここは、膨らんだ母胎の腹と思わせる地形を成し、一個所（へそ）から確実にチョロチョロ湧き出る状況にありながら、かつ、一帯（木がなくミズナ等の湿生植物）から染み出すように水が出て来る。この水は、背後にある標高 1,100m の小山の地下に自然築造された月山頂上付近「大雪城」を水源とする伏流水の貯水槽から湧いているのではないかと察知する。晩秋も涸れないことから、ここだけに降った雨・雪だけの水とは思われない。

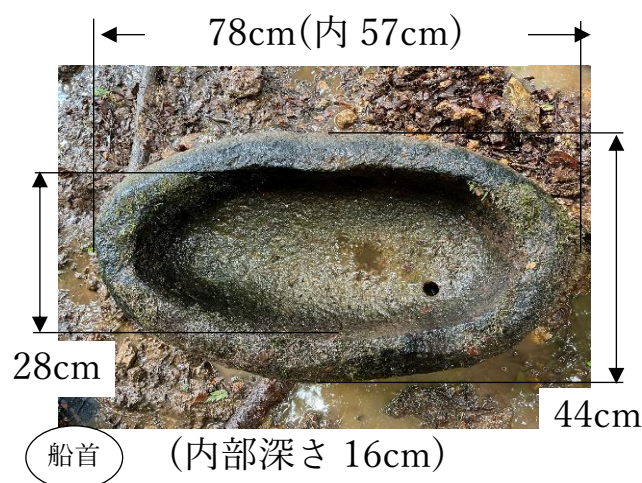
「水受け」を置きたくなる水場は、「夫婦清水や、今の高清水」、その他の場所も有り得たはずだが、**なぜ、この場所でならなかったのか？**



2023(R5)年6月19日(月)、大沼はコンパス（方位計）を当て、山の湯殿山周辺と里の山形八日町（湯殿山参詣宿泊者の定宿に指定）周辺を結ぶと、当地は、西北と東南を結ぶほぼ真正な45度傾斜方角直線上の一点にあり、そこに、しかも、船首を湯殿山御宝前に向けて舟形水受けを置いたということを突き止めた、その意味する処を次頁に記述する。

「石船」は寄進奉納されたもの

2023(R5)年6月19日(月)、そこに阿部剛士という助っ人・相棒が表れ動かして見た。大沼は直ぐに刻字に気付いた、翌々日6月21日(水)大沼単独の詳細調査後に碑文刻字を活字化・解読を図った。奉納から307年目、予想どおりに寄進奉納されたものであることを突き止めた。一部に朱色ベンガラが残存する。



上からの状態

当初の向き（刻字面は上部・向こう側・山側を向いていた）



非刻字面



刻字面

今は刻字面を手前・谷側に安置

片方の側面に刻された全35文字の解読は右記のとおり。

敬白 丹羽氏 住人 山形八日町 施主 五月日 丙申年 正徳六 菩提也 縁無縁 眷属有 為六親

「為六親眷属 有縁無縁 菩提也」（全ての親族縁者や家来、ならびに縁の有るなしに係らず故人みんなの靈魂が「悟り」を得られ成仏出来ますように冥福を祈る。）

「正徳六丙申年五月日」（設置・寄進は正徳六年の丙申／西暦1716年の旧五月・夏至月）

「施主 山形八日町 住人 丹羽氏」（施主は山形八日町の住人「丹羽」^{にわ(?)}という者）

「敬白」（右のとおり謹んで申し上げます。 謹んで寄進奉納致す。）

湯殿山方向を船首と見た理由は、日本語縦書き文字で、向かって右から左に書き進むならば、右舷において書き始めが船首方向となるからである。（右から左に書き進むなら右舷）

船首を湯殿山に向けたのは、里の民衆の願い・畏怖・尊崇の心を届けたいとする意思の表現・具象化ではないのか。文字を見せたく船首を山形に向けたのでは、御宝前の神徳を貰って来るだけと受け取られかねないことから、それは避けたということではないだろうか、文字を見せるよりも湯殿山向きが重要なことであったのだろう。

他方で、修験道（陰陽道）に絡めれば、天門・神門（北西・女陰・凹部）と地門・風門（南東・男根・凸部）を結ぶ直線天地軸（45度傾斜角）は、風通しの良い障害なき天地の自由往来を可能ならしめる気が通流する方角、すなわち陰と陽の交合交感活動を促し、万物の繁殖と万事の繁栄を約束する呪術的軸である。その軸と本通りが交差する唯一の地点である。湯殿山御宝前のふくよかな腹似と当地の腹似地形では共通、御宝前火に繋がる熱いお湯と当地冷たい水の結びにおいては対極、合わせて陰陽相対(待)調和の様相を喚起する方角エリア、女陰と男根の対比は子孫繁栄・五穀豊穰を暗示、どんな願い事をするにしてもとても当地は縁起の良い場所・方角ではないか。

果たして、この施主の身分は(何者か)？ 易経や陰陽五行説、風水等の呪術的な面（昔の人達

は格別に拘った）から追及すれば解けるはず。^{ひのえ=火性、さる=金性} 丙 申 と夏至月（旧五月・火性）は「陽性」の三重奏、すると、何事も陰陽のバランスこそが正常・健全な発展を促すことから必然的に「陰性・水」を求める、また、「火剋金、水剋火」を合わせ、「火と水と金(鉱石)」のキーターム三点セットが浮かぶ。本通りに係る参詣道や鉱山開発の歴史を踏まえ、広い意味の山師（鉱山師）、または、修験者たる里（山）先達、あるいは鍛冶職の可能性大と推察するが。

舟（船）は生命起源所縁聖地の印

河川・海がなく、舟・船とは縁もゆかりもないこの山奥の山道の尾根筋の水場に、
“ 弘法大師像や不動明王像ではなく、なぜ、「舟形」の水受け石造物なのか？ ” という
素朴な疑問が湧く。四角や丸やもちろん三角の形状ではなく、「舟形」である。

寄進者は崇高な意義深い思いを傾けた、託したはず。しかし想像する他はない。

✓ 1；右上は某家の庭にあるもので「舟地藏」と称し、子宝・安産を毎日祈願したという。「舟・船は乗り物」でジェンダー視点からは、「乗る男に」「乗られる女」、陰陽はすなわち男女・雄雌の円満な合体こそが生物の生命起源の初動に見立てたという。これらから「舟・船≒生命」と感得した決定的な構図が見えて来る。

舟(船)は国内外の神話や文学、芸術作品等において女性の象徴として登場するなど舟と女性の高い親和性を持つ。

✓ 2；船は内陸水路交通と海上交通で活躍するが、前者は河川の真水、後者は海洋の潮水がいわば仲介者である。その川は淡水（真水）で男性象徴であり、海は海水で女性象徴である。その二つが交わる河口（右下）は男女交合のシンボルである、と言われる。Cross Point が肝だが、そこで誕生した人間生命は母胎の生理塩水の子宮内羊水で育つ。



✓ 3；数え 24 歳の青年期空海は、その思索を纏めた大著「三教指帰」に次の一説（要約）がある。――人間の生きる娑婆界を「生死海」と称し、そこを乗り切るためには、「六波羅蜜」（生身の人間ながらにして仏様に至らんとする六つの修行）という筏を整備して出発しよう。あるいは、「八正道」という大船に乗って船出しよう。精進という帆柱（槓）を立て、禅定（修行）という錨をあげて進もう。――

この生身の人間が生きる欲深き悲喜交々の五濁悪世の現実社会を波立つ・泡立つ「海」に譬えて、ここから脱する、再生復活するための手段について「船」を以って譬えているのだ。

✓ 4；本通りにおいては、民衆・行者の諸々の願いを発出する里の基点（山形）とそれらを聞き止め受容する山の基点（湯殿）を、逆に、万物を生み至高の功德神力を発する大日如来の基点と、それらを受止めて崇拝・感謝する里の基点を結んだ気流循環軸との交差点である、クロス（crossing）に何か芽生える、集合の視点からは万事凝縮のゼロポイント、発散の視点からは新創造基点、万象萌芽原点となるのだ。

寄進者の石船の諸命題に込めた心（意図）は、以上の全体が頭の中にあって、子孫繁栄、ひいては五穀豊穡や商売繁盛の願い・祈りを込め、神仏との感応道交に相応しい象

徴として、この湧水地に舟形の水受け石造物を奉納、「石船」と命名し、生命起源所縁聖地と見立て祈りの舞台にした、再生復活祈願所と見立て祭儀の舞台とした、のであろう。

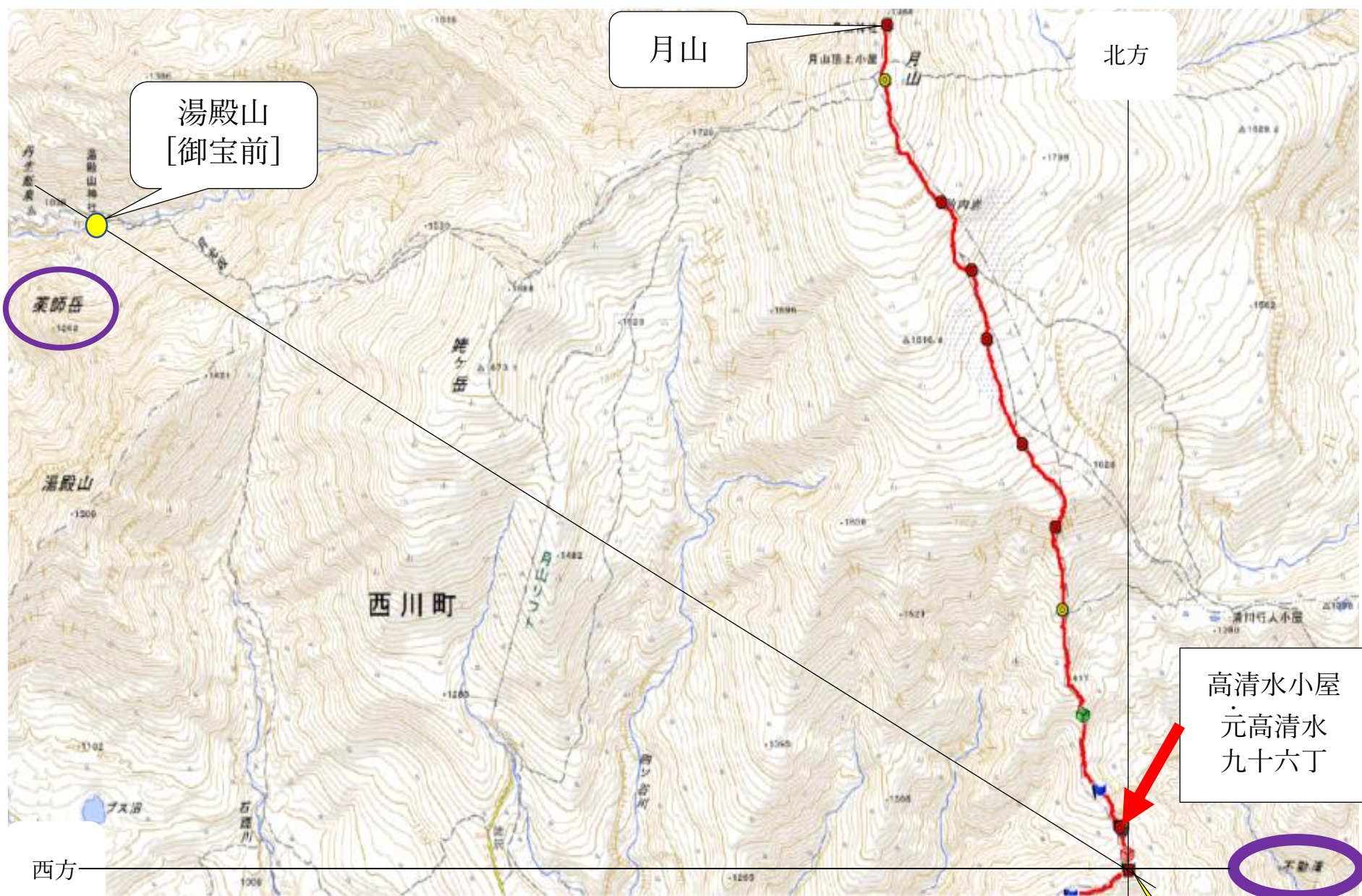
（精神性において、灯籠流し・精霊流しとはまったく無縁だろうか？）

M 4 - 「柴燈場（柴明場）」は“祭祀の舞台”

ここは単なる見晴台ではなかったはず！　ここで柴を焚いて火を揚げたのだらうということは皆想像していた、しかしそれだけではない、大沼は、最大のポイントは「^{からすがわ}鳥川不動滝（不動尊）」と湯殿山であることを突き止めた。この二つを絡めた次の四つの祭祀、昔から続く天皇祭儀「四方拝」（神祇拝）に類似の儀式を行ったことだらう。

- ①烏川不動滝（不動尊）遙拝
②護摩祈祷、③先祖供養
④湯殿山御宝前遙拝

等の舞台（祭場）に見立てたのだろう。ここから約 183m 北に隣接する次頁以降に記述の『高清水小屋』（今でいう元高清水）と一体を成して祭祀を執り行ったことであろう。



西川町史に出る古語の『明』は日と月の塔立(並立・等立)

- ・空海が旧本道寺を開基し時の山号寺号を「月光山光明院」と名付けたが、その月と正真の光たる日を由緒とし、“柴明”と名付けのだろう。結果して光明院の明を採った。
- ・また、「明」は日と月一湯殿山大日如来と月山阿弥陀如来の平等信仰の象徴であろう。
- ・共通的に修験道に見られる東西南北四方浄土の実践道場に見立てたのであろう。

その 1 ; 真東に不動滝、薬師如来の座す^{おわ}東方浄瑠璃浄土。反対の真西を上げば阿弥陀如来が座す^{おわ}西方極楽浄土。

その2；北方との関連で、月山は祖霊・祖神を見守る阿弥陀如来が座す。北天を仰げば、「妙見菩薩」と習合した不動の北極星とこれを周回する北斗七星。そこに北方弥勒浄土が浮かぶ。

その3；北西（西北西）には寂^{じゃくじょう}静の境地であり真智の光を放つ大日如来浄土の湯殿山。湯殿山にも祖霊との交渉斎儀の場「岩供養」。内藤正敏著「修験道の精神宇宙」（青弓社）P110-111には次の一説がある『西北は靈魂の帰りゆく気持ちの悪い方角であり、・・・一方で、金銀財宝や米や酒を湧き出させ長寿を齎^{もたら}す目出度い方角である・・・。』

その4；南方には、北極星に対応する北半球では見えない南十字星（南半球では航海の目印としてもよく利用された）がある。本通り南方直下には旧本道寺と周辺集落群（東南方には村山地域）。そこに南方釈迦浄土が浮かぶ。

M5－『高清水小屋』跡地（1）『九十六丁』（石）

○2022(令和4)年9月10日(土)、「天空石橋^{しゃつきょう}（後記27頁）」発見下りの16時過ぎ、**先行していた大沼が土中にあるものに気づき、少し遅れていた宮林良幸を呼び寄せ同行調査した。**

○『九十六丁』（石）は、二つの墓石と共に、雑木と濃く密生した根曲り竹と腐葉土の地中下に埋もれていたものを掘起こした。里から約10kmもの山中に墓石2体の出現はまったくの予想外であった。

○墓石2体の銘文刻字の活字化・解読を図り報告書に記述した。一体に女性戒名が刻されている。

○前記7頁、M1-起点記念碑の刻字碑文に対応する「高清水」地点であり、かつ、そのとおりの「九十六丁」地点でもある。（現ルートにおける距離はGPS測定で約10,530m、理論値10,464mと近似）

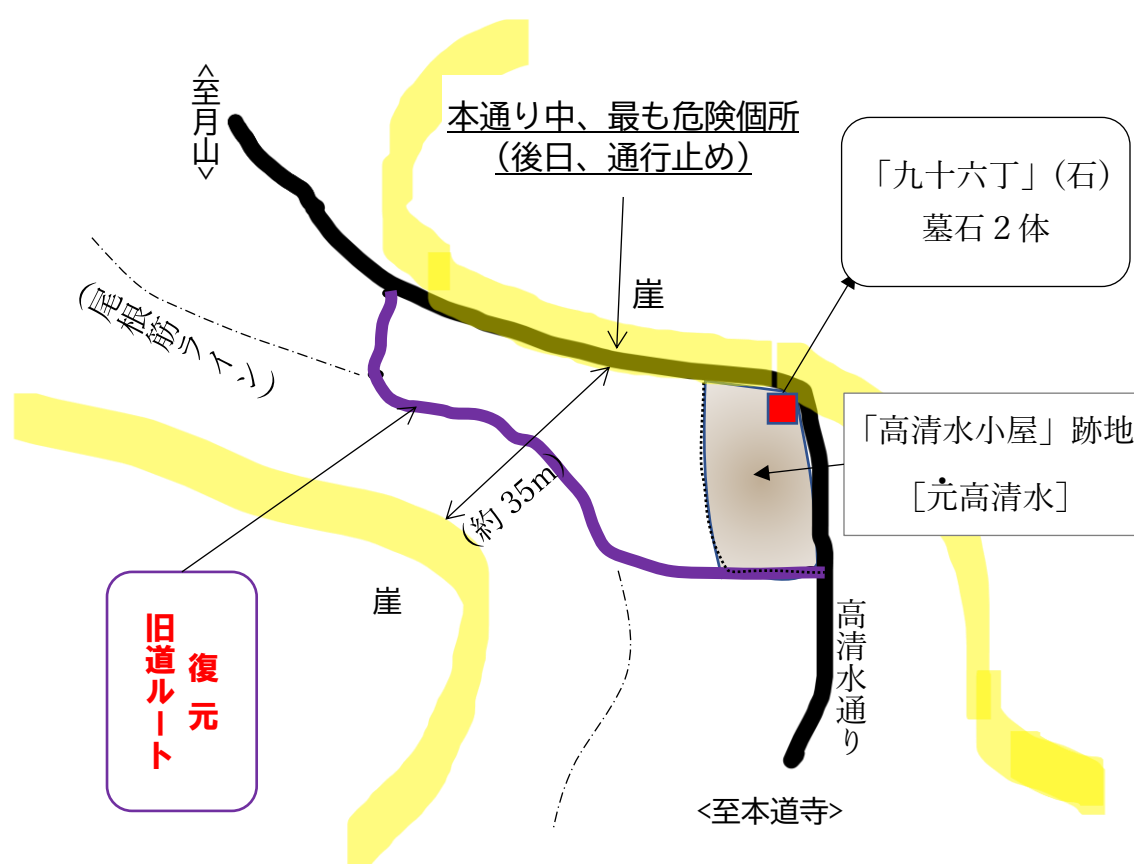
○発見日は、快晴・中秋の名月、16時20分に全容把握、**起点記念碑建立の文政5(1822)年からちょうど節目の200年目であった。**

○今は、水場の一つに「高清水」の道標を設置したことからは、この地名を「**元高清水**」と称する。



(※) 丁石と墓石は、東北、つまり、鬼門の方角を向いて安置されており、悪霊封殺の意味がある。

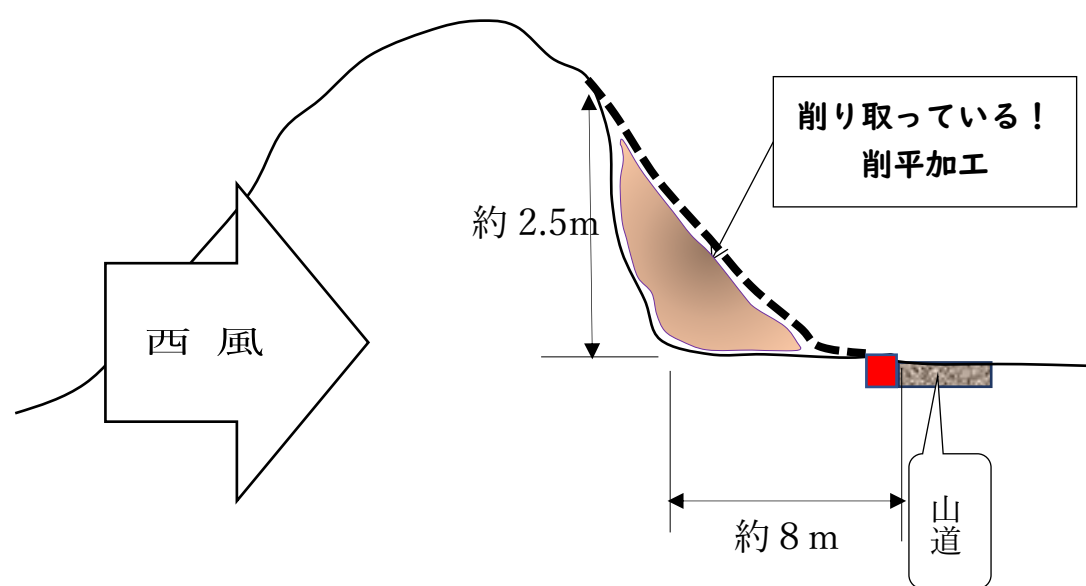
「高清水小屋」跡地（２）人工的削平加工



『元高清水』西側背後地（左上図）の雑木繁茂地、2022(令和4)年11月12日(土)、藪の中に陥没したU字状踏み型「旧道ルート」を大沼が発見した。

当地は、月山を目指す骨太尾根筋一直線登拝古道の中で、左右両河川支流源流部の迫り具合で見た場合、横幅が約 35m で一番狭まった（くびれた）地点である。

左下図のように人工的に削り取って平坦部を形成、目的は小屋掛けのために造成したのは明白である。



この人工的に造成された平坦地は、2022(令和4)年8月6(土)に、大沼が藪の中に入り、直感で気づき発見し、宮林良幸と同行調査した。のり面削り加工部視認化のために山の笹を少し刈り払った後に撮影した。

- ・前頁墓石の存在と後記 21～23 頁記述の地図による位置関係検証を踏まえ、ここが「高清水小屋」跡地である、と確定した。
- ・小屋の運営（賄い）には水が必需、次頁に記述した関連水場、同小屋跡背後地の旧道、烏川支流源流部の湧水点、草付きの中の古道（次頁右上図 Z 点）は同年 11 月 12 日(土)笹藪の中に大沼が発見した。
- ・次頁は同年 11 月 26 日(土)大沼は宮林良幸を案内し同行検証を行った記録。この時に白い粉末（ゲル）状物質の滞留池・金気色水溜り・四ツ谷川支流源流部の湧水点は宮林が気づき発見した。

周辺域は鉾山の匂い



水場（湧水している状況）、水芭蕉の芽が有る、他の池塘になし



寛政八（1796）年頃に騒動となった
本通りから烏川不動滝（不動尊）へ
至る無断開削ルートの一部か？
山師跋扈の道か？



他とは異質で鈹物（石灰質？ 塩基質？ 鉛の微細物？ 湯花？）と思われるものを含んだ水が湧き出して、灰色ゲルが楕円形状に沈殿している様相



他とは異質の水溜まり（金気色、鉄分の味、鉄錆びの臭い）の状況

「高清水小屋“旧本道寺奥の院”」 検証

以下の書付や絵図は本件を解く鍵が詰まった重要な史料である、「高清水通り」の存在意義と、“ここが「高清水小屋」跡地である”ことを決定付けた根拠の一つである。西川町史この他にも小屋掛けした「高清水」の呼称が出て来る。（以下は西川町史編集資料第六号・志津文書 P20 より）

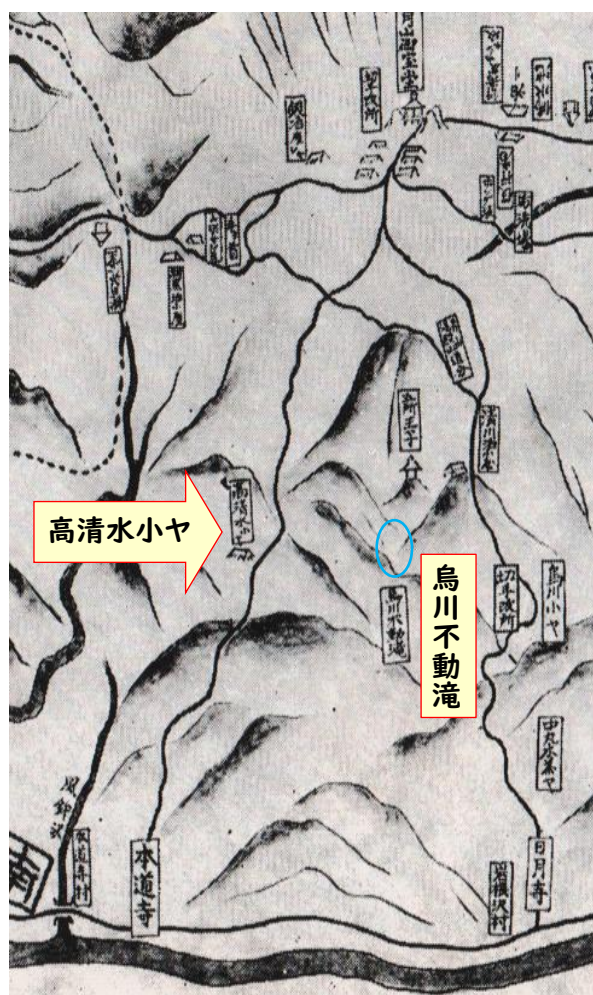
一、**高清水**旧跡之事、昔奥州秀衡公之奥方為_二御参詣_一ふ_二月山之獄_一下迄自ら運歩彼_レ為_レ成候_一申伝候。其印ニ_二而_一仙台塩釜六所明神之御神躰金佛ニ御鑄立、**高清水**の路辺ニ彼六所ヲ方取、一ヶ所ニ六躰宛三十六躰六ヶ所ニ立彼_レ置候。

其**旧跡神躰明鏡**ニ御座候。其時之宿坊源養坊_一申候_二而_一、旧院今ニ御座候。然間此寺_一高清水道之普請等ハ不_レ及_レ申、毎年六月上旬_一七月下旬迄、小屋ヲカケ家来_二に_一人_一為_レ登、本道寺_一之形・米・塩・味噌等改申候。如_レ此古来之由緒分明ニ御座候事。・・・

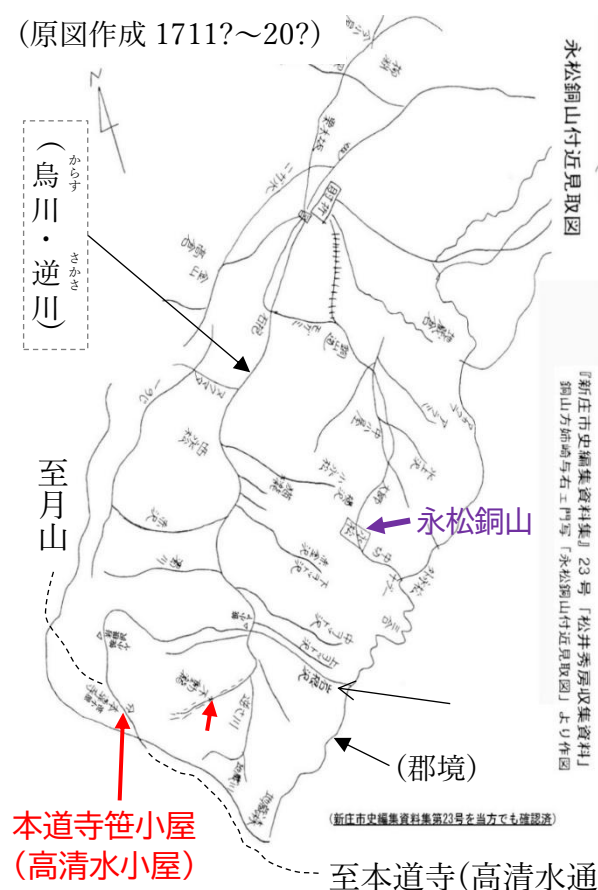
天和三亥年五月 （1683 年） 源 養 坊 宝 蔵 坊 本道寺 観海



①両造法論関連『湯殿山論争絵図』参照



②「湯殿山道中絵嚟」参照



③烏川流域の鉱山関連

新庄市史編集資料第 23 号参照

- ✓この年の旧暦 6 月 1 日は新暦 7 月 24 日～旧暦 7 月 30 日は新暦 9 月 20 日であった。
- ✓①と②は月山・湯殿山参詣・信仰に係る絵図であるが、③は鉱山関係の図である。旧本道寺管理下の「高清水小屋」(の地)は新庄藩側から見ても注目していた、きちんと認知していた証拠であり、大変貴重な史料となる。当然、山師・鉱山師はこの小屋にも目を付けていたであろうから、利用した(行者が少なくなった、いなくなった新暦 9 月下旬～10 月末・降雪前まで?)ということが十分有り得る、可能性大である。
- ✓これらの貴重な史料(①・②・③)は布施範行が収集した。

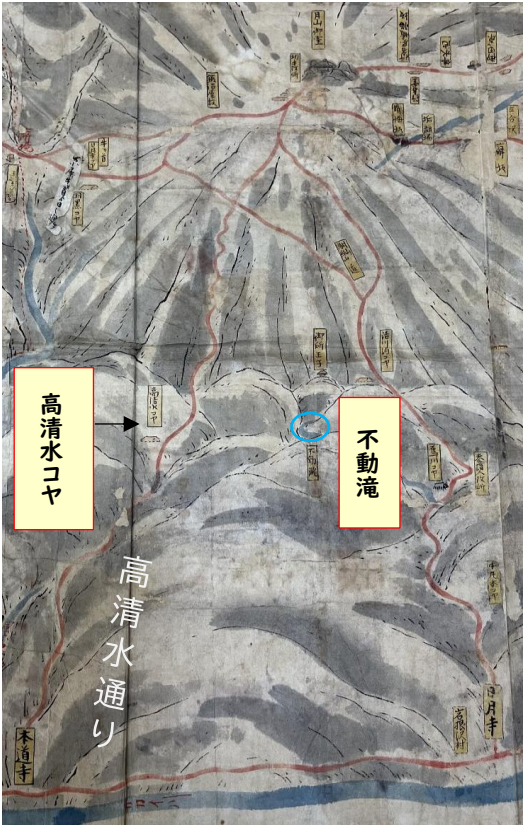
「高清水」 検証

「高清水通り」「高清水小屋」の「高清水」とはどこから採ったのか？

(A) 前頁 1683 年

道に名称を付けるならば、その道の特徴付ける名称を採用するはず、この道においては前頁上段書付に重要な解く鍵がある。

要約すれば「月山之獄（今でいう手盡坂）下に旧跡の高清水と称する地点があり、かつ、その旧跡は神舂明鏡（の地）という所だ」とする記述に特段の注目を要する。そこは「高清水」と称し、その地は、1683 年頃には既に遠い昔から旧蹟神舂明鏡の地とされ由緒ある場所なのだという。「旧蹟」が重要な肝である。また、（文脈からは）平泉奥州秀衡公の奥方が最後の6 個所目のこの地に金佛 6 体を奉納安置したという。

(B)	(C)	(D)
『湯殿山論争絵図』参照 寛政 4（1792）年頃	丁石 1822 年	現代版地形図上の位置関係
		

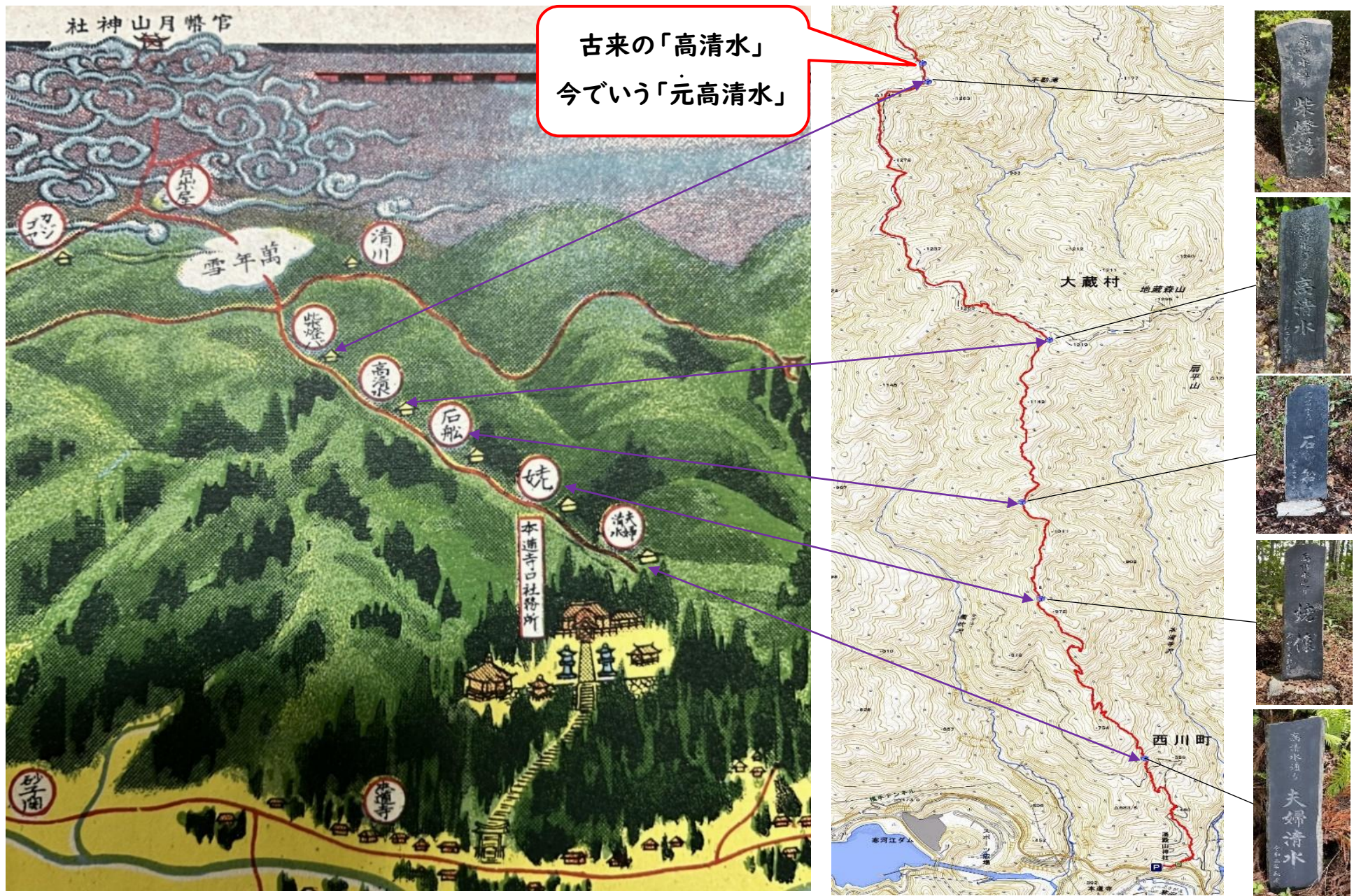
前記のとおり 1683 年頃には高清水の地に小屋を掛けていたものの地図（絵図）は付随していなかったが、1792 年頃の地図（絵図）には明示されたのだ。 さらにその先の 1822（文政 5）年の丁石寄進奉納事業においては、主意（趣意）「従是高清水迄九十六丁處」と刻した起点記念碑を建立し、「高清水」の地までの九十六丁間に里程標の丁石を 96 体置いたことを明示した。

そして、200 年後の 2022(R4)年にそのとおりの九十六丁（石）を発見した。そこは、起点から現ルートにおける距離は理論値 10,464m と GPS 測定 10,530m で近似している、差異はルートが少し変わった可能性大によるものである。

前記、(A)・(B)・(C) を踏まえつつ、本通り起点から幾度も歩き通し、地形・地勢の変化を観察しつつ、現代版国土地理院地形図と突き合わせ、それらの重層化・照合作業を踏まえて、古来「高清水」と称されて来た場所を、(D) のとおり現代版地形図において判定・確定せしめた。

現在の「高清水」という道標の有る水場は、**古来の、元々の「高清水」ではない**のである。

高清水通りに存在した掛け小屋を描いた絵柄に触れる。下図は大正十四年四月発行の三山登山案内と称するいわば観光パンフレット（抜粋／口之宮湯殿山神社所蔵）である。



絵柄は「高清水」という所に小屋を掛けたことになっているが、古来の「高清水」の場所は、本来は、「柴燈バ（令和建立の道標名は柴燈場）」より先（北方）であるが、大正パンフはその手前にある。つまり、**大正期は既に古来の「高清水（小屋）」は※撤去されて、人々からは忘れ去られた状況にあったのだろう。**その中で、涸れない清水が湧水する今の位置を「高清水」としたのだろう。それが伝承となり、後の人々は間違って伝承されて来た位置に基づき、今の位置に「高清水」道標を設置したのだろう。なお、西川町史（古文書）にもその文字は出て来るものの、今の地形図に表示していない、尤もこのような検証作業していないはずであろうから表記のしようがないことになる。（※）これに伴い参詣者が激減し、後記 38 頁のと通りの「元高清水」背後地ルートが廃道化したことの原因になったのだろうか。

ついては「高清水小屋（跡地）」の場所について、その相対的位置関係に諸説があることから次頁に整理した。姥像等石碑群の約 134m 北方先に前記 13 頁に書いたとおりの、そして大正期パンフにもある「姥小屋」跡地を確認した場所について、何かの書籍本に「高清水小屋」とか、「元高清水小屋」とかの記述を見たが、その跡地ではない、まったくの的外れといっても過言ではない。

このような揺れ（解釈のずれ）が生ずるのは、如何せん、江戸期までは今の国土地理院地形図と同様のものに記述することが出来ない時代であったからやむを得ない。

繰り返すが、T-FMO は 2022(令和4)年9月10日（土）に起点記念碑に対応する「九十六丁（石）」を発見し、人工的削平地を突き止め、『湯殿山論争絵図』等との照合作業を綿密に行ったからこそ、古来の「高清水（小屋）」の位置を確定出来たのである。今は、次頁E列の表記が正確である。

ところで、今日の道標位置である「高清水」は昔、その昔は何と称したのだろうか。

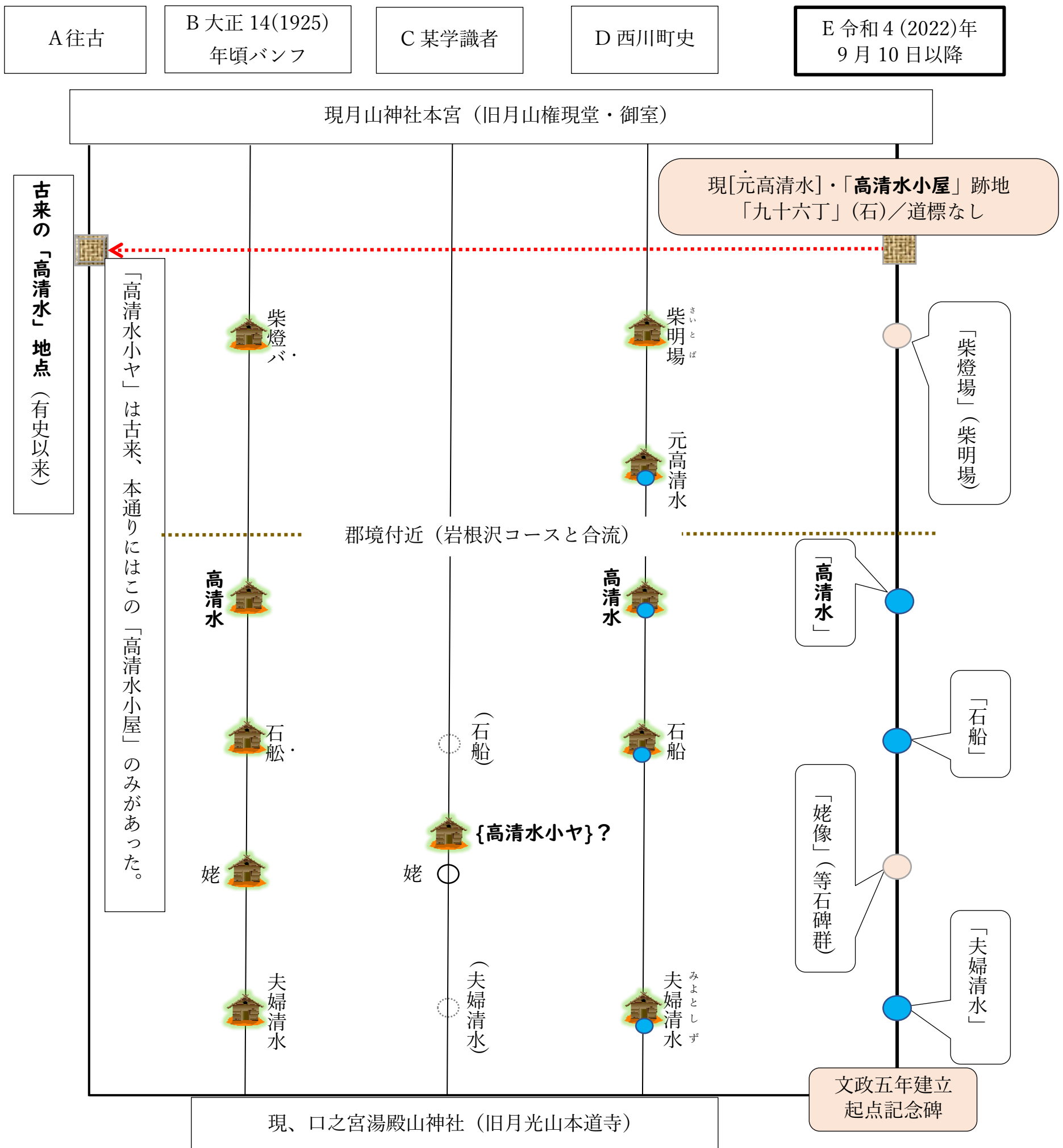
「高清水小屋（跡地）」諸説を整理

□ B・C・Dの諸説がある、あった。

□ B・Dの「高清水」の地は今の道標位置に同じだろう。ただし、特にB（Dも）の作成当時は、前記のような作業を網羅したという証拠記述はなく、机上判断を以って誤解した可能性大である。

小屋掛けに水場は必須だが、柴燈バは今の柴燈場だとすれば水場は^{N o n}なくそもそも可笑しい。

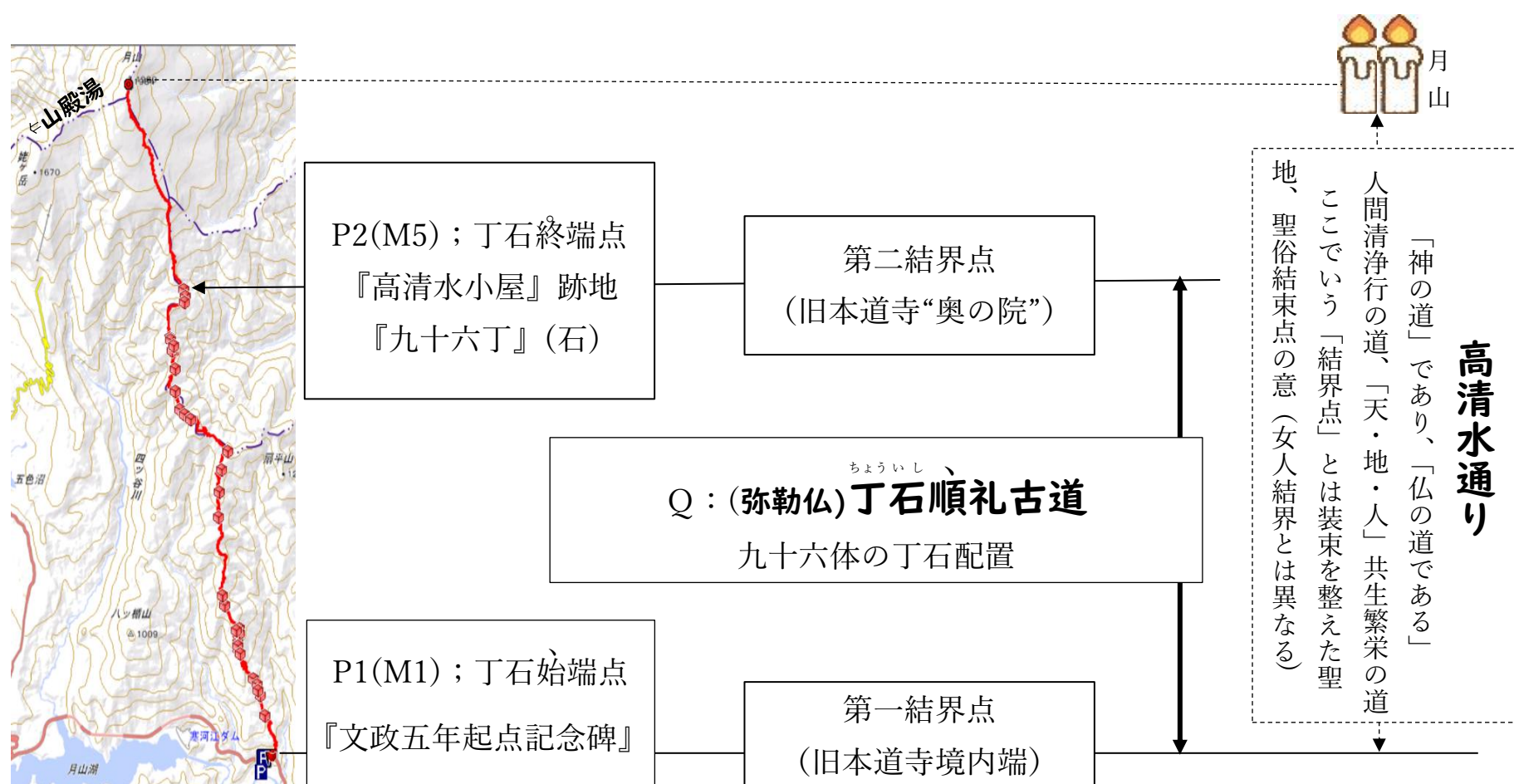
□ 今になって、道標を設置してしまった「高清水」(E)と、古来の小屋跡「高清水」の地名はダブルことから、後者跡地を今は「元高清水」と称することにした。



（註）家型印は参詣期間中掛け小屋（休所）の地点名である。また、青い丸印は水場であることを示す。
また、E「」内は令和2（2020）年秋～翌年に建立した現地道標名である。

「(弥勒仏)丁石順礼古道」の地形的因縁果

このような全体地形そのものは、当然であるが、地球創成時、天地初めて拓けし時に、日・月・星が住まう天がこの地を選定し、神仏を分霊・分身させて写し込んだ自然造形であり、**天地の胎動が生んだ必然である。人間が人工的細工を施して、計画・意図的に造った地形ではない。**



何らかの時代背景や事情があったかもしれないが、丁石寄進事業が持ち上がった時、30丁とか、60丁でも良かったかもしれない、しかし、「九十六」丁にしたのだ。「九十六」という数字に拘った理屈（後記43～44頁）はあったにせよ、**この全体地形を人間が意図的に人力を以って造成した訳ではない。**

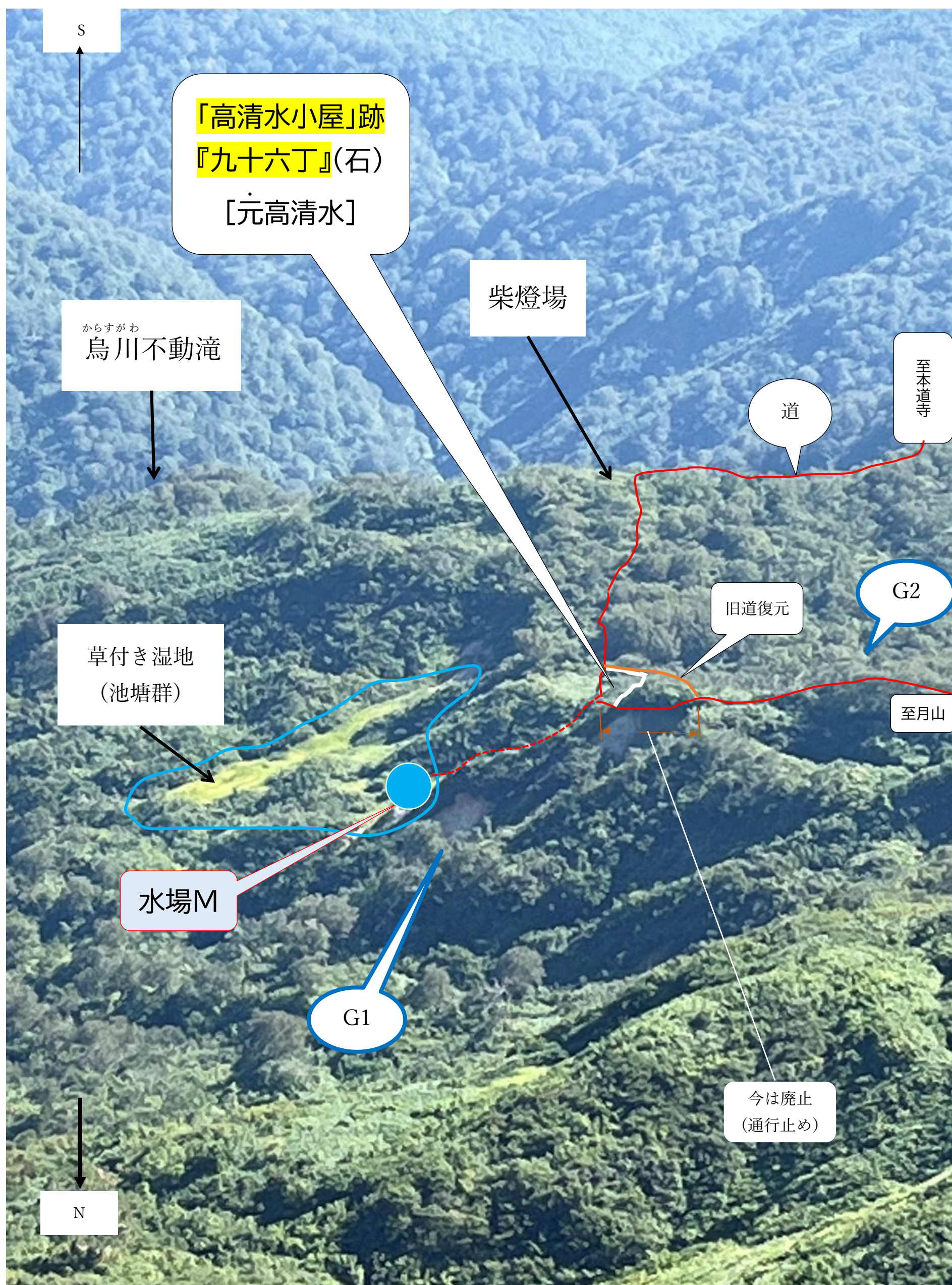
- ✓¹ P1(M1)は前記7～9頁のとおり旧本道寺境内東北端「道路原標打点地」（第一結界点）である。
- ✓² P2(M5)は次のとおりの地形的特異点である。
 - ・本通り山道の傾斜地勢において、当地より先は月山頂上まで登り一辺倒の急坂となる。
 - ・当地が骨太尾根筋中で最も幅が狭く、両側東西から二つの河川の支流源流部が、当地にわずか約35mを挟むように迫って、かつ、その最奥部（最高部）から伏流水が湧出している。
 - ・当地の目前は地理学的に月山全体地形中の断崖絶壁（浸食壁・構造運動の影響）になっており、眼前（視野）に鉾山・鉾石・鉾脈の露頭と思わせる地形が現れている。
- ✓³ このQ古道区間に奥州平泉藤原秀衡公の奥方（女性）が自ら運び込んで寄進した計36体の金佛像のうち、P2に6体を安置したことからは特別な地である。

そして、いよいよ——文政五(1822)年の数年前から——丁石奉納安置のことが持ち上がり、果たして、どこまで安置するのか、何体を安置するのか、始基点（起点）はどこにするのか、終基点をどこにするのか、関係者が相談・協議した。起点は「✓¹」のとおり**自ずから** P1、終点も古来「旧跡神躰明鏡」の地と崇め祀り、湯殿山に次ぐ聖地「本道寺奥の院」と通称していた当地 P2 が**自然に決まった**。

以上の地勢的・霊性的特徴を以って、本通り五大に宿る不思議な空間域と感得されて来た **P1・P2・Qの3点セットは、もう既に九十六丁（石）を安置すべきその目的に適う最も相応しい位置としても必然性が（運命的で）あったのだ。**

時代の流れを重ねる中で「天地人」三位一体——神仏の霊性、自然界、往来人が混然となって、その三者が必然的結合(因縁果)を以って今日までこのような時空（時間と空間）を醸成して来たのだ。

「高清水小屋」跡地の周辺域俯瞰



(※1) 本通りの下り、北側から（北を背に）南方を俯瞰した状景である。

(※2) 2022(令和4)年9月10日(土)大沼が撮影した。

(※3) ここにも不思議と謎が詰まった旧“本道寺奥の院”に相応しいエリアである。

しゃつきょう

M 6 – [天空石橋]（天空石堤）

約 1,733m の高地に、“これなあに？”

上り方向



下り方向



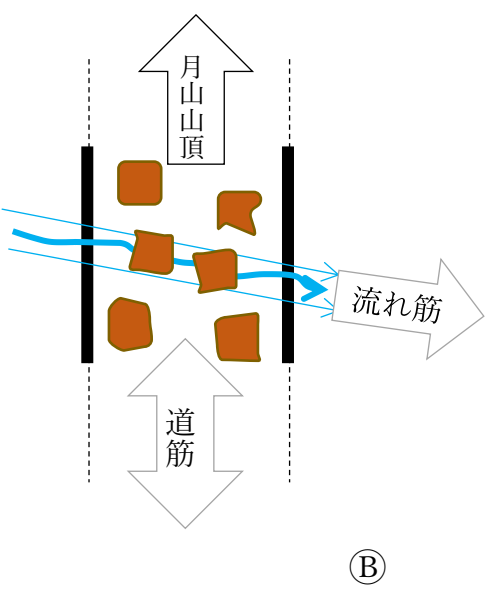
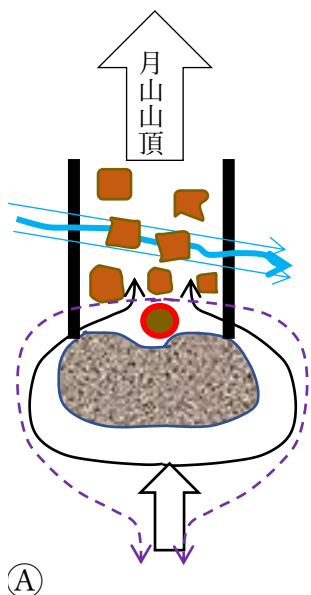
2022(令和 4)年 9 月 10 日(土)午前、両名で旧道ルート復元の調査・検討しながら下山中、**宮林良幸が発見し、少し離れていた大沼を呼び寄せ同行調査した。**本通り「大雪城」帯域旧道復元新ルート上にある。

- ・石橋の構造は、人為的石組み、長さ約 7.5m、高さ約 1.2m、幅約 1.2m（標高約 1,733m）
- ・現地の石を積み上げて、現地の石で組んだ橋、現地の石で組んだ堰堤にも見える中で、渡り歩く物という視点から橋と主眼した。

- ・大雪城の融水が集まって川流れを形成する唯一の地点である。
- ・人工物の鉄線などによる捕縛、あるいはコンクリート等の固着剤は一切使用していない。
- ・しっかりと石を噛み合わせている、積雪・残雪・風雪に耐えて少しも崩れていない。

天空と結ぶ、天空に架けた橋と観想したことから大沼が直感で「天空石橋」と名付けたもの。

その意味付けは布施と宮林の思惟——天台系羽黒山中興の祖「天宥別当」の天と、真言系湯殿山開祖「空海」の空を採用連結——による。もちろん活躍した時代は異なる、宗派も異なるが、今様社会における「相違を乗り越えた多様性尊重」の意義を加えたものである。たかが岩石の橋（堤）に入魂したのだ。

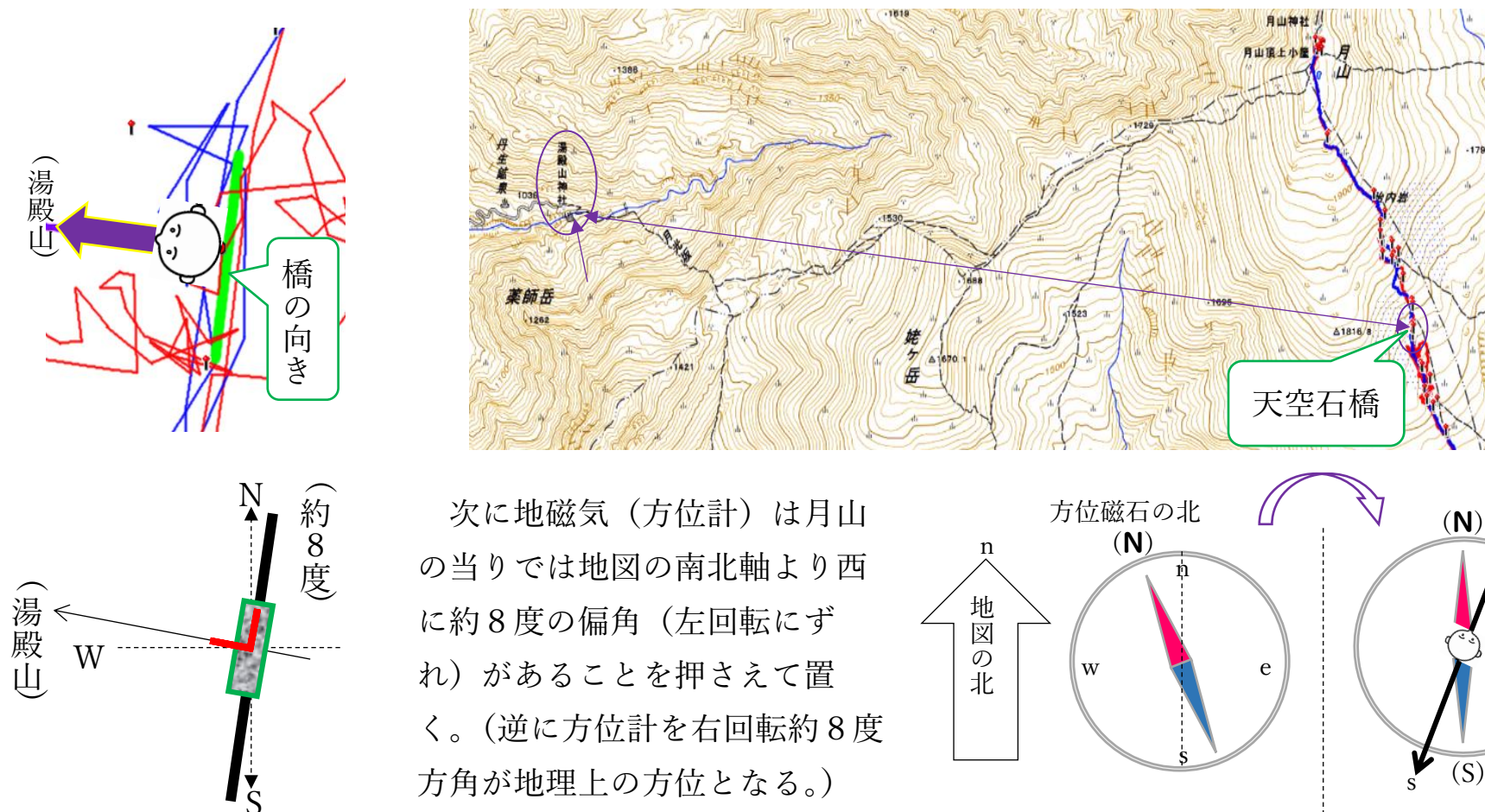


- （もっと、謎？）
- ①手前(片側)に障害岩がある、なぜ、わざわざ狙ったのか？
 - ②大雪城融水の流れ筋に対して直角ではない。なぜなのか？
 - ③月山を目指して歩くだけ、あるいは、本道寺を目指して歩くだけということからはここに橋がなくてもいくらかでもルートは取れるのに、敢えてこの位置に設置したのは、なぜなのか？

この橋（堤）向きの意味合い

大沼は橋の正確な向きが気になった。過去の当該石橋行きの GPS トラックログの再検証と、2023(R5)年 8 月 29 日(火)にデジタルコンパス（スマホアプリ）を以って現地確認した結果を、下図により説明する。

橋の中央に立ち、「大雪城」を正面に、橋軸に並行するよう両手を広げて顔を上げ、視線の先端を伸ばして行くとほぼ真西方向の「湯殿山」に突き当たる。ここで、①正面視線と橋軸方向は直角に交差すること、②橋軸方向は地理上南北から約 8 度右回転にずれていること、の 2 点が分った。



次に、橋の上に立ち、今度は橋軸方向に合わせた方位計は南北（北向き）を指す。本来橋軸の向きは地理上の南北ではないが、地理上の右回転ずれ約 8 度は、地磁気の左回転ずれ約 8 度と一致することにより相殺され、見かけ上は、地理上南北に一致することになったのだ。

要約すれば、当時の叡智が、湯殿山を向きつつ 90 度右回転の橋軸方向が南北方位と一致するこの一点を本通り上で射抜いたのだ、お見事である！ しかも、この地点の全体地形は当然自然造型である中においては『**必然の神**が“ここ”と案内誘導したことにより運命的に顕現したのだ。

このような奇異なものを、古来「西の伊勢参り、東の奥参り」と称された東の出羽三山はその最高峰月山頂上近くの高い場所に築造設置したからには、明確な意図を以って企画・設計した稀有な人（里・山先達か、山師か、本道寺三別当か、その中のひとりか、任侠悪党？か）がいたことになる。その企図を想像して見る。

問題は、このような可愛らしい橋（石堤）を何の目的で設置したのか？

T-FMO は月山に係る様々な関係者（出羽三山社務所、月山小屋関係者、手向宿坊関係者、月山に精通した登山愛好者、本道寺周辺の長老、西川町役場関係者、西川町土木建設会社、知人・友人など）に聞き取りを行ったが、「初めて見た、存在そのものは今まで知らなかった。」という声であり、今だに正体不明である。

（今更正直に言えない、今更しゃべってはならない禁忌の理由があるはず、的中に値する事情を想像しているが、今更追求する必要はないだろう。）

目的を探る鍵は、次の注目すべき二つの切り口にある。

高清水通り“謎の源流Gスポ”

(1) 切り口一つ目は『向き』

○^a；橋の上に人が立ち両手を広げたその姿において、湯殿を向いた目線と両手方向は90度の開きとなる、つまり、人間の中心はその両方向軸の正中交差点となる。すなわち左右と上下が交差する点、すなわち「もの・こと」の集中と発散が交錯する点であり、「人と橋」の中心が重力線上で重なる全体統合の一点である。よって、ここで陰陽二元対立で蒙昧する自己撞着からの人間脱皮（統合視座修養）を誓ったことであろう。

○^b；橋の向きが合致した南北に注目する。古来易経等中国文化の影響受けて「南北」方位に重要な意味を与えている、北に冬至、南に夏至を配当し、北には天空不動の星「北極星」が鎮座し、かつ、同星を神格化した陰陽二元統一の太極の居所と見做して来た中において、四季の順当な変化による適度な日照降雨と五穀豊穰、ならびに社会安定を祈ったのだろう。

(2) 切り口二つ目は向く対象の『湯殿山と大雪城』

特徴を対比化すると下表のと通りの火と水、熱と冷、日と月の陰陽二元相対(待)性自然原理具象化の構図が読み取れ、祈りの舞台としたことが見えて来る。このようなバランス性はお大師（空海）晩年の大書「秘蔵宝鑑」で熱く説いた「^{ひぞうほうやく}中道^{しょうかん}正観」の視座に繋がる。

思想的根拠			左記対応の仮説	
陰陽二元	陽	陰	□ A ; 「湯殿山（御宝前）」を拝む（観念遙拝）祈りの舞台 □ B ; 「大雪城」を水源基点、すなわち源流部の旗印として『水神』への感謝を捧げる祈りの舞台 □ C ; 『水』に対する堰堤機能（洪水防止・水量調節に係る一時貯水）を託す祈りの舞台	修験道の聖水信仰
対応御山	湯殿山（御宝前）	月山（大雪城）		
二元代表要素	熱・火	冷・水		
本尊	大日如来	阿弥陀如来		
本件	□ A	□ B ・ □ C		
ジェンダー	（男・女）	（女・男）		
俯瞰大局すれば、宇宙－ 天空と大地に対する人間の感謝と祭儀の舞台 に見立てたのだろうか？				

- ・少し離れるかもしれないが、事情や訳ありで月山には行けたが湯殿山に行けない（逆もありか）人、例えば、羽黒から本道寺に至る直行旅人、山師・鍛冶職等の礼拝所？ 月山鍛冶の隠れ作業所？ 小さな手作り舟を持参、浮かべて「石船」に共通する意味合いで祈ったのか？
- ・このような場の一点の選択は魔性の成せる技ではないか！

以上を全体総括の上で、

✔今となっては、景観を損ねる等の実害や環境への悪影響を齎すものではなく、一方で人工的なものである。

✔過去に如何なる事情があったにせよ、爪を立て咎める必要はない、今となっては新しい意味付けをすれば良い。

よってここは、明白でない設置目的はさておいて、ロマンを掻き立てる素晴らしい貴重な歴史遺構である。（産業遺構とは見なさい）

ここは「月山水源聖地Gスポ」、あるいは「高清水通り“謎の源流Gスポ”」（Gは great、スポは spot）と通称する。

(半体) 地蔵菩薩 (?) 像

2024(R6)年 10 月 17 日 (木)、同年 10 月 25 日 (金) 大沼の単独調査を踏まえた記録である。下図「**高清水通り**」沿いの**ア**場所において、「半体地蔵**ア**下半分」と記述した周辺状況は同図**①**のとおりで、拡大すると同図**ウ**のとおりである。ここで、同図**ウ**における**ア**に注目する。



①



上半分は付近を探しても見付からないが、衣装のような線刻からして地蔵菩薩像であろうと推測している、同**ア**右側に判然としない刻字を視認したことから白墨を塗布して確認した結果は右図**カ**のとおりで、「**岩根澤 本道寺**」と刻されていることを突き止めた。いわば、道標（道しるべ）も兼ねていたということであろう。年号など他の刻字はないように見えた。まずは、これを判明せしめただけでも大変良かった。高清水通りのあのような高地に、諸々の篤い信仰心を集めた地蔵菩薩に道しるべ（道分け）を託して祀ったということだろうか。

さて、この位置にあって「岩根澤 本道寺」はどのコースを指したのかに対する考察である。この高清水通りをまっすぐ南下すれば本道寺に至ることは納得する。問題は岩根澤向けだが、るる検討した結果は、右図**キ**大正二（1913）年一月二十五日印刷国土地理院地形図における**①**ルートであったことと推測している。なお、建立年不明なことからは今の「清川よこみち」との関連有無は見通せない。これは、旧清川道ルート（今でいう「高・清直路古道」）における「月山 湯殿山 追分碑」に対応する「高清水通り」の追分碑的存在（道しるべ）であったと推測している。

なお、**B**は何なのか、墓石の一部か、あるいは、他の事例からはお札を入れる石祠でもあるようだが下部は見当たらない。これは 2023(R5)年 9 月 14 日(木)、山形市内の堀米晴夫さんが気付いて引上げてくれたものだ



カ

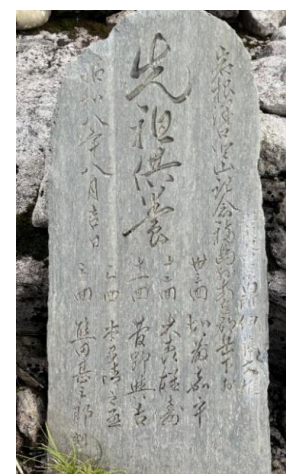
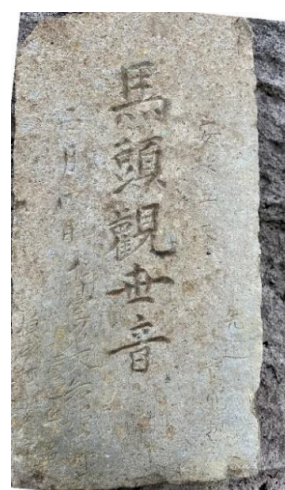
岩根澤
本道寺



キ

「胎 内 岩」

登山道沿いにあり、この存在と多数の石碑類があることは知る人ぞ知る所である、月山奥の院と称され、祖霊信仰、先祖祭祀を象徴する所と云われて来た。大沼は 2023(R5)年 10 月 8 日（日）の調査で初めて気付いたが、それらの中に多数の墓石があり、さらには**女性戒名の墓石も多数あることを突き止め、このことを文書化の上で公開することが出来た、初めての取り組みではないのか。**他にもあるがここでは以下の 6 体のみを記載する。



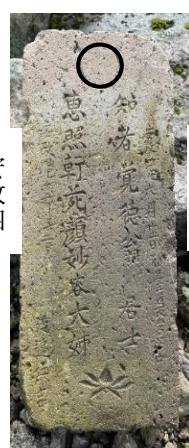
（この 3 体は純供養碑）



天保口



嘉永口



安政四

安政四

（この 3 体は墓石）



2023(R5)年 12 月 7 日（木）月山の山塊を知り尽した・精通したある方（ベテラン）に、これらの写真を見て貰いながら話題に出した処、開口一番“従来通説の女人禁制の見方に問題提起？”という趣旨の話をされた、ちょっとびっくりしたというか予想外という表情であった。私の問題意識の姿勢は間違っていないと内心嬉しく思った。

なお、右は閉山後の 2023(R5)年 10 月 8 日(日)に撮影したものだが、閉山した月山神社本宮（山頂）内部にある多数の、神仏の霊威・神徳を崇める霊石・供養碑がある、霊位とか年忌法要の年次などが刻されているが、男女を問わず**故人の戒名を刻した明らかな墓石と思われるものは見当たらなかった。**尤も、月山大権現・月読尊が座す神聖な空間に遺骨と死霊と一体の墓石を置くことは許さなかったであろうか。**墓石の頭部には円弧を刻しているが、ここの霊石・供養石にはない。**



ところが、この本宮以外の胎内岩や来名戸神や清川行人小屋前には、故人戒名を刻した墓石、それも、女性戒名のものが沢山存置しており、こことは大きな状況（状態）の乖離がある、よって女人禁制との係りで重大な疑義（課題）を惹起するものであり、全数の学術調査を希望するものである。

「禅定尼」の墓石

月山ユートピア・ランドにおいて、以前より「ここにある墓」が気になっていたものの余り強く着目して来なかった。しかし本年、大沼は
2024(R6)年9月4日（水）、月山に行った際に撮影した下右写真に注目し、女性戒名墓石であることを突き止めた。

寛延^{かんえん}4 未^{ひつじ}年（西暦 1751 年）、江戸時代の中期に建立（奉納安置）したものである。中央部の刻字は「風月姉清禅定^に」（女）である。なお、男だと「禅定門」になるという。

その意味合いについて、ネットで調べたが直接的な回答は見当たらず、A I を参考にすると、「風月^{ふうげつ}妙清禅定^{めうしやうぜんてい}尼^に」は禅宗（曹洞宗）系女性修行者の戒名であるという。よって、禅の、それも女性の修行者の墓石、いわば仏門に入った女性の墓であることが分かった。ここ月山の風光明媚、自然至高美の域で禅道を以って修行し、ついに悟りの境地に至った理想的な女性像を表現したのではないか。曹洞宗信者の女性が、天台宗領域のここらまで来て、修行した証拠の一つであると素直に読める。

左のものも墓石のように見えるが、刻字は風化摩滅著しく解読に至っていない。あるいは、右のものの事情・由緒・趣意を刻したものだろうか、戒名らしきものではないのでこちらかもしれない。これも、当該域においてはとても希少価値の高い重要な史蹟の一つであろう。



寛延^{かんえん}四未年
風月妙清禅定尼
四月十五日

月山の万年雪「大雪城」の有り様

おおゆきじろ

里・麓の集落の生活に潤いと水の恵みを齎し、白く輝く月山の万年雪を古来「大雪城」と称え崇めて来た今世の状況。近年の地球温暖化の影響有りや否やの科学的・気象学的な論説はさておき現地のこと。下写真は2022(R4)年9月10日(土)、月山からの下り、高清水通り沿いの残雪の状況である。



下写真は約1か月後の2022(R4)年10月13日(木)、月山からの下り、高清水通り沿いの残雪状況。円内の所に残雪があった。右報道のとおり、10月6日(木)には降雪があったようだが、この日は山頂で霜柱やしが(晶氷)は見られたものの、雪は消えていた。

これらの状況から、「大雪城」ここの残雪は万年雪となって、本格的な降雪期を迎えることになることだろう。万年雪があるという確証を得て、無性にうれしくなった。(なお、年によっては消えるとされている。)



山の“園芸・盆栽塾”フィールド

本通り道沿いに植生し肉眼の視野に入る景色の一端、他にも沢山あるが主なもの。個性豊かで珍奇な表情のものが手に取るような範囲に点在している。

(ぶな・山毛櫨・樺・ブナが中心、ナラ・檜も、本通り上視認範囲にダケカンバは?)



おぶく
御仏供杉二代目?



妖艶?



孤高のおじさん?



仲良し?



片目覗き?



脳みそこぶ?



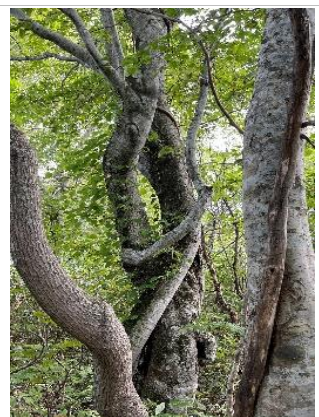
人面リス?



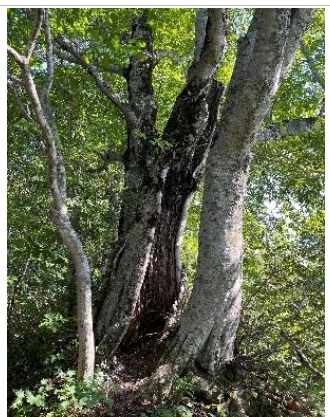
頬ずり?



二股絡み?



抱き付き抱擁?



皮1枚?



大ねじれ?



大裂け?



悟りの窟行場?



めおと
夫婦?



負けず嫌い?



分れて再会?



6人兄弟?



大穴がんば?



斜 檜?

ビューポイント

〔元高清水〕あたりまではブナ林だが、鬱蒼とした中にも、東西両方面の所々に素晴らしい眺望がある、立ち休みの好適地である。ここには主だった一部を掲載する。



東方、手前は本道寺沢
八聖山の峰々他



東方遠方に蔵王他の奥羽山脈



西南に寒河江ダム（月山湖）



北方に月山山頂全景
（本通りで唯一のロケーション）



西南遠方に朝日連峰



北東方向に清川行人小屋を
初めて肉眼で視認



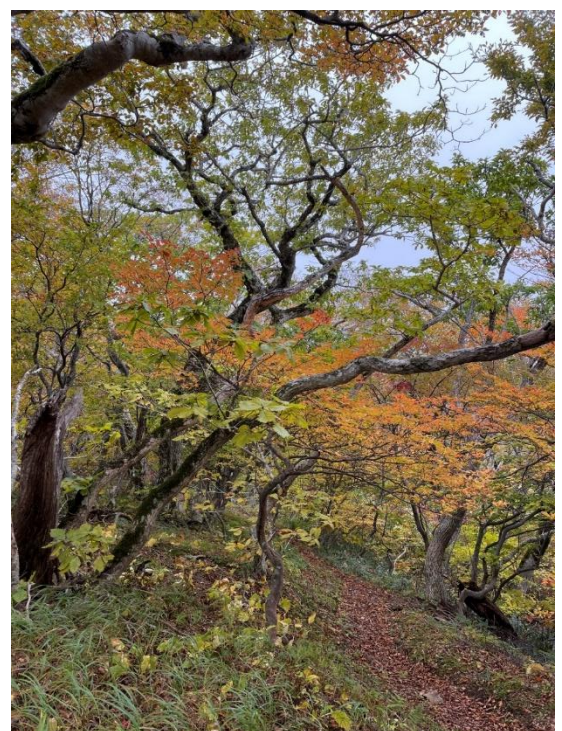
見晴台（祭儀の舞台）



左記見晴台から月山方向を望む

柴燈場（西川町史には「柴明場」^{さいとば}）

本通り「やまみち」と、点在する丁石



- ・高野山以外で、距離約 10.5km にも亘って 96 体もの丁石が安置された古道（歴史の道）は珍しいのではないかと。（2023・令和 5 年末現在の現存確認は 30 体）
- ・起点から約 11.5km 先の清川行人小屋分岐点前後短区間は、道は少し掘れてトンネル状になっているが、危険箇所は道普請で修復、それ以外のほとんどは林間開放的な空間である。

他の丁石の事例

- ・羽黒山随神門から山頂まで約 2 km の表参道（石段）に 18 体が奉納されたという。
- ・本通りと同様の自然石で少し大きい。
- （付録に記載する。）

西川町志津手前の六十里越街道沿いに本通り類似の丁石 2 体が確認されているという。



- ・高野山「町石道」の町石
- ・全長約 23 km（うち高野山内は 4 km）に合計 216 基建立されている。
- ・大きさの平均は、高さ約 3 m、幅約 30 cm、重量約 750 kg

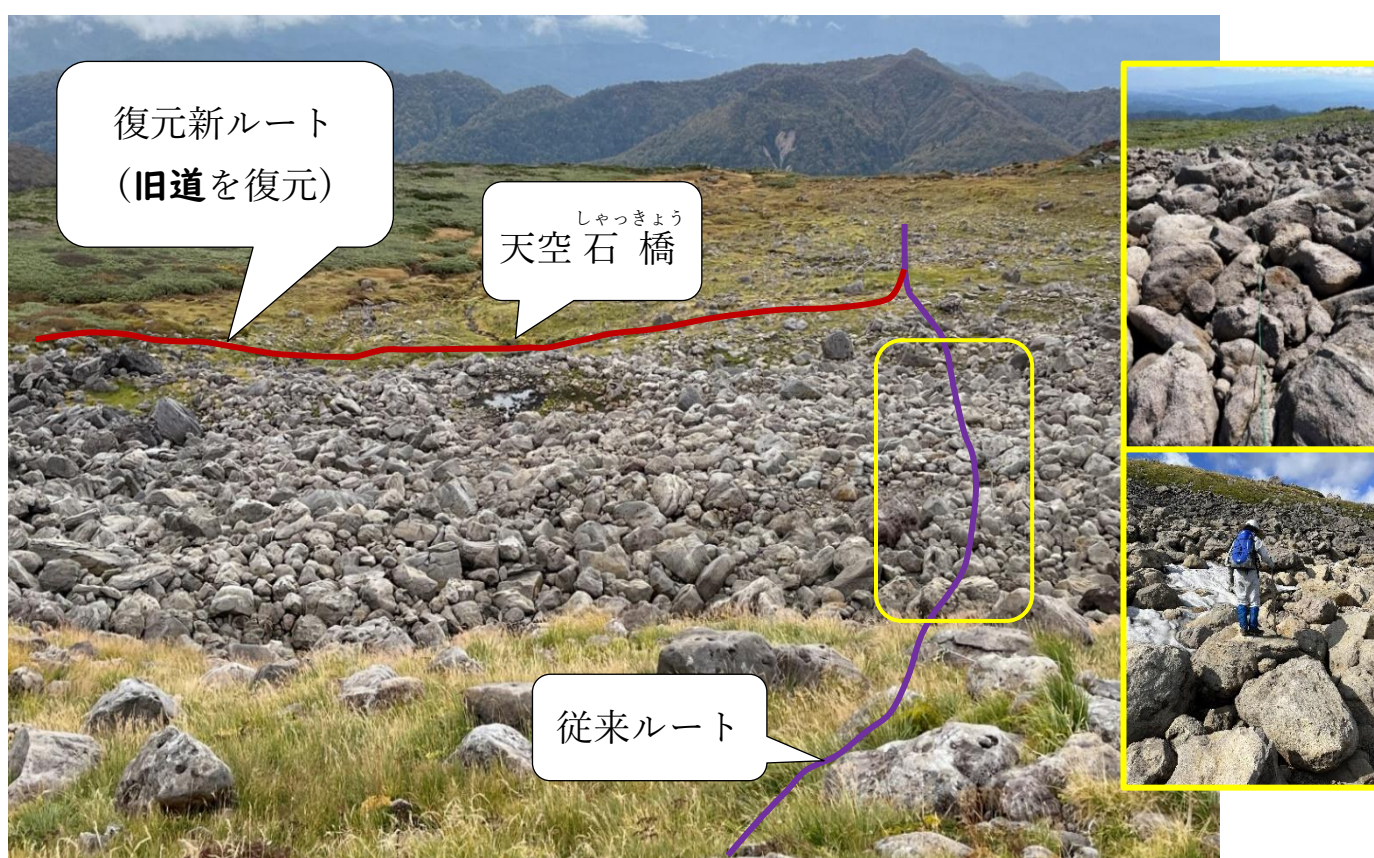
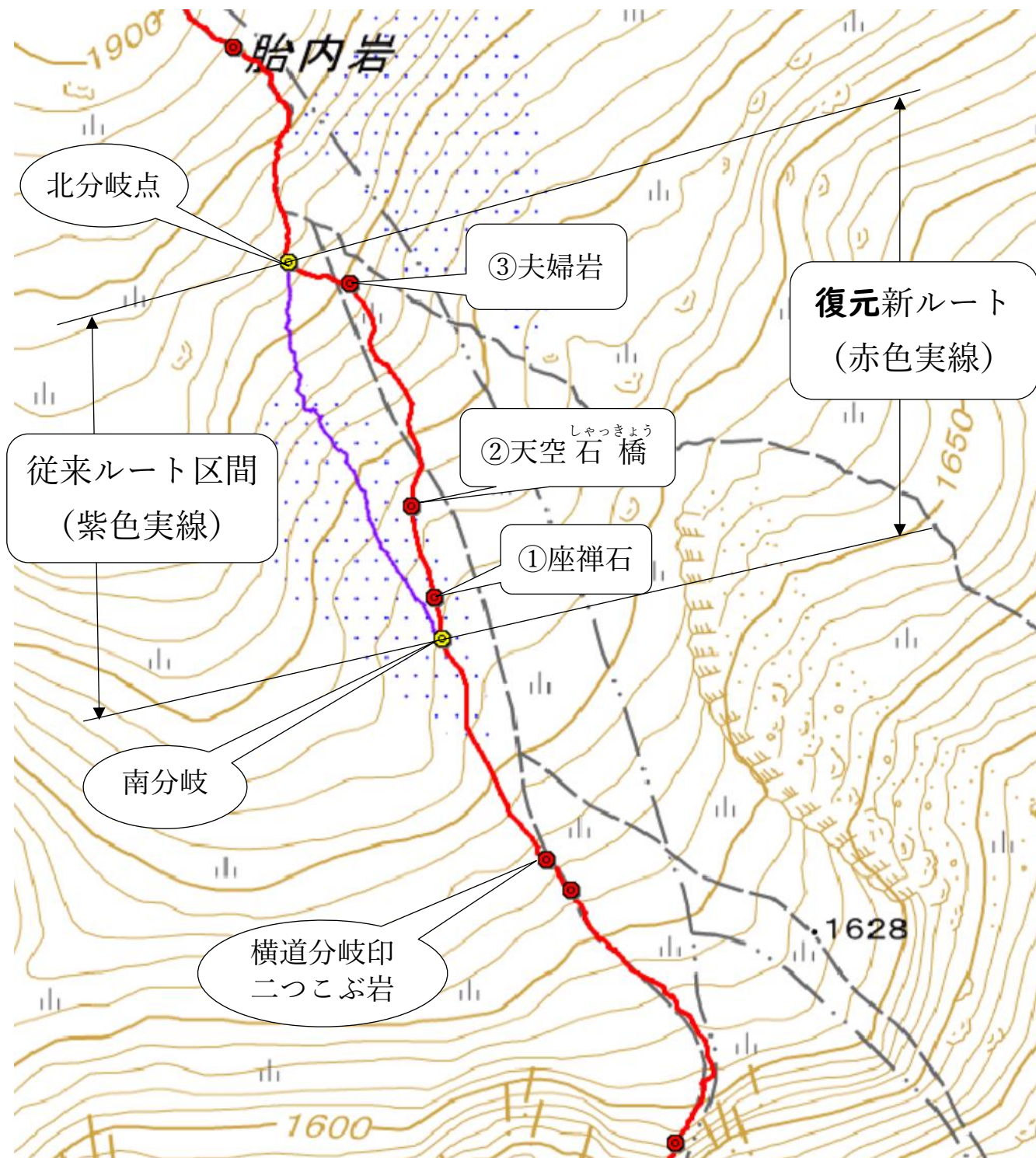
本通りの安全対策（１）「^{おおゆきじろ}大雪城」帯域

従前は、胎内岩直下に広がる「大雪城（万年雪）」が消えて行くと、従来ルート上に大きな岩が表れる。中には鋭角的なものも露出しこれらを飛び跳ねるように渡って行く区間となり、融雪後は危険地帯に変化していた。

宮林良幸と大沼は安全対策を検討・調査する中で、少し東側にずれた「旧道ルート（点在するケルン状の目印岩）」に気づき、こちらに誘導ロープを張って復元した。

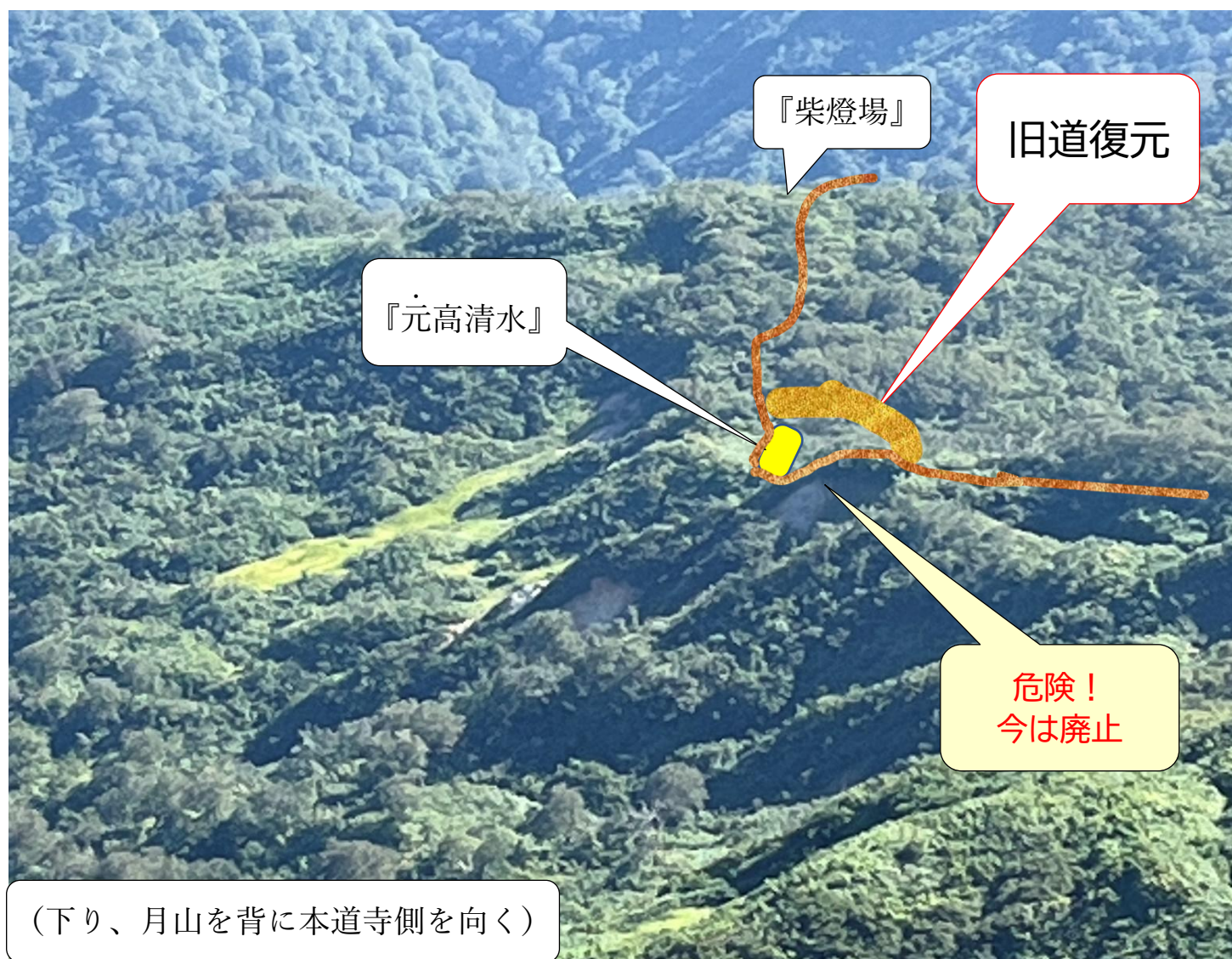
（R4）年10月に完了、13 m ほど長くなっただけである。なお、**新道開削ではない**。

2022



歩幅間隔に大きな段差は殆んどなく、とても安全・快適に昇降出来るルートに変貌した。草花は殆んどなく、埋もれている大きな岩体上の砂利道を歩くルートとなった。よって、環境に支障をきたすものではない。

本通りの安全対策（２）「元高清水」背後地



①・分岐（入口）



②・途中



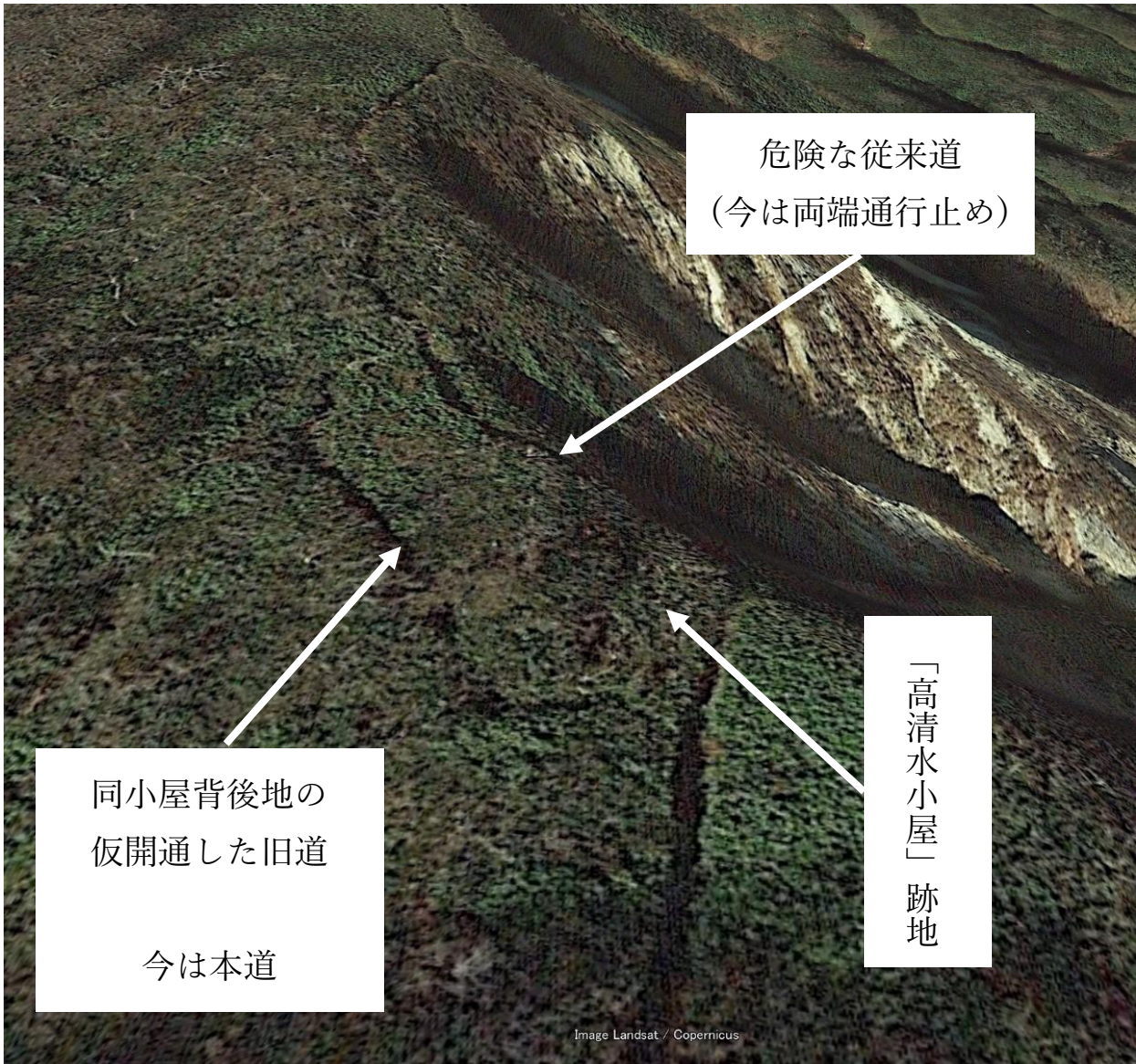
③・出口④へ



④点で（上から下へ）

背後地復元ルート 衛星写真

Google 3DEarth で鳥瞰して見た。



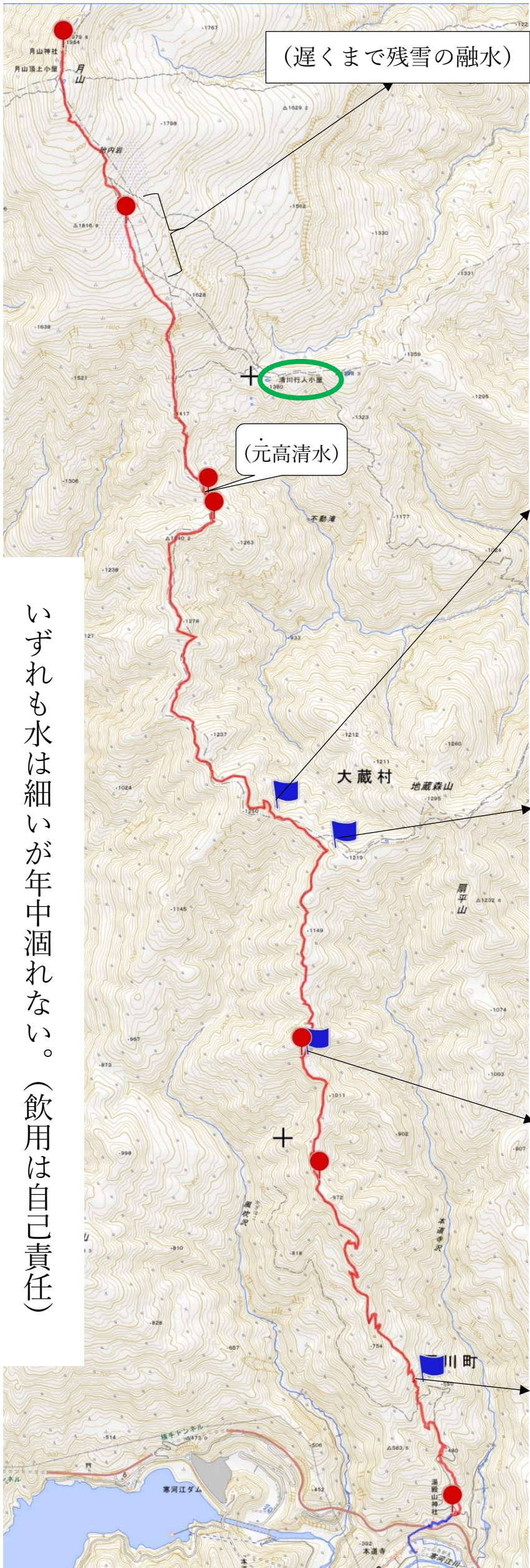
画像取得日 2022 (R4) 年 11 月 28 日とある。

2022 (R4) 年 11 月 26 日(土)に仮開通しておいたが、左上写真はその直後の 11 月 28 日グーグル撮影のものである。2 年前の下写真にはなかったルートが明瞭に写っている。
なお、間の 21 年は積雪下の撮影で不明瞭に付きここには掲載しない。



画像取得日 2020 (R2) 年 9 月 30 日とある。

「高清水通り」水場



「元高清水」近傍にも水場を欲しい！（東西に水源点は確認しているが、一方は45度急坂の30m先、他方は緩斜面湿地の中にて、効果的な方策について思案検討中。）

名称	距離	標高	状況写真
	(目安)		
サカサ清水	約 7,154 m	約 1,180 m	
高清水	約 6,354 m	約 1,183 m	
石船	約 4,853 m	約 1,044 m	
夫婦清水	約 1,258 m	約 587 m	

水場装置

登山において、今時、スタート時から飲料水を背負うものではあるが、山道沿いに水場があると、いざという場合に心強いものがある。

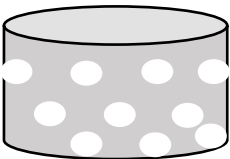
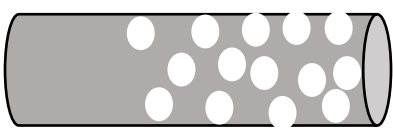
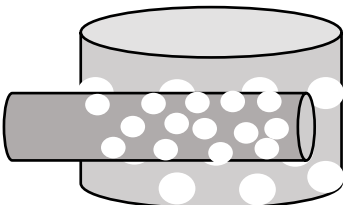
事例写真



本通り実際適用例



上は佐藤正幸さんの口之宮湯殿山神社境内に係る Facebook 投稿写真より拝借したもの、下はそれをヒントに山道水場給水対策装置の基本構図である。

A		集水部 穴の開いた太めのパイプ（土管）を垂直に埋める。
B		吸水部 給水パイプの先端部に穴を開ける。
C		水場装置 Aの横腹にBを差し込む。

高清水通りには、要所に水場があり、夫婦清水の他は涸れないものの少量である、また、今の道標「高清水」より先に水場が欲しいことから検討した。大掛かりではなく手細工で安く仕上がるものを念頭においた。

「石船」については右上大沼細工の装置で 2023(R5)年 7 月 3 日(月)に対策した。「サカサ清水」については、元々は水場と見ていなかったが、染み出す水の出食いを見て、銅山川（烏川）支流サカサ川源流部に、右下宮林良幸細工の装置を 2023(R5)年 8 月 22(火)阿部剛士と大沼が設置した。

2023(R5)年 11 月 9 日(木)本年最後の点検を行ったが、集水部は枯葉や流れ着いた土砂で埋まっているように見えたが、十分な水量が先端から流れ出ていた、うまく装置が機能していると見えた。ただ、パイプを空間に出すということは、積雪で押されるであろうからは融雪後の初夏においては、手直しが必要になるであろう。（両方とも手直しを図った。）



「石船」

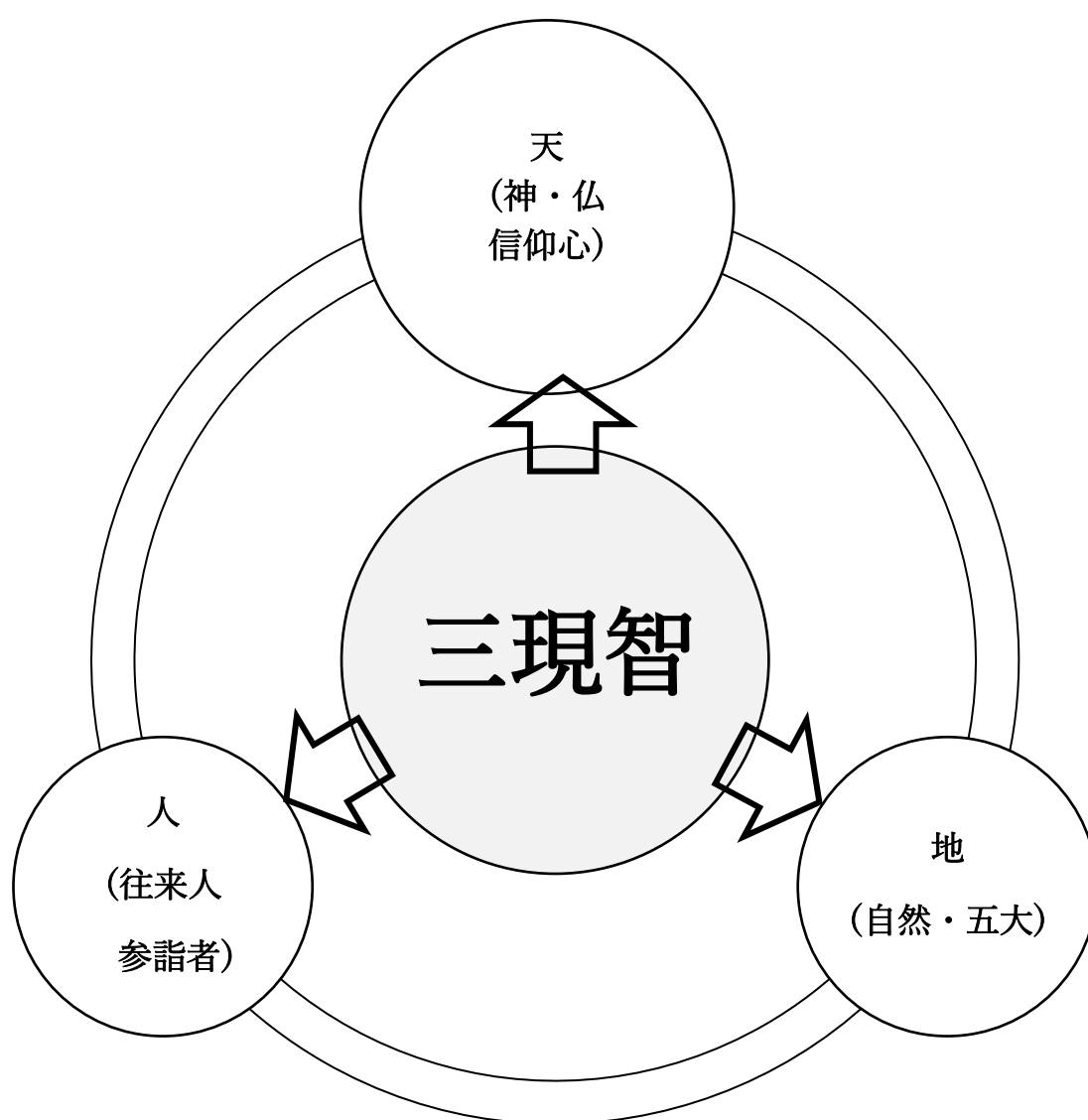
「サカサ清水」

第 II 部

縦 横 交 差 視 線

前段を踏まえ、主に「三現智」の中で直覚した不思議さについて、「天・地・人」、すなわち「天（神・^{かみ}仏、^{ほとけ}信仰心）－地（自然・五大）－人（往来人・参詣者）」にからめた赤心イメージングで書き込んで行く段であります。

神仏に係る考察は、往時の参詣者の心情を推察しつつ、一つの切り口・仮説・新見解を以って記述した部分があります。



「三十六」と「九十六」の聖数融合

本通りへの二大寄進奉納大事業で採用された二つの聖数の意味合いは如何に？
（より細部の根拠は報告書に記述するが、ここでは結論のみを概略する。）

- 1；奥州平泉藤原三代秀衡公御前様（奥方）が、本通りに1個所当り **6** 体を **6** 個所に計「**三十六**」体の銅像・金佛を寄進した。この一つの事柄は、年代が異なり、かつ発出元が異なる二つの古文書に記録されており、信ぴょう性の高い史実であろう。（西川町史編集資料第六号、第八号・三・・・もしも、デタラメというのならば、これを町史に載せていること自体が問題となる。）
- 2；旧本道寺開基の大同四（西暦 809）年から 1,013 年後の文政五（1822）年に、達磨寺村（今の中山町）等関係者が丁石「**九十六**」体を寄進奉納した。

ここに「**三十六と九十六**」二つの数字が表れた。今昔を問わず、大事業実施に当っては、その実施目的・理由を明らかにするために、また、諸々のコストの必要性を説くために何らかの智的な意義付けを図ったはずである。ち密な計算の上で考え抜いた複合的な意味合いが見えて来た。

予備知識（前置き）	老子・道教等による、中国往古よりの宇宙創成原理（数理性自然法則）を押さえる。 「一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。」 「一、二、三」を基準聖数と呼ぶことにする。 ✓ 「一」は宇宙創成の初源で何もかもが未発の混沌世界をいう。存在エネルギー発出の原点をいう。「無分節・平等相・無分別智界」を象徴する。 ✓ 「二」は相対(待)性原理の種子、陰陽二元をいう。森羅万象の胎動基点を意味する。また、「分節・差別相・分別知界」を象徴する。ここでは後記 44 頁のとおり「二座」等を指す。 ✓ 「三」は、森羅万象の躍動・分化発展の基点をいう。また、空間軸「天・地・人」の三才、時間軸「過去・現在・未来」の三世、「欲・色・無色」の三界を意味も有する。ここでは後記 45 頁～のとおり「大日・阿弥陀・薬師」の三如来も含む。		
	上記聖数の基本（初歩的）演算を施すと、6 になる。		
	加 算	$1 + 2 + 3 = 6 = 3 + 2 + 1$	中央の 2 が共通し、左右両端で 1 と 3 が共通する。
	乗算 A	$1 \times 2 \times 3 = 6 = 3 \times 2 \times 1$	
	乗算 B	$6 = 2 \times 3 = 6$	○ 上の自然数の加算・乗算で左端の 1（未発・混沌）を除く 2（陰陽二元）と、3（躍動基点）の乗算となる。 ○ 自然数最初の偶数 2（陰）と、1 を除く最初の奇数 3（陽）の積である。

「6 と 9・9 と 6」の合せ技の意義

・1～5（片手）までの生数に着目する。1，2，3，4，5 の中で、陽の奇数を合計すると、 $1 + 3 + 5 = 9$ 、陽が長じた数字である。また、陰の偶数を合計すると、 $2 + 4 = 6$ 、下記より陰が長じた数字である。陽の長と陰の長を並立すると「9 6」となり、陰陽調和の印として誠に縁起の良い組合せとなる。その差異は 3 である。

・6～9（もう片手）までの成数に着目する。6 は成数の初めの数で偶数は陰、9 は成数の終り（10 は桁上がりにつき無視）で奇数は陽である。初めと終り（両端）、偶数と奇数、陰と陽、見事に相対調和が取れている。6 は陰中の極数となる。（成数中の陰は偶数の 6 と 8 の二つであるが、陰は負の領域で見る必要があり、絶対値の小さな方が実質は大きくなる。） また、9 は全陽中の極数となる。

大化操作 だいか	(加)	6 + 9 = 1 5		(並び数の和) 1 + 5 = 6		6 と 9 ⇒96 (増化の逆で並べる)	96 ∨ 36	3 と 6 と 9
	(乗)	6̇ × 9̇ = 5 4		(並び数の和) 5 + 4 = 9				
	小に大で操作 (価値の増化)			(上下の和) ↓ ↓				
				6 と 9				
小化操作 しょうか	(減)	9 − 6 = 3		3 × 2 = 6	(6+3=9)	6 と 3 ⇒36 (減化の逆で並べる)	36 ∧ 96	
	(除)	9 ÷ 6 = 1.5		1.5 × 2 = 3	[3・6・9]			
	大を小で操作 (価値の減除化)			陰陽二元の 2 で復元化				

三十六のこと

- 例えば 9×4 、あるいは 12×3 ではなく、なぜ **$6 \times 6 = 36$** なのか？
- 密教根本經典の金剛頂經「自性及び受用と変化ならびに等流と、仏徳の三十六は皆自性身に同ず。法界身をあわせて総じて三十七を成ずるなり。」に係る。三十六徳目は大日如来が弟子三十六尊に課した修行徳目であり、これに由来する。(36+1=37、37-1=36、1は大日如来)
 - 弘法大師は高野山の奥之院に入定される時、“ われ、閉目の後は兜率天^{とそつてん}に往生し、弥勒慈尊^{みろく}（弥勒菩薩）の御前に仕え、五十億余年（**56 億 7 千万**年後）の後、必ず慈尊と共に下生せん ”と弟子達に遺言されたことを踏まえて、「大師（空海）=弥勒菩薩^{みろく}」という信仰が生まれた。弥勒信仰は上生と下生の両面を持ち、浄土観念のみならず世直しという静かなる熱い想念が流れているのだ。(567→ $5+6+7=18 \rightarrow 6 \times 3 \rightarrow 18 \times 2^{(二元)} = 36 \rightarrow$ すなわち、 $5+6+7 \cong 666 \cong$ 三つの 6 : $36 \cong 36^9$)
 - 弥勒（菩薩）の世界を象徴する三十六は「みろく」、**「3 6 9・6 6 6・5 6 7」**に重なる中で、その^(みろく) ^(みろく) ^(みろく) 数三つの中央で共通する「6」に着目し、2要素「場所6×配置数6」に適用した。

九十六のこと

- 例えば 32×3 、あるいは 24×4 ではなく、 **$48 \times 2 = 96$** を当てたのだろうか、なぜなのか？
- 『四十八』は、※阿弥陀如来の『四十八誓願』の四十八である。
阿弥陀如来は、仏に成るために修行中の身であった法蔵菩薩の時に『四十八誓願』を立て、その実践・修行を成就したことを以って悟りを開き阿弥陀如来になったが、これに由来する。
 - 『二』は、一言で言えばあらゆる事象「もの・こと」に立向かう際の「両眼照射による両極二重同時認知」の意識——「複眼思考・調和思想」を象徴し、次の神仏との関係をも重ねた。
◎ **大眼目は本通り参詣目標の「月山と湯殿山」の二座を指す。**
 ^a大日如来と相即不離の金胎両部界二つを指す。
 ^b阿弥陀如来と相即不離の脇侍（観音・勢至）二つを指す。
 ^c薬師如来と相即不離の脇侍（日光・月光）二つを指す。
 ^d現世仏「仏陀」と、未来仏「弥勒菩薩」の二つを指す。
 - 実践的には一つの道において、計画・誓願の段階を前半ステージ（一、**月山**）と見立てて四十八丁を当て、実践・修行の段階を後半ステージ（一、**湯殿山**）と見立てて四十八丁を当て、前半と後半を合わせた通貫成就（一 + 一 = 二）を以って九十六丁とした。

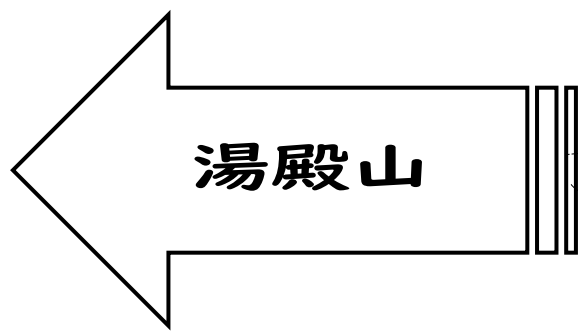
※大日如来と阿弥陀如来は如来界の共同代表とする、本書後記 50 頁を参照。根拠は調査報告書に別記する。

数は普遍性・合理性・客観性を有し、あらゆる「もの・こと」の価値基準の物差しとなる。意味もなくあてずっぽうに 36 とか 96 の数字を採用したのではない、当時の人達は数理の持つ聖性をきちんと理解の上で、その時の天地人融合感の中で最も適切なものを選択したのであろう。

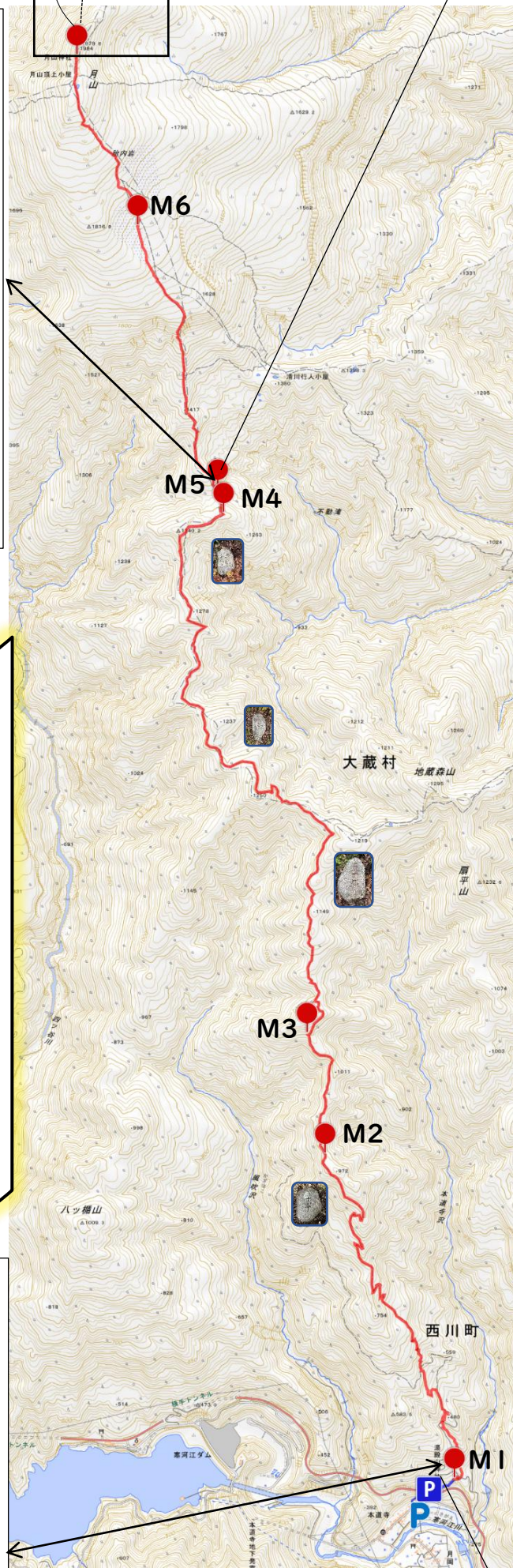
時代が違えども、合わせた「3 6 と 9 6」も、初めの 3 に共通因子の 6 を加えた 9 と昇順連結し「369(み・ろ・く) = 弥勒」の世界が生成されたのだ、以って、弘法大師に還元される。

すなわち、本通りは大日如来の霊威・大師の教えが充満する聖性空間を保証しているのだ。

い ん だ ら も う
神秘と不思議を生む源泉「因陀羅網」



九十六丁（ここが古来の『高清水』）



古来「旧跡神跡明鏡」の地
(旧本道寺奥の院)

月山・湯殿山まで

「大日如来×阿弥陀如来×薬師如来」の三位一体が説く本通り

本通りに奥州藤原秀衡公奥方（天台）が寄進した塩竈六所（大）明神金佛三十六体は「弥勒菩薩」と金剛界とお大師の融合世界
高清水小屋に奉仕した歴代の小屋守は大日如来胎蔵界の梵字を冠した。

「九十六」の意味合いは、阿弥陀如来の『四十八誓願』の四十八×二（往復・循環、半分1＋半分1＝通貫成就2）
百一人以上も直接係った里程標の丁石「九十六体」を道沿いに安置

大日如来（胎蔵界と金剛界）
阿弥陀如来（観音菩薩と勢至菩薩）
薬師如来（日光菩薩と月光菩薩）
と
弥勒菩薩
（＝お大師）
の霊気充滿

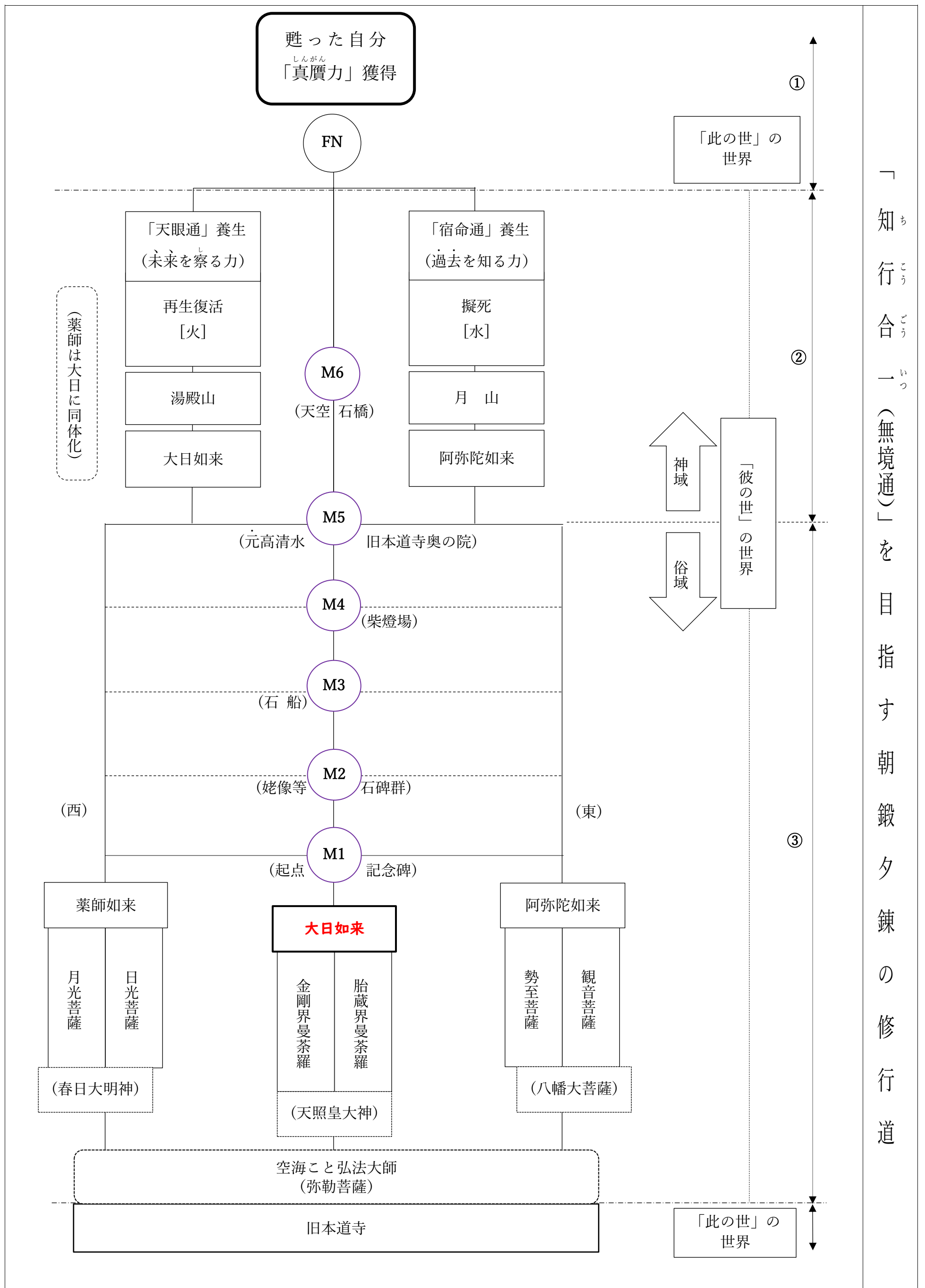


文政五年建立 起点記念碑
「従是高清水迄九十六丁處」

※；これら神仏の登場に至った理由等は報告書に記述する。

空海開基時の旧本道寺は
「月光山光明院」（日・月）
本尊は大日如来

本通り行者の神仏対話による清浄行



「薬師如来」登場の意味合い



湯殿山御宝前に隣接し西南に位置する湯殿三山は左図のとおり。下は仏像愛好倶楽部のブログより拝借した国宝の薬師寺金堂薬師三尊像である



御沢（仙人沢）から湯殿三山の最奥「湯殿山 1500m」を目指し源流部を詰ると、山頂北西部断崖の所で左右に分れて突き上げており、まさに御宝前「女人女闕」部類似の形状に繋がる様相だ。この薬師岳の命名由来は言うまでもなく「薬師如来」が根拠。御宝前直ぐそばの山に「薬師岳」を命名したのだ。薬師如来が御宝前を直接守護し、大日如来はその分身を奥の院（山の湯殿山）に籠らせて、この三山全体を抱擁・包摂する構図だろう。相場俊澄著「出羽三山の秘儀」の一節を拝借すると「・・・湯殿山の後ろにそびえる薬師岳は百二十種の薬草を生み、その根から染み込む水と一緒に、太陽の熱と共に吹き出し、無限力の薬師（奇し）事を起こし（奇跡を起こす）ようになって、大きな信仰を世に広めたのです。湯殿山の赤い神体石は、朝日の様な形から湯殿山大日如来、大日が来る如しと付けられたもので、本当なら太陽薬師根元神と名付けられるものなのです。」

人間「命あつての物種」のとおり、生きている者の最大の関心事は、健康・身体堅固、病氣平癒、無病息災である、そこですがったのは古来「薬師如来」である。なお、仙人岳は、至高の験力を備えて仙術を操ることが出来る人間（仙人）になるべく修行する場所にちなんだものだろう。

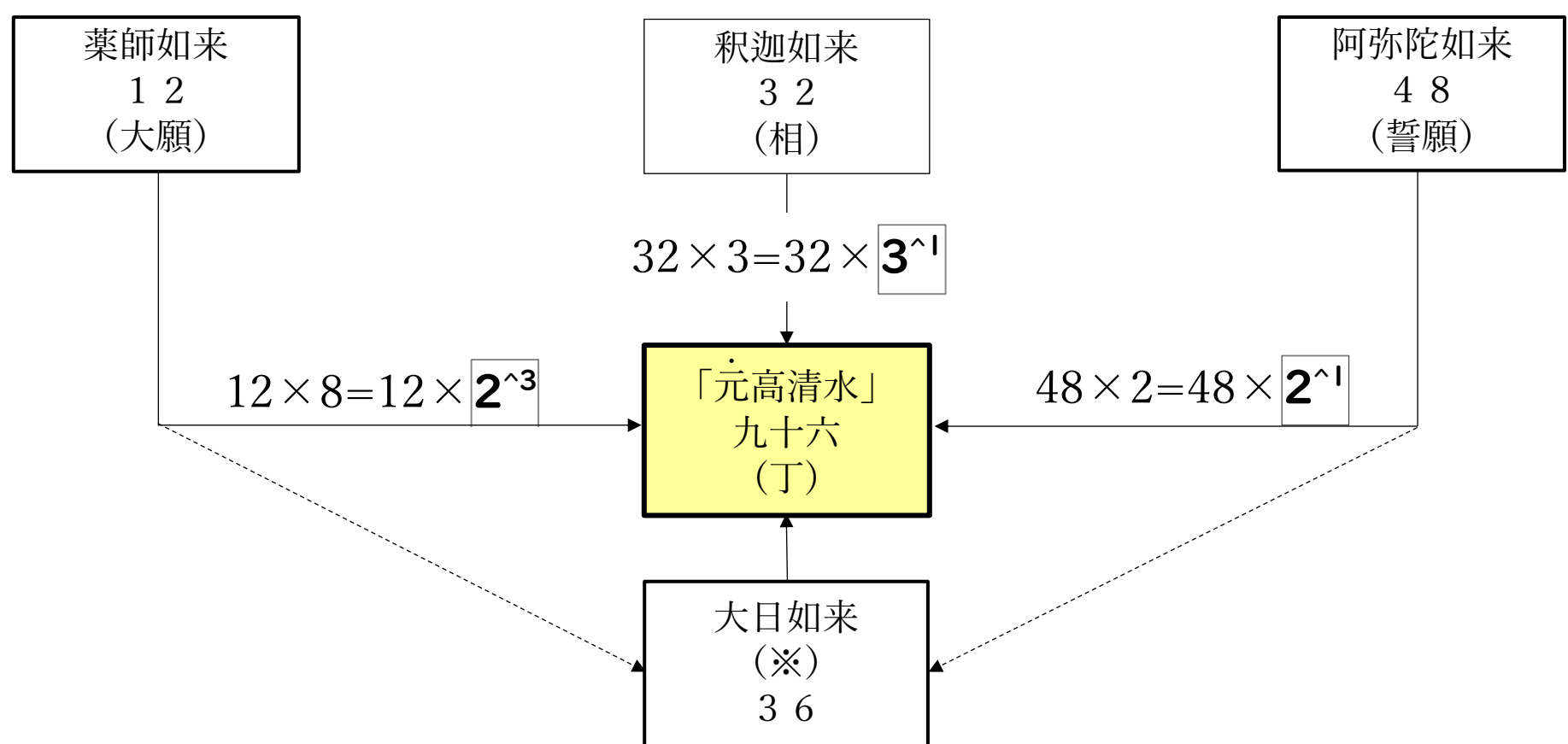
（旧）本道寺から見ると、空海開基時名称の月光山光明院の本尊は大日如来、その光は正真の光（太陽）を指すことから光明は日光のこと、よって「月光と日光」を併せ持った、つまりは日光菩薩と月光菩薩を従えて、対人間願望応現力を発揮する薬師如来の内包をも企図・意図したものと察知出来る。ここでの月光は月山、日光は湯殿山と結ぶことは言うまでもない。

すなわち、大日如来を本尊とする旧本道寺と湯殿山においては、薬師如来信仰（霊気）も基層に流れており、これらは相互に連結していると見做される。本通りは本道寺から月山へ、続けて湯殿山へ、あるいは、本道寺から（横道経由）湯殿山への参詣道であるから、この基本を押さえれば自然なことだ。旧本道寺の開山時空海の思いは、湯殿山御宝前まで糸（レール）を張って、薬師如来を黒子トレインとして往復させた、と想像している。

「旧跡神躰明鏡」を成した聖数

「高清水」小屋跡地（今でいう元高清水）は古来「**旧跡神躰明鏡**」（西川町史／古文書に記述）と称し、特別の地として来たが、前 43・44 頁聖数との重層性を改めて考察する。仏教開祖は言うまでもなく悟りを開き真如の世界にいる根本仏の釈迦（仏陀・釈尊）である、その仏の世界から真理を以って人間救済に表れたのが如来であり、代表格は阿弥陀如来であり、釈迦如来であり、薬師如来である、密教においてはそれらを統合した大日如来である。

釈迦の特徴は「三十二相・八十種好^{しゅごう}」と言われる。薬師如来は「十二の大願」を果たされ、阿弥陀如来は「四十八の誓願」を果たされて如来になられた、大日如来は「三十六徳目」を弟子に授け自らも果たされた。「 $12 \times 8 = 32 \times 3 = 48 \times 2 = 96$ 」の相補相関性を探る。



※の意味合いは以下のとおり。

大日如来=弥勒菩薩

みろく = 直接的； 3 6

間接的； 3 6 9

3 6 9
(+ 3) (+ 3)

$3 \ 6 \Rightarrow 3 \& 6 \rightarrow 3 + 6 = \overset{(3+6)}{9} \rightarrow 3, \ 6, \ 9 \rightarrow 3 \ 6 \ 9$ （みろく=弥勒）

2^1 （2の1乗）と 2^3 （2の3乗）と 3^1 （3の1乗）に表れた「1と2と3」は前記 43・44 頁のとおりである。1が2回、2が2回、3が2回、相互作用した、バランスが良く真に縁起も良い。なお、 $2^3 = 8$ は釈迦の「八十種好」の八でもある。

{369}は、 $\dot{3}$ （躍動基点）の万物を生む力を以って、 $\dot{6}$ と $\dot{9}$ が生まれた、これを娑婆世界に写すために、6と9を上下反転では9と6、左右反転でも同じとなる9と6に成らしめたのだ。

また、ここの墓石2体の頭部には（胎蔵界）大日如来の種子（梵字）を刻している。

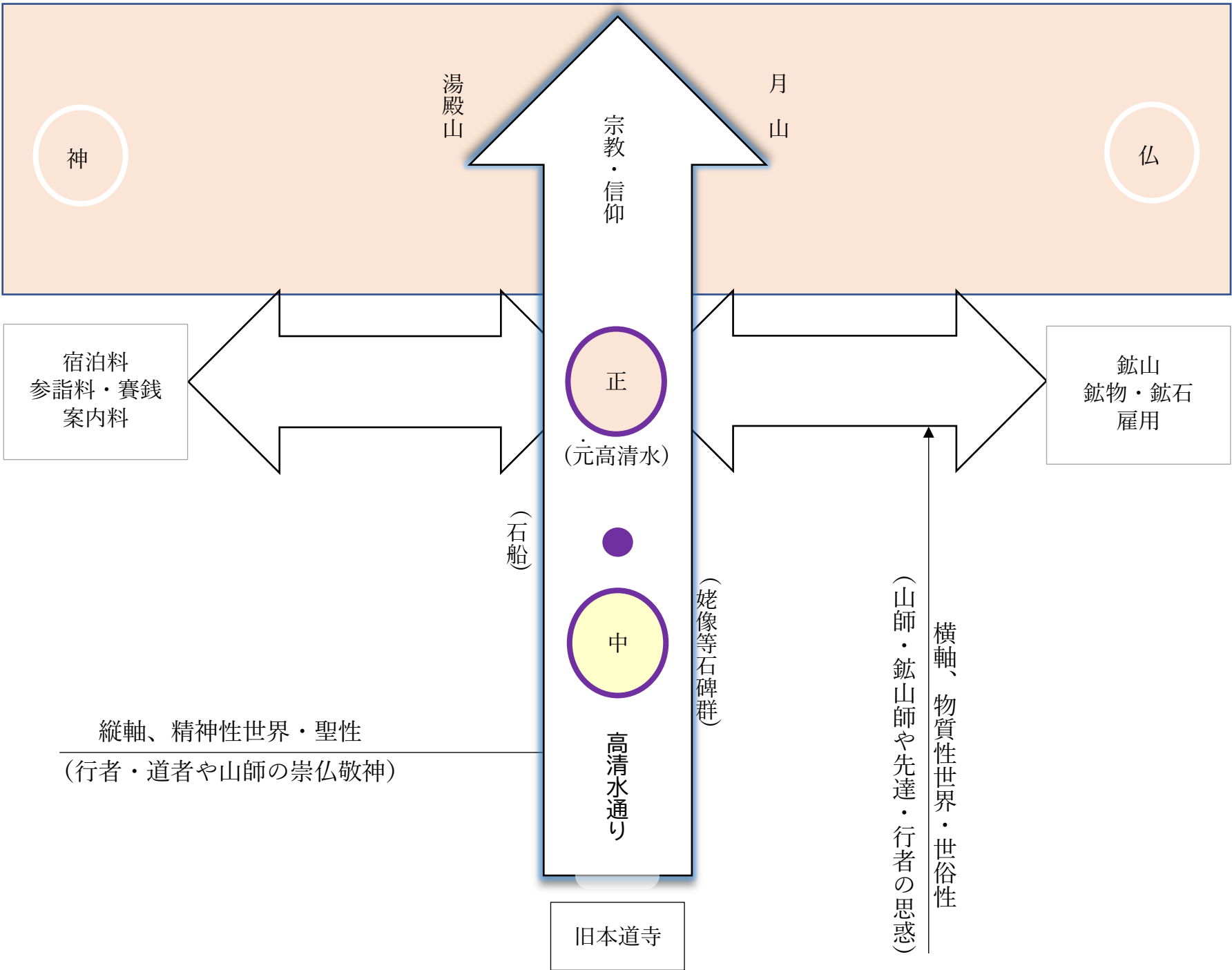
“天・地・人” 共生繁栄の道！

全体状況に鑑みて、本通りは往古より、単なる景色を眺めるためのピークハント往来道ではなく、

「人と人」、「人と自然」、「人と神^{かみ・ほとけ} 仏」の 共存共栄の道

宝冠と白衣を着用した上で往来した行者の思いに致せば、本通りは「五大に宿る魔訶不思議」の
因陀羅網^{とあみ}が投網された空間、と観念されて来たことであろう。

本通りは精神性と物質性の交差空間でもあった。		
	行者目線	山師目線
物質性世界 (見える)	宿泊料・案内料 参詣料・賽銭・初穂料 (対価・実利)	鉱山開発による金銭的利益獲得 雇用・労働市場提供 (経済・利潤)
精神性世界 (見えない)	加護・恩寵を期待した神仏への帰依・敬神崇仏 「中道正観 ^{しょうかん} 」行を燃料とした精神活動／信仰帰依の世界	



※；「中・正」は当該場所でお大師の説く「中道正観^{しょうかん}」精神の修養・陶冶を特に意識したであろうとして当てたもの。

お大師とお行様をつないだ宿坊

これも前記から繋がる世界観の事例である。下図二つの掛軸は、西川町旧本道寺（真言宗）門前集落の元宿坊「一明坊」^{いちみょう}に伝わる（所蔵の）門外不出のものである。

右は湯殿山を開基した空海こと弘法大師像の掛軸である。種々ある大師像の刷り物の中で、像の上に「湯殿山」と書かれてあるのは珍しく貴重であるとされる。

左は弘法大師自らが彫刻したとある「南無阿弥陀仏」の刷り物の掛軸である。その六文字の中に三世十方諸仏を描いて、佛々混淆の広大無辺・無窮無量の世界観を表している。

阿弥陀佛は月山大権現の本地仏であることから、湯殿山と月山を象徴する両者をバランス良く保存して来たのである、お大師の根本教義「中道正観」^{しょうかん}（偏らない）にぴったり重なる。

これを題材に、お客様に対して当意即妙な語り口を以って説教・唱導・教化薫陶の絵解きを行ったことであろう。



弘法大師作云々真偽のほどを詮索しても意味がない、このような掛軸を構想し作らせた宿坊も実に大らか・大様なのだ、偏っていない、チマチマしない。共々に真に爽快なる調和感覚と統合視観、大スケール観である。



信仰上は湯殿山・お大師・大日如来は同相
同価（一体）である。

○最大の特徴は、一番下の⑤には「是弘法大師之自著彫刻也（これは弘法大師が自ら彫刻したものだ）」と書いてあること。

○軸の一番上左右に「①日（本尊から見て左）」と「②月（右）」を配置している。日月を天空の両眼とし、万事万象の調和を説いている。

○「南無阿弥陀仏」の初めの文字「南」の最上位③に「阿弥陀仏」、最後の文字「仏」の頭部④に大日如来と不動明王を並置しているが、全体に平衡感覚の素晴らしさがある。

○六字名号「南無阿弥陀仏」（阿弥陀如来に帰依する）は特に（主に）浄土宗（法然）・浄土真宗（親鸞）等で重んじられる唱え言葉のはずだが、真言密教の教主お大師様が尊重したのだ。

◎大日如来と阿弥陀如来は如来界の共同代表とする根拠の一つである。

庶民は、湯殿山が最終目的であれ、月山をも合わせて尊崇した証左の一端である。

第 III 部

～before/after に焦点～

2022(令和4)年 T-FMO活動 以前(従来)の実態

～ 地元有志の「高清水通りに対する」当時の認識 ～

下図は1983(昭和58)年9月、高清水通りを本道寺から月山へ登り湯殿山へと下った、その時に記者が同行取材した山形新聞報道(夕刊2面)、大きな紙面で3日間(9/9金、9/10土、9/12月)に亘り報道された。同図は地元の人がその新聞切り抜きと写真を合わせてパネル化したものである。



当時の西川町役場職員と地元本道寺の人達6名は**白衣に宝冠!** この姿はただごとではない、「生まれ変わる」という決意を天下に誓った印である。(果たしてどのように変わったのか。) 皆さんは大変誇らしげである。6名は地域の知識人たる知性と教養の持ち主であり、「高清水通りのことは俺が一番知っている、俺は全てを分っている」と自負・自認する立派な人達であろう。同行記者はその6名のレクチャーを受けて記事にしたのであろう。

大沼はその記事をめくり、つぶさに目を通して見た。この3回に渡る記事の中で、「高清水通りにおける史蹟に触れた処」は、9月9日(金)付け記事、下表のと通りの丁石に係る**1箇所のみ**である。

「草に埋まる石道標・・途中『十三丁』とか、『二十六丁』とか彫られた大石が置いてある。この道は高清水通り九十八丁とも呼ばれた。」(九十八丁は昔も今もないが、何を根拠にしたのか?)

しかし、これ以降も2022(R4)6月までの39年間、調査等何も手を付けていなかった、39年間有るがままになっていた、本書のように全体的・体系的に集約したものは何もなかった、案内マップもなかった。すなわち白いキャンバス同然であった。しかし、調査探求の行動有無は価値観の有り様に係る、有るがままにして置いたことに是非・善悪を問うものではない。そのような時間的経過は至って自然な推移であった。

「高清水通り」史蹟に係る従来認識（真との齟齬）の2事例

その1 けん え おう
「懸衣翁」像ではない ⇒ **真実は「祖母神」像なのだ！**

高清水通りの姥様（姥像）



湯殿山神社から月山登山道「高清水通り」という月山・湯殿山参詣道があり、多くのお行様で賑わった。
この道の33丁目にあたる場所は、標高約1000mの稜線にあり、休み場となっていた。ここには、3体の墓石のほか、2体の石像が鎮座しており、一つは姥様（奪衣婆）であり、もう一つは懸衣翁ではないかともいわれているが損傷がひどく判別できない。
ここは、聖と俗、そして女人立入の結界の地であると言われている。

図-（1）

図-（1）は「大黒森プロジェクトの歩みと『ふるさとの宝ガイドブック一覧表、H30.3.23現在』（本道地区集会センター所蔵）より拝借したもの。

説明文の一部に「・・・一つは姥様（奪衣婆）であり、もうひとつは懸衣翁ではないかともいわれているが、損傷が激しく判別できない。」とある。

なお、同センター内にパネル化したものは、今は掲示から外した。

これは、従来、尤もらしく称していた「懸衣翁」像（ジェンダー男・仏教色）ではなく、^{N o n}**本調査で「祖母神」像（ジェンダー女・神道色のもの）であることを判明せしめた。**

図-（1・2）の両書共に、懸衣翁だと断定した書込みではないが、一般世間（地元）の会話においては断定したかのような通説となって流布していた、なぜこうなったのか。

村山地方の奪衣婆



まるで夫婦のように並んで座っている。左の像は懸衣翁なのか？

図-（2）

もしれないと思うとしんみりした気持ちになってくる。ところで、奪衣婆のそばに座っているのは誰なのだろう。ひよっとしたら懸衣翁なのでは！できればそうであって欲しい。懸衣翁は全国的にも稀なのだし、私にとつては唯一の出会いなのだから。見知らぬ仏だけど、何故か身近な仏のような感じがして手を合わせた。

かつては月山参りの行者たちが行き交った道だ。本寺の宿坊を朝立ちして月山頂上までは八、九時間かかる道だ。今の人たちにとってはきつ過ぎてあまり通る人もいなくなった。だが往時を偲ばせるいい道である。奪衣婆は、二時間半ほど登ったブナ林の中に座っている。まるで手入れでもしているように林床植物もあり多くない綺麗な林である。
稜線に近いために奪衣婆の後ろには木々の間に明るく青い空が見える。少しも怖くない顔をした奪衣婆である。かつての賑わいを思い出しながら、その変化の激しさをしみじみと感じているのかもしれない。ここ数日間のうちに通った人がいたのであろう、金色の紙に包まれたキャンデーがある。ちよつと酸っぱいが梅飴を置いていこう。私も諦め。ここまで登ってくるのはもう出来ないのか

月山登山道

西川町本寺



図-（2）は鹿間廣治著「奪衣婆 山形のうば神」（東北企画出版）より拝借したもの。
説明文の一部に「・・・ひよっとしたら、懸衣翁なのでは！できればそうであって欲しい。」とある。



図-(3)

図-(3)は、前記中9月9日(金)分を抽出したもの。

記事の中に「・・・ 草に埋まる石^①道標・・・途中『十三丁』とか、『二十六丁』とか彫られた^②大石が置いてある。この道は高清水通り^③九十八丁とも呼ばれた。・・・」とある。

留意すべく次の3点に着目した。

一つ目は、そもそも、『丁』を刻した石は、道標（道案内に供する道しるべ）ではなく、里程標（距離標）の一種である、両者の意味は違うはず。

二つ目は、丁石30体の加重平均は、高さ48(Max56)cm×幅28(Max38)cm×厚さ10(Max15)cmの自然石（川原石）である中において、相対比較の問題ではあるが、測らなくとも見た目、社会常識としては“大石”と言うのか？（言わないのではないか！）

三つ目は、“九十八丁”とは何を根拠にレクチャーしたのか？ 今となっては九十六丁が丁石終端点（最終丁石）であるものの、もちろん、九十八丁は今もないが、**昔もあろうはずがなかったのだが**。（ましてや、区切りの良い100丁とか、もっともらしい108丁はみな外れた。）



図-(4)

図-(4)は、本道寺口之宮湯殿山神社境内端にある最初の「高清水通り」道標だが、以前はこのように傍に説明板があった、その一部を抽出する

「・・・ 95丁目までの町石が設置されている。」とある。（ここでも3点が気になった。）

一つ目は“95丁”の『95』とは何を根拠にしたのか？

二つ目は“95丁目まで・・・”とあるが、ここでの丁（石）は起点からの距離地点（ピンポイント）にその印として置くものであり、『丁目』とは社会通念は面的エリアを指すことから、何の意図なのか？

三つ目は“町”とはどこから取ったのか？ 現物はみな”丁”

説明板はその後2023（令和5）年5月10日（水）、起点記念碑の位置に移動し、（今は）『96』——5を6に上書き訂正した。

以上のような間違いを正すことが出来たのは、①文政五年建立「起点記念碑」を発見したこと、その後、②「高清水まで九十六丁（九十六体の丁石を安置した）ある」という碑文刻字を活字化・解読したこと、そのとおりに③「九十六丁(石)」を地中から発見したことの3点の結合結果である。

T－FMO 活動以後（事態は動いた、大発見の連続！）

「高清水通り」解剖結果の六大肝（六大聖柱）！						
ルート図 (本道寺から月山に至る約 15km)	拠点	(従前)	(目安)		象徴的呼称 (新規シンボリックキーワード)	象徴的現地写真
			距離	標高		
 口之宮湯殿山神社 (旧本道寺)	月山 山頂		約 14.3 km	1,984 m	月山神社本宮 おおゆきじろ [大雪城] 「 ^{しゃつきょう} 天空石橋」を (天空石堤) 新発見 “橋軸は南北、対垂直視線先に湯殿山” “設置経緯正体不明、謎の源流Gスポ” “「月山水源聖地Gスポ」歴史遺構” “月山ユートピア・ランド”中枢	
	M6	誰も気付かなかった 何もなかった	約 12.7 km	約 1,733 m	「元高清水」 「高清水小屋」跡地を新発見 『九十六丁』(石)と 墓石2体 (内1体に女性戒名) を 新発見 “丁石終端点” “古来、旧跡神舩明鏡の地” “旧本道寺奥の院”	墓;天保二年(1831)年安置 墓;文政三年(1820)年安置  九十六丁;文政五(1822)年安置
	M5	雑木と濃い笹竹の藪 何もなかった	約 10.5 km	約 1,280 m	[柴燈場] (^{さいとば} 柴明場) “真東に「烏川不動滝(不動尊)」遙拝” “西北に湯殿山、北に月山遙拝” “ 東西南北四方浄土祭祀祭儀の舞台 ” と 新解説(新価値付け)	 
	M4	見晴台であった	約 10.4 km	約 1,308 m	[石船] 寄進奉納の刻字新発見 “尾根筋山中に「舟」” “船首を湯殿山・船尾は山形 向き” “生命起源所縁聖地”	 正徳六(1716)年安置
	M3	刻字存在を想像すら 出来なかった	約 4.9 km	約 1,044 m	[姥像等石碑群] 「姥小屋」跡地を新発見 「祖母神」(像)と刻字新発見 墓石2体に女性戒名刻字新解説 “観音浄土”	 享保六(1721)年安置
	M2	「懸衣翁」像と 間違っていた	約 3.8 km	約 955 m	[起点記念碑] 文政五(1822)年建立 「従是高清水迄九十六丁處」と “九十六体”丁石奉納の 刻字新解説 “丁石始端点” 今でいう“道路原標打点地”	
	M1	刻字を活字化・解説して いなかった	起点	約 355 m		

拠点	象徴的呼称	発掘・発見を踏まえ、現地に即した歴史的価値付け・意義付けを図った	
M6	おおゆきじろ [大雪城] しゃつきょう 「天空石橋」	・2022(令和4)年9月10日(土)午前、従来ルートの安全向上対策を検討しながら下山中の宮林良幸が発見し、同行していた大沼と共に調査した。月山直下（目前）標高約 1,733m の高地、本通り「大雪城」帯域旧道復元新ルート上にある。捉え方によっては「天空石堤、天空堰堤」とも言える。 ・石橋の構造は、人為的石組み、長さ約 7.5m、高さ約 1.2m、幅約 1.2mである。 ・最大の謎は、何の目的でどのような設置経緯があったのか、広く様々な関係者に聞き取りを行ったが、皆異口同音に「知らなかった、初めて見る、真相は分からない、正体不明」である。 ・架橋の向きに着目した、橋軸方向は北辰信仰に直結するようにほぼ南北、中央部に立ち軸方向に両手を広げた視線の先（ほぼ真西方向）に湯殿山が位置することを突き止めた。 ・そこで次のような祭儀の舞台と崇め祀って来たのではないかと仮説を立てた。 □A；「湯殿山（御宝前）」を拝む（観念遥拝）祈りの舞台 □B；「大雪城」を水源基点、すなわち源流部の旗印として『水神様』への感謝を捧げる祈りの舞台 □C；『水』に対する堰堤機能（洪水防止・水量調節に係る一時貯水）を託す祈りの舞台 ・総合して、「月山水源聖地Gスポ」（Gは great、スポは spot）と称する貴重な“シンボリック歴史遺構”であると価値付けを図った。	
M5	[元高清水] 『九十六丁』(石) 墓石2体 丁石終端点	・2022(令和4)年9月10日(土)、「天空石橋」発見後、下りの16時過ぎに先行していた大沼が発見し、同行していた宮林良幸と共に調査した。 ・M1 起点記念碑に対応する九十六丁(石)と、予想外の墓石2体は、雑木と濃く密生した根曲り竹と腐葉土の地中下に埋もれていたものを直感で発見した、その銘文刻字を活字化・解説を図った。 ・また、当地は人為的に削平加工、平坦地を造成した状況にあり、西川町史編集資料第六号 P20 他（古文書）に出て来るが、新暦7月下旬～9月下旬の2か月間ここに賄いの2人が寝泊まりし、参詣行者を接待した「高清水小ヤ（小屋）」の跡地であることを突き止めた。 ・さらに、当地背後地（西側）に旧道ルートを発見し安全な道として復元した。	
M4	[柴燈場] （柴明場）	・真東方角直下に、秘密裏に道を開削してまで拝みに行った不動尊を祀る烏川不動滝を、西北の方角には湯殿山を観想出来る場所であることを大沼は突き止めた。合わせて、単なる見晴台ではなく、①烏川不動滝（不動尊）遥拝、②護摩祈祷、③先祖供養柴燈、④湯殿山御宝前遥拝など、東西南北四方浄土祭祀祭儀の舞台であったことを突き止めた。 ・西川町史に出て来る古語は「柴明場」の呼称、明は日(陽)と月(陰)の調和的合体を意味する。	
M3	[石船] 舟型水受け	・従来、地元を含め皆は“何も刻されていない”と断定的であったが、2023(R5)年6月19日（月）午前、大黒森プロジェクトの阿部剛士さんの力を借りて動かし、大沼が碑文刻字を発見し解説した。これは正徳六（1716）年付山形八日町の丹羽氏の寄進奉納であることを突き止めた。 ・水場といえども川・河・海がなく、船とは縁もゆかりもないこの山奥の尾根筋山道になぜ、「舟」型なのか？ それは生命起源所縁聖地の印とし、祈りの舞台であったことを突き止めた。 ・設置方向は船首（舳先）を西北の湯殿山に、船尾は東南の寄進者居住地山形八日町に向けたことを突き止めた。民衆の湯殿山崇敬心を御宝前に届けんとする指向性を重ねたのであろう。	
M2	[姥像等石碑群] 「祖母神」像	・ここには墓石2体と供養碑1基、石像2体があり、その中の1体について、従来、地元を含め皆「懸衣翁」像と断定するかのようであったが、疑念を持ち続けていた大沼は2022(R4)年9月14日(水)の午前、丁寧な厚いコケ・ドロ落しによる背面調査で碑文刻字を発見し、解説の結果、神道色の「祖母神」像であること、享保六(1721)年付米沢城下の大福が寄進奉納したことを突き止めた。 ・2022(R4)年10月20日（木）大沼は、三十四丁（石）の前から東側藪の中に入り、東側に人為的削平地と人工的円形状池の水場を発見し、「姥小屋」跡地であることを突き止めた。 ・それらは三十三丁(石)と三十四丁(石)に挟まれたエリアであり、“観音浄土”と観想する霊場地に見立てられて来たことを突き止めた。	
M1	[起点記念碑] 丁石始端点	・2018(平成30)年11月15日(木)、大黒森プロジェクトの布川浩久さんがこの石碑を発見した。せっかく発見してくれたのに、地元はこの刻字を解説・吟味せずにそのままにして来た。 ・後に本通りに係った大沼は、T－FMO 立上げ後の2022(R4)年8月15日(月)に碑文刻字の活字化、解説・共有化を図った。文政五(1822)年付で建立、中央に「従是高清水迄九十六丁處」の主意と5人の氏名と「達磨寺村」の刻字があること、『高清水』という目標地点（目的地）と『九十六丁』という数を特定していることを突き止めた。 ・この解説までは、全部で九十五丁とか、九十八丁や百丁、あるいは、もっともらしい百八丁とか、はたまた月山山頂までとか、様々な声があったが、悉く打ち消された、打ち消したのだ。 ・この発見とその後の解説は、本件ものがたりを次の新たなステージに引き上げた。	

M1からM5までの間に里程標の丁石（二丁＝約109m）を九十六体寄進奉納、点在する現存30体を確認済

(end)

第 1 卷

(2)

「高清水通り 調査報告書」ダイジェスト版 補填資料

〔丁石・石碑・石像・墓石〕の碑文銘文刻字解読・活字化一覧

碑文・銘文の刻字解読に当って、こちらで読めなかった処については、村山民俗学会前事務局長の市村幸夫さんに写真データを提供し、解読に係る絶大なご協力を賜って、以下のとおり集約するに至ったものである。しかし、石碑類の現物の中には経年劣化に伴う摩滅が著しく、写真撮影の不備や判読不能のものと相俟って、何とか読めたものの正確さを欠くままに大沼の責任で記述したものもある。より正確さを求めて今後とも追求・調査を重ねて行くこととし、訂正などが生ずればフォローしていくものとする。

・・

目次的項目	
1. 文政五年建立起点記念碑	P2
2. 現存始終丁石の2体	P2
3. 現存確認済の各丁石30体一覧／2023（R5）年12月末現在	P2～P4
4. 『高清水通り』丁石のみの位置と標高（目安）	P5
5. 「姥像等石碑群」	P6～P10
6. 舟形水受け「石船」	P11
7. 「高清水小屋」跡地－今でいう「元高清水」の墓石2体	P12～P13
8. 「胎内岩」にある供養碑・墓石の一部	P14
9. （半体）地藏菩薩像	P15
10. 「禪定尼」の墓石	P15
11. その他石碑	P16
12. 道標	P17
13. 「高清水通り」沿い石碑・石塔・墓石等の年代順	P18
（文責はT－FMOメンバーの大沼香）	

1. 文政五年建立起点記念碑



文政五年 達磨寺村
 里先達 不動院
 山先達 長清坊
 後是高清水迄九十六丁處
 七月吉日 世話人
 佐藤九右衛門
 佐竹傳兵衛
 原田善兵衛

- ・文政五年＝西暦 1822 年
- ・左右両側面、背面には何も刻されていない。
- ・大きさは、高さ約 66cm、幅約 30cm、奥行約 20cm
- ・自然石（川原石？）

□後記一覧のと通りの各丁石寄進者刻字名について中山町史を追うと、96 体の全員は達磨寺村（現中山町）が所在地集落名であろうと推測している。

□5 名中、長清坊は横岫（現西川町水沢地区）、佐竹善兵衛は達磨寺村に所在していたことは判明したが、その他は諸説があり不確定である。起点記念碑はこの名主 5 名の共同寄進なのか？

2. 現存始終丁石の 2 体



現存する最初の丁(石)

寄進者名

同村

九丁 同村
 多右衛門



九十六丁 不明
 不明

現存する最後の丁(石)

(※) 総て、向かって右下には『同村』、左下にはそれぞれの寄進者名が刻字されている。

3. 現存確認済の丁石 30 体の一覧／2023 (R5) 年 12 月末現在

多右衛門(9)



善十郎(13)



十兵衛(14)○



四郎兵衛(15)



忠兵衛(16)○



曾兵衛(22)○



茂吉(23)



茂左衛門(24)



喜内(25)



太郎兵衛(27)



□郎兵衛(28)



盛之斎(29)



茂八(33)



武八(34)○



不明(48)



不明(52)



不明(56)



長二郎(59)



不明(69)



新太郎(71)



新太郎(72)○



傳七(75)



九左エ門(80)○



四郎兵衛(84)



久二郎(85)○



□七(86)



市郎兵衛(87)○



弥五兵衛(94)○



不明(95)



不明(96)○



4. 『高清水通り』丁石のみの位置と標高（目安）

位置情報の誤差や測定位置、機器やソフトの精度等の影響があり、完璧では無いことから真値と差異が生じる。

項 目 丁石地点	緯 度					經 度					標高	管理番号	
	度	分	秒			度	分	秒			(m)	全体	全数
(文政五年)起点記念碑	38	27	13	.	17	140	03	32	.	38	355	1	0
九丁	38	27	33	.	66	140	03	24	.	56	519	2	1
十三丁	38	27	43	.	74	140	03	21	.	24	591	3	2
十四丁	38	27	46	.	21	140	03	19	.	45	622	4	3
十五丁	38	27	49	.	39	140	03	18	.	9	643	5	4
十六丁	38	27	52	.	1	140	03	15	.	43	660	6	5
二十二丁	38	28	04	.	97	140	03	05	.	26	778	7	6
二十三丁	38	28	07	.	7	140	03	03	.	05	800	8	7
二十四丁	38	28	09	.	3	140	03	03	.	48	820	9	8
二十五丁	38	28	10	.	71	140	03	03	.	45	831	10	9
二十七丁	38	28	17	.	06	140	03	01	.	76	877	11	10
二十八丁	38	28	15	.	46	140	03	04	.	11	894	12	11
二十九丁	38	28	18	.	11	140	03	04	.	26	907	13	12
三十三丁	38	28	30	.	11	140	02	52	.	43	954	14	13
三十四丁	38	28	35	.	05	140	02	51	.	12	953	15	14
四十八丁	38	29	14	.	9	140	02	47	.	63	1084	16	15
五十二丁	38	29	27	.	65	140	02	48	.	45	1130	17	16
五十六丁	38	29	39	.	24	140	02	50	.	29	1158	18	17
五十九丁	38	29	48	.	25	140	02	55	.	13	1180	19	18
六十九丁	38	30	04	.	91	140	02	25	.	34	1210	20	19
七十一丁	38	30	07	.	53	140	02	20	.	68	1196	21	20
七十二丁	38	30	09	.	61	140	02	16	.	69	1203	22	21
七十五丁	38	30	19	.	06	140	02	13	.	03	1190	23	22
八十 丁	38	30	30	.	68	140	02	13	.	35	1210	24	23
八十四丁	38	30	39	.	85	140	02	10	.	66	1262	25	24
八十五丁	38	30	42	.	18	140	02	11	.	8	1271	26	25
八十六丁	38	30	45	.	42	140	02	09	.	41	1266	27	26
八十七丁	38	30	46	.	25	140	02	08	.	59	1264	28	27
九十四丁	38	31	04	.	8	140	02	20	.	71	1306	29	28
九十五丁	38	31	07	.	55	140	02	20	.	97	1293	30	29
九十六丁	38	31	10	.	85	140	02	20	.	11	1282	31	30

5. 「姥像等石碑群」

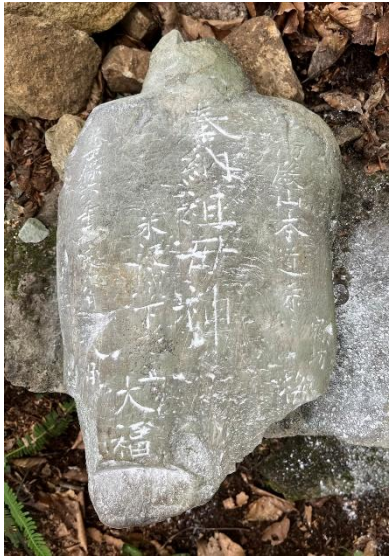


左の石像は、従来、もっともらしく噂のあった「懸衣翁」像では無く、「祖母神」像である。

①【正面】	大きさ等
塚辺栄蔵 行年 六十三才 明治十五年六月十三日 玉参悦道信士 織心妙悔信女 安政四巳年二月二日 同 里代 行年 三六才	頭部に墓石を象徴する円弧が刻されている
①【背面】	
仙台亘理郡荒濱 施主 明治十六年建立 塚辺慶三郎	・・・・・・・・ 高さ 約 52cm 幅 約 38cm 奥行 約 15cm 石の材質？ 推定重量 約 89kg 台座高さ 約 16cm
①【左右側面】	
刻字なし	・・・・・・・・ 安政四年＝1857 年 明治十五年＝1882 年 明治十六年＝1883 年 刻字なし

②【正面】	大きさ等
南無三十三観世音菩薩供養 寂阿道休信士 仙台邑名取長町 峯岸銀兵衛	高さ 約 63cm 幅 約 24cm 奥行 約 21cm
明治二年 九月廿七日	石の材質？ 推定重量 約 95kg 台座高さ 約 11cm 明治二年＝1869 年 明治十五年＝1882 年
明治十五年 午六月建立 本道寺先達 阿部秀学	 背面に刻字なし

③【正面】	大きさ等
明治十五年旧六月十八日 弘照院天庵浄圓大姉 宮城縣亘理郡荒濱 施主 渋谷源吉	頭部に墓石を象徴する円弧が刻されている 高さ 約 62cm
明治十六年未旧七月建立 山先導 佐藤養清	幅 約 25cm 奥行 約 22cm 石の材質？ 推定重量 約 102kg 台座高さ 約 14cm
名取郡土崎道 渡辺吉兵衛娘 □□女	明治十五年＝1882 年 明治十六年＝1883 年 背面に刻字なし

④【正面】	④【背面・側面】	大きさ等
	四方面に刻字なし (像容からして仏教色の濃い姥様)	高さ 約 40cm 幅 約 45cm 奥行 約 29cm 石の材質？ 推定重量 約 104kg 台座高さ 約 13cm 建立年 不明 (刻字なし)
⑤【正面】		大きさ等
	正面・側面に刻字なし 「けんえおう懸衣翁」では無く、神道色の濃い神像	高さ 約 45cm 幅 約 27cm 奥行 約 14cm 石の材質？ 推定重量 約 34kg 台座高さ 約 22cm 享保六年＝1721 年 (両側面に刻字なし)
⑤【背面】		
	湯殿山 本道寺 梅(本坊 欠損) 奉納祖母神 米沢城下 大福(以下欠損) 享保六辛丑天六月初？八日	

6. 舟形水受け「石船」



元は、この刻字面は山側を向いていた。



元は、この非刻字面が谷側を向いていた。

敬	丹	住	形	施	五	丙	正	菩	縁	眷	為
白	羽	人	八	主	月	申	徳	提	無	属	六
	氏		日	山	日	年	六	也	縁	有	親
			町								

(※) 六親は、父、母、兄、弟、妻、子。
または、父、子、兄弟、夫、妻など親族
の全てを指す。

右のとおり謹んで申し上げます。(謹
んで寄進奉納致します。)

施主は山形八日町の住人「丹羽」(に
わ?)という者です。

設置(寄進)年の正徳六年は、丙申年
(西暦 1716 年)の旧暦五月(新暦六・夏
至月)です。

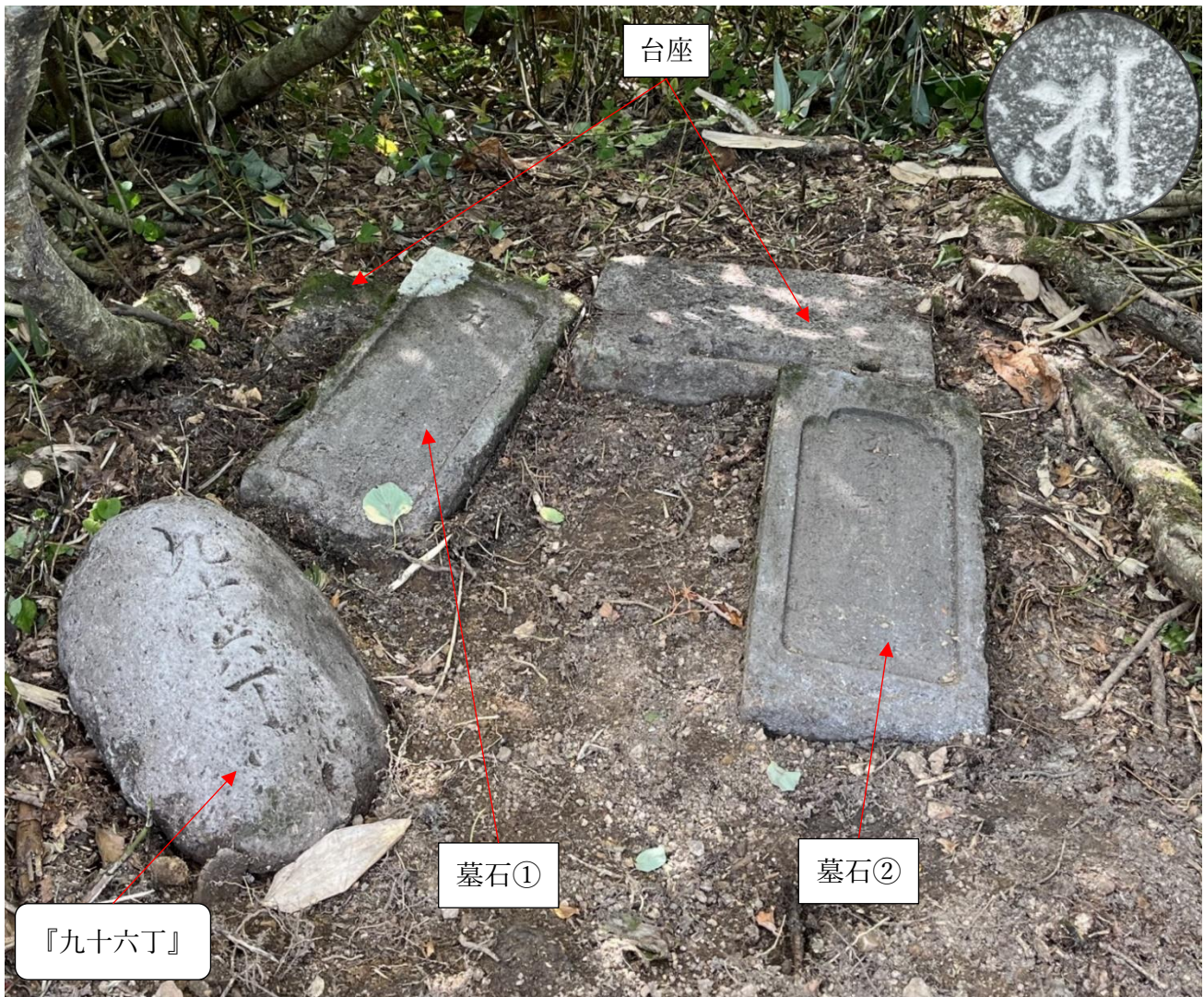
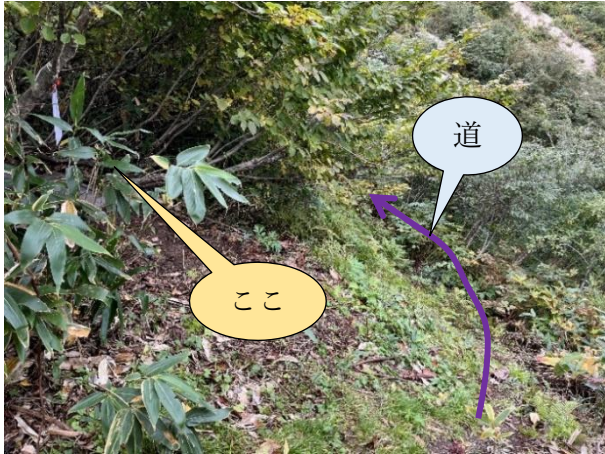
全ての親族縁者や家来、ならびに縁
の有る無しに係らず故人みんなの霊魂
が「悟り」を得られ成仏出来ますよう
に冥福を祈るものです。

為六親眷属
有縁無縁 菩提也
正徳六丙申年五月日
施主 山形八日町
住人 丹羽氏
敬白

全 35 文字

7. 「高清水小屋」跡地—今でいう「元高清水」の墓石2体

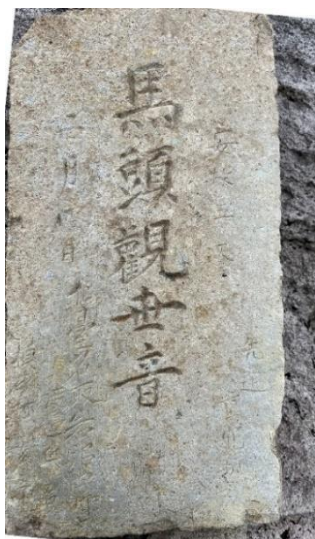
- ・以下のとおり「九十六丁」(石)と共に、墓石2体が濃い雑木・根曲り竹・腐葉土の地中下に埋まっていた。
- ・右上図において三日月バンドまで奥の様な藪で埋まっていた。当地を一目、こんなものが埋まっているとは普通は思わないのは当然のことであった。



①左側面  先祖代々菩提 □□□□ □□□□清□施主 (朱ベンガラ残存有り)	①正面  ❧ 竟道栄究信士 文政三庚辰九月 (朱ベンガラ残存無し)	①右側面  蓮屋妙光信女 還意浄光信士 (朱ベンガラ残存有り)	(墓石本体) 高さ 約 55cm 幅 約 25cm 奥行 約 16cm 石の材質？ 推定重量約 66kg (台座) 高さ 約 25cm 幅 約 37cm 奥行 約 9cm 文政三年 = 1820 年 (九十六丁より も古い)
②左側面  右側に何か刻しているようだが、劣化・摩滅で判読不可 施主名か？ (朱ベンガラ残存有り)	②正面  ❧ 自興院禅岳栄滲居士 錦緑万□□門清成事 (朱ベンガラ残存無し)	②右側面  天保二辛卯天 四月初四日 (朱ベンガラ残存有り)	(墓石本体) 高さ 約 57cm 幅 約 26cm 奥行 約 15cm 石の材質？ 推定重量 67kg (台座) 高さ 約 38cm 幅 約 50cm 奥行 約 13cm 天保二年 = 1831 年

8. 「胎内岩」にある供養碑・墓石の一部

高清水通り沿いにあることから取り上げる。石碑類は多数あるが、その中の一部について参考的に6基の活字化を図った、右列に女性戒名が刻された墓石3基を記載する、頭部に墓石を象徴する円弧が刻されている。



先達
安政五天 重寛坊
馬頭観世音
二月四日 仙台名取岩沼中村
渡邊兵吉
榎原村 藤五郎



天保□



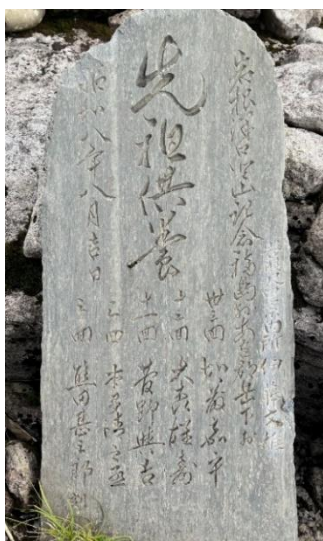
福島縣岩瀬郡浜田村前田川六□
先祖代々之供養
昭和十四年六月廿七日 阿部登米壽



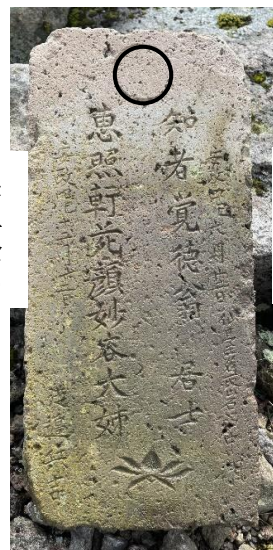
嘉永□

嘉永三

女性戒名の墓石



岩根沢口案内所 伊藤文雄
先祖供養
昭和八年八月吉日
廿三回 加藤嘉平
十三回 大森雄壽
十一回 菅野興吉
七回 本多清之丞
三回 熊田甚三郎 刻



安政四

安政四

9. (半体) 地蔵菩薩像

横道分岐目印二つこぶ岩の少し手前、高清水通り道沿いにある。対象は㊤で上半分は不明(㊤ではない)、衣の襷からして地蔵菩薩像であろう。右側には「岩根澤本道寺」と刻字されており、いわば、道しるべを兼ねていたものである、これ以外の刻字はない。なお、㊤の下半分(三分の二?)は周辺に見当たらず、墓石の欠片に見えるが、不明である。



10. 「禅定尼」の墓石

胎内岩の少し上方、月山まで約 500m の場所にある、女性修行者の墓石である。左の石碑にもびっしり刻字されているが、風化著しく、当該尼墓石の趣意碑文なのか、無関係の墓石なのかは不明である。



寛延^{かんえん}4 未年[?](西暦 1751 年)
風月姉清禅定尼
四月十五日

11. その他石碑

この2基について、虚空蔵山碑は本通りより200mくらい離れた位置にある。山神碑は本通り沿いにある。



虚空蔵山
大正十二年四月十七日
渋谷昇太建立

高さ 約70cm

幅 約53cm

奥行 約24cm

推定重量 約189kg

自然石？

大正十二年＝1923年



山神
昭和七年十月十二日
阿部竹蔵

高さ 約42cm

幅 約38cm

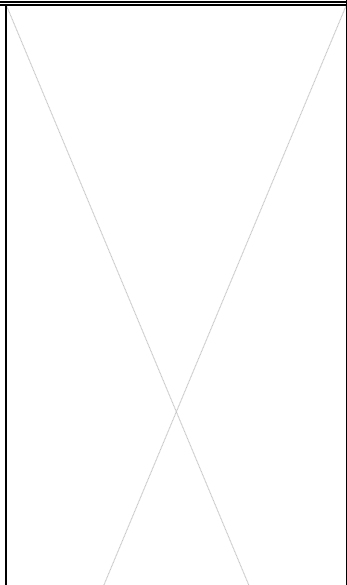
奥行 約16cm

推定重量 約54kg

自然石？

昭和七年＝1932年

12 道標

			
1 口之宮湯殿山神社境内	2 「夫婦清水」手前 林道との分岐	3 水場	4 姥像等石碑群
高さ 130cm、幅 22cm 奥行 12cm	高さ 80cm、幅 23cm 奥行 13cm	高さ 84cm、幅 24cm 奥行 13cm	高さ 74cm、幅 20cm 奥行 17cm
			
5 水場	6 水場	7 さいとば 柴明場	
高さ 71cm、幅 25cm 奥行 13cm	高さ 78cm、幅 21cm 奥行 12cm	高さ 71cm、幅 20cm 奥行 15cm	

- ✓設計・計画から運搬、建立までを「本道寺地区会・大黒森プロジェクト」が担った。
- ✓全7基を「令和2年秋」付けで建立開始、令和3年に全て設置完了した。
- ✓山道のきつい傾斜部分を削平しながらの小型台車に乗せた運搬は難儀であった。

13. 「高清水通り」沿い石碑・石塔・墓石等の年代順

(註)年差の基準は2025(令和5)年

――	連番	名 称	建立・設置年（和暦）	（西暦）	年差
場所 順序 （ 旧 本 道 寺 側 よ り ）	1	新道標（全7基）	令和2年から3年	2020年	3
	8	M1丁石起点記念碑(丁石96体含む)	文政五年七月	1822年	201
	9	山神碑	昭和七年十月十二日	1932年	91
	10	虚空蔵山碑	大正十二年四月十七日	1923年	100
	11	M2姥像等石碑群（墓石①）	明治十五年六月	1882年	141
	12	M2姥像等石碑群（供養碑②）	明治十六年七月	1883年	140
	13	M2姥像等石碑群（墓石③）	明治十六年	1883年	140
	14	M2姥像等石碑群（姥像）	?	?	?
	15	M2姥像等石碑群（祖母神像）	享保六年六月	1721年	302
	16	M3石船	正徳六年五月	1716年	307
	17	M5九十六丁（石）	文政五年七月	1822年	201
	18	M5高清水小屋跡地（元高清水）、墓石	文政三年九月	1820年	203
	19	M5高清水小屋跡地（元高清水）、墓石	天保二年四月四日	1831年	192
	20	（半体）地藏菩薩像	?	?	?
	21	禅定尼墓石	寛延四年四月十五日	1751年	272

――		名 称	建立・設置年（和暦）	（西暦）	年差
古 い 年 代 よ り ソ ー ト	14	M2姥像等石碑群（姥像）	?	?	?
	20	（半体）地藏菩薩像	?	?	?
	16	M3石船	正徳六年五月	1716年	307
	15	M2姥像等石碑群（祖母神像）	享保六年六月	1721年	302
	21	禅定尼墓石	寛延四年四月十五日	1751年	272
	18	M5高清水小屋跡地（元高清水）、墓石	文政三年九月	1820年	203
	8	M1丁石起点記念碑（丁石96体含む）	文政五年七月	1822年	201
	17	M5九十六丁（石）	文政五年七月	1822年	201
	19	M5高清水小屋跡地（元高清水）、墓石	天保二年四月四日	1831年	192
	11	M2姥像等石碑群（墓石①）	明治十五年六月	1882年	141
	12	M2姥像等石碑群（供養碑②）	明治十六年七月	1883年	140
	13	M2姥像等石碑群（墓石③）	明治十六年	1883年	140
	10	虚空蔵山碑	大正十二年四月十七日	1923年	100
	9	山神碑	昭和七年十月十二日	1932年	91
	1	新道標（全7基）	令和2年から3年	2020年	3

※ 尾根筋一本道の「高清水通り」に200年以上も前に寄進奉納されたものが6体も現存し、300年以上経過のものが2体もあるのだ、如何に行者から愛好されたのか、まことに深い歴史を感じる。

(end)

おわりに（全部まとめて最後に）

最後の最後に書き置くことがあります、文責を担うものの編集後記です。

私が初めて「高清水通り」に入ったのは、六十里越街道ウォーキングで知り合っていた布施範行さんからの声掛けで、2022(令和2)年6月26日(日)でした。そして、後日7月24日(日)に宮林良幸さんを紹介され、3人が初会合を持ったのであります。いわば「高清水通り調査隊」(T-FMO)の立上です。これ以後に本通りの地勢・史跡等調査の事態が大きく動いたのです。

足を運ぶ度に神秘と不思議、謎と魔物に遭遇です。その空間に清流する靈氣に巻かれるままにどンドン引き込まれて行きました。“この道には何か眠っている！”自生・自発する好奇心の赴くままに取り組んで来ました。

さて、弘法大師こと空海は、大同4(西暦809)丑年4月8日湯殿山を開山開基し、引き続き大師は同年8月8日に山号寺号を「月光山光明院」と名付けて旧本道寺を開基しました。それ以来、地元の数多の人達が月山および湯殿山を目指し本通りに幾度となく入ったことでしょう。中には必ずや自称歴史家がいるはず、「我こそは郷土史家」がいたことでしょう。そうすれば、本通り沿いに点在する丁石や石碑類に強い関心を寄せたはずですが・・・。

その時の対応は次の三分岐のいずれかになりますが、私(達)は素直に迷いなく④の道を選択しました、だから、当たり前のことを実践したに過ぎないことなのです。

- | |
|--|
| ④今直ぐ、徹底的に探求し書面化しよう。
⑤そのうち、調べよう。
⑥いや、意味ないは(変心)。 |
|--|

人生にとって、地域にとってどれが正しいのかという是非・善悪を問うことではありません。人それぞれの価値観で優先順位を見極めて動くものであります。どんな対応を取ろうがその選択に優劣はありませんし、どうしろとは憲法には書かれていません、しかし、従来は、今まではどうしたのか、どうしていたのか・・・。

様々に記述している中で、発見年月日と氏名を明示している、とりわけ「大沼(〇〇)が発見した」と自慢げに執拗に徹底して書いているが、「発見した」という事実をしっかりと記録しておく意図からであります。その時の強力なデジタル証拠を私は全部持ち合わせております。「カシミール3dスーパー地形セット／開発者DAN杉本氏」ソフト(有料)で記録したGPSデジタル記録——トラックログ(足跡打点、その年月日・時刻・緯度経度の位置情報・標高)を保存しています。そして、Apple社製「iPhone 13 mini」で撮影した写真を持ち合わせています。この二つを持って、国土地理院地形図上において撮影地点と撮影方角を以ってリンク表示(アナログ表示)出来るのです。

2022(令和4)年が過ぎ、翌年のまもなく1年になろうとする目前の2023(令和5)年6月19日(月)に「石船」の刻字碑文を新規発見し、2023(R5)年8月29日(火)に「天空石^{しゃつきょう}橋」の向きの意味合いを探り、2023(R5)年9月11日(月)月山頂上小屋管理人の芳賀竹志さんからの案内を賜り、「月山・湯殿山追分碑」に出会うことが適ったのを以って、この間に私が問題意識を持って来

た課題・主要懸案を総て解決出来たことから一旦区切りとするものであります。

私の大きな問題意識は、本通りに関して本活動のように、速やかに開示・公開の有りや否やの姿勢であります。その上で、本件活動の最大の特徴は、顕著な成果は、本通りの地勢・史跡等調査活動の結果（諸データ）を書面化、共有化・一般公表したことにあります。このような本通りに係る可視化は、^{ティー エフモ} T-FMOが初めのことであると自負しています。本調査結果について一片たりとも個人所有物的に秘匿・隠避しておりません、そんな意図はさらさらありません。なぜならば、高清水通りは、出羽三山は、個人やどこかの地域の所有物ではありません、本通りに残された史跡は古人が真剣に取り組んだ利他行・喜捨行結実の印です。みんなの、国民の貴重な歴史財産です。

私は新規発見の大部分に係ったが、“見付けた”だけで終われば“そこにもものがあるだけ”に等しく意味を成しません、あるがままに時間が経過するだけであるでしょう。

しかし、あるがままにせずに、歴史的背景事情をも考察しつつ意義付けを図り、共有すればこそ価値が生まれます。このような纏めに至ったのは布施さんと宮林さんと共に、対等互啓（恵）精神で動いたT-FMOの成果であると矜持を抱いています。この二人に刺激され阿頼耶識から自噴して来る不思議な使命感に引き摺られるままに、本通りの魅力にのめり込むままに一意専心本件活動に係ったことをとても嬉しく思っています。

行動を伴った調査記録に係る部分は当然ながら事実に沿う前提ですが、史跡に関する解釈面については書き手（大沼）の個人的な所見が入っています。例えば300年も前の石碑を設置した時の趣意・経過を書いたその当時の正真の記録文書がなければ、今世の人が書くことにおいては想像する他はありません。一つの「もの・こと」に対して無数の見方があるのは当然のことで、誰が対応しても同じことです。**地元にとっては、従来聞いたことのない言説や突拍子もない表現が沢山ある、あるいは従前定説とは違う、と思うことがあるかもしれないが、そのようなことから、その部分は一つの切り口・仮説、新しい見解として書いたものだということをご理解願います。**その上で中身に対する反論・批評は大いに結構ですが、それはご自身の中でご自身の新たなる研究のヒント・研鑽の引き金にして欲しい。賢明な頭脳明晰の自負をご自身のさらなる向上に当てて欲しい。なぜならば、T-FMOは学者ではなくズブの素人だからです。これが一定の限界です。なお、客観的な事実に基づく間違いの指摘や建設的なご意見は大歓迎でございます。

このレベルを以って本件はここで閉じることにしています。

以上が全部をまとめて事実在即した真相です。 たかが、一つの山道のことですが！

時代を越えて・将来において、本通りに深い興味・関心を抱く人達が必ずや表れることでしょう、その時に本書が、新たな発展的創造の基点・基礎になれば幸いであり、活用されることを期待するものであります。

締め括りに御礼の言葉です。本調査活動を見守って下さった、また支援を賜った「大黒森プロジェクト」の関係者、本道寺・月岡集落の皆様、本道寺地区会長に対し、そして、西川町役場の関係者、イベント集会に参加された皆様、「高清水通り」に足をお運び下さった皆様に対して心より多大なる感謝を申し上げます。ありがとうございました。

情報発信（公開・共有化・周知）コンテンツ

		高清水通り	
公表・公開		2023(令和 5)年 3 月 12 日(日) 於西川町交流センター「あいべ」	
調査報告書		ダイジェスト版（本書）	
西川町 HP トップ 『西川町デジタルマップ』		3 部構成で掲載 2023(R5)/9/26(火);初回掲載 2024(R6)/2/6(火);更新	
インターネット		「YBC ニュース 石橋」で検索（放送済）	
調査報告書を 随時更新	大沼開設の ホームページに掲載	URL ; 「 https://www.dreamyok.com/ 」 (URL 検索窓に dreamyok.com でも ok)	
	大沼開設の Facebook に投稿	QRコード  QRコード	カメラを当てると 「 dreamyok.com」 と表示される ・ Facebook アカウントの 設定が必要 ・ プロフィール写真は 白衣着用姿  検索窓に「@大沼香」

高清水通り調査隊

月山9合目付近で未知の石橋発見！発見者は70代トリオ！！謎に包まれた石橋の正体とはー

2023.11.07 15:47



keyword「YBC ニュース 石橋」

2023 年 11 月 7 日 15:47

2023（令和5）年 12 月末日

ディー エフ モ
(T - FMO)

布施範行 (F) ; TEL 090-4884-5794

宮林良幸 (M) ; TEL 090-2790-9222

大沼 香 (O) ; TEL 080-3338-3738 (著作・文責)

【出典根拠（本書）を明記すれば、いかなる部分も使用（コピペ）可
ただし、個人の金儲け（販売書籍等）に資するものはNG】

- ・唐突な言い回しや仮想的な事柄に気付くだろうが、それらの理由・背景については、別の調査報告書（作業中）に記述する。
- ・図表の一つひとつの細部説明は省略することからは、おかしな処に気付いた場合や、その解釈は、賢明・頭脳明晰なる読み手の想像にお任せする。見解の異なる処は、読み手のご見識を以ってご自身のさらなる向上に当てて欲しい
- ・本書は専門的学問的研究の書ではなく、あくまでも、現地に幾度となく足を運び、現物と幾度となく対面した上での素人の考察である。

「高清水通り 調査報告書」ダイジェスト版 添付資料

付録（おまけ）

目 次 的 項 目	P1
[1] 「大黒森プロジェクト 10 周年記念報告＋高清水通り調査報告」 一場面	P2～P3
[2] 丁石探查過程の整理	P4～P5
[3] 注目する丁石 2 体	P6～P7
[4] 「高清水通り」を寿ぐ歌	P8～P9
[5] 「日・月・星」の共演	P10～P11
[6] 「高清水通り」調査を推進した「T－FMO」 自家発電マンマシーン渦巻活動構図	P12～P15
[7] 六十里越街道沿いの丁石（参考）	P16
[8] 羽黒山の丁石（参考）	P17～P19

（※）以下、T－FMO・大黒森プロジェクト メンバーの敬称は省略する。

[1] 「大黒森プロジェクト 10 周年記念報告+高清水通り調査報告」
一場面



於西川町交流センター『あいべ』



2023
(令和5)年 3 月 12 日(日) 発表当日



山内善信さん(本道寺在住)



大沼 香(山形市在住)



パネル展



本道寺の遺物など
調査成果パネル展

西川・有志団体

西川町本道寺の月山登山
口の一つ「本道寺口」で、



かつて栄えた月光山本道寺
(現・口之宮湯殿山神社)
の歴史を伝える「大黒森プ
ロジェクト」(阿部高之・
布施範行共同代表)が、活
動10年目を迎えた。神社敷
地内に埋もれた遺物を掘り
起こしてきた成果などを紹
介するパネル展が、同町の
交流センターあいべで開か

れている。26日まで。

月光山本道寺は江戸時代
後期に湯殿山信仰の参拝者
でにぎわった。幕末の戊辰
戦争で本堂が焼失し、明治
初期の廃仏毀釈で仏像な

大黒森プロジェクトの活動や
本道寺の歴史を紹介している
パネル展「西川町・交流セン
ターあいべ

どが壊された。74(明治7)
年に口之宮湯殿山神社とな
った。

同プロジェクトは町内外
の有志が2013年に立ち
上げ、メンバーは約30人。
展示では、生い茂る草木を
除去し石塔や墓石、弘法大
師像を運び出す様子などを
写真付きで説明している。
本年度は本道寺からの参詣
道「高清水通り」の案内マ
ップも作成し、これまで発
見した30の里程標、石碑群
の位置などが一目で分かる
ようにまとめた。

(渡部真美子)

※；3/9(木)～3/26(日)期間中のパネル展において、数多の多種多様な関連資料や歴史資料をも合史料わせて展示したが、そのほとんどが布施範行の個人所蔵である。



同年3月27日(月)撤収日

設置時の集合写真はないが、この他の人達からも協力を賜った。

[2] 丁石探査過程の整理

1. 過去には見ていた (十三・十六・二十二丁 以外はどこにいったのか?)

1983 (昭和 58) 年 9 月、山形新聞報道「お行さまの道を行く (上中下の 3 回)」の記述より	2022 (令和 4) 年 10 月 11 日火曜日 11:56 宮林からのメール受信記録より
・・・途中「十三丁」とか、「二十六丁」とか彫られた大石が置かれてある。・・・	1998 (平成 10) 年 8 月 22 日 (土) に登山したときの記録 (メモ) が見つかり、 [?] 10、 [?] 16、 [?] 19、 [?] 22、 [?] 42、 [?] 78、 [?] 82 を確認している。
しかし、その中で、2022 (令和 4) 年 11 月末現在判明したのは 13 丁である。その他の 1 体は不明である。	しかし、その中で、2022 (令和 4) 年 11 月末現在判明したのは、16 丁と 22 丁である。その他の 5 体は不明である。

1983 (昭和 58) 年から 2022 (令和 4) 年 6 月までは 39 年も時間があつた、しかし、この間は、確認した丁石についてさえも、そこにあったとしながらも、そのままになっていた。書面化整理しないままそこで止まっていた。

ところが、**39 年後の令和 4 年 7 月に T-FMO 渦巻活動が引き金となって大きく展開した。**

2. 丁石発見の経緯記録

- ・大沼が本通りに初めて入った 2022 (令和 4) 年 6 月 26 日 (日) ~ 調査最終日同年 11 月 26 日 (土) 5 か月間の丁石発見の記録は下表のとおり。
- ・なお、同年最初の発見となった「九十六丁」の前日 9 月 9 日 (金) 時点で丁石 20 体の現存を確認していた。
- ・神仏靈魂を植え込んだものであり、単なる石ころではないので単位を「体」としている。

発見月日	発見丁石	発見者 (敬称略)
9 月 10 日 (土)	九十六丁の 1 体	大沼香 (宮林同行)
10 月 3 日 (月)	八十丁、八十五丁、八十七丁の 3 体	布川浩久 (阿部剛士同行)
10 月 9 日 (日)	三十四丁、九十四丁の 2 体	大沼香 (単独)
10 月 13 日 (木)	七十二丁の 1 体	大沼香 (宮林・市原同行)
10 月 26 日 (水)	二十二丁の 1 体	阿部剛士 (丁石探査イベント)
10 月 29 日 (土)	十四丁の 1 体	宮林良幸 (丁石探査イベント)
10 月 30 日 (日)	十六丁の 1 体	最上さん母娘 (丁石探査イベント)

この間の新規発見の合計数 ; 10 体

2023 (令和 5) 年 11 月末現在	総計 30 (20+10) 体の現存確認 (起点含めて 31 体) (30 体) / (96 体) × 100 ÷ 31.3% (判明率)
-----------------------	--

各丁石の GPS 位置情報 (緯度・経度) を一覧化している。

3. 2022(令和4)年度に3回実施した丁石探査イベントにおける一コマ

実施日 [発見丁石]	参加メンバー		発見時 丁石の状態	※1 探査イベント1日当り1体を発見した。 ※2 未発見の理由は、200年以上の時を経て、ルートの変更や土砂に埋もれているからであろう。 ※3 最大の懸案は「一二」(石)を発見すること。
10月26日 (水) [二十二丁] 1体				
10月29日 (土) [十四丁] 1体				
10月30日 (日) [十六丁] 1体				

〔3〕 注目する丁石 2 体

高清水通りには九十六体の丁石が寄進奉納された中で次の特筆すべき 2 点を取り上げる。

それは、**四十八丁と五十九丁**である。

前者は全数九十六丁中の半分、中間の丁石である。

後者の併せた数は「五九」（ごく）となり、「極」すなわち「極め」の意味に繋がる。

ここで、数理・聖数に係る図(表)－1 のとおりの前置きがある。

- ・ 5 は生数の極数、9 は成数の極数である。よって「五と九」は生数と成数の両方の極数である。
- ・ 5 は各生数に対し、公平・平等に働きかけて活躍し成数を生成する。
- ・ 5 は単なる中間の位置だけではなく、接着剤を担って次の発展的展開の引き金となっている。

図(表)－ 1								
(※1 体)	左手・原因 しょうすう 生 数 (※3 天数・陽) 生まれたままの動かぬ数 [静的]	陽・奇	陰・偶	陽・奇	陰・偶	陽・奇	陰中交錯(陰中陽あり・陽中陰あり)	
		1	2	3	4	5		
縁	(懸け橋・接着剤、平数)	5	5	5	5	5		
(※2 用)	右手・結果 せいすう 成 数 (※4 地数・陰) 5 を得て変化躍動する数 [動的]	6	7	8	9	10		
		陰・偶	陽・奇	陰・偶	陽・奇	陰・偶		
五行 (生成順)		水	火	木	金	土		

※1・2；体と用は本体とその作用、あるいは本質とその現象をいう。

※3・4；奇数を天数、偶数を地数と整理する考えもある。

(註) 陰と陽は、対極にあることの象徴因子を指し、優劣や軽重を表すものではない。

したがって、「**五十九(丁)**」は、**因縁果の道理で結ばれる「体と用」(例えば太陽とその光熱)の象徴であり、左右両極調和の象徴**である。なお、距離は $59 \times 109 = 6,431\text{m} \div 6\text{km}$ ほどの所にある。この6は陰(偶数)の極数となる、8ではない、陰は負の範囲では絶対値の小さい方が実質は大きいことになる。5と9は偶数・奇数の陰陽で見れば両方共に奇数の陽であり、よって陽が強まり、「体と用」の関係で見れば陰陽引き合って「中正」となる。いずれにしても誠に縁起の良い丁石なのである。

ちなみに、5月5日は子供の日・端午の節句、9月9日は重陽・菊の節句のしきたりがあった。

図－2は二つの丁石の存置場所である。

図－3は「四十八丁」であるが、風化摩滅が進み刻字が読み難くなっている。

図－4は道標「高清水」の傍に安置された「五十九丁」であり、朱色ベンガラが残っている。

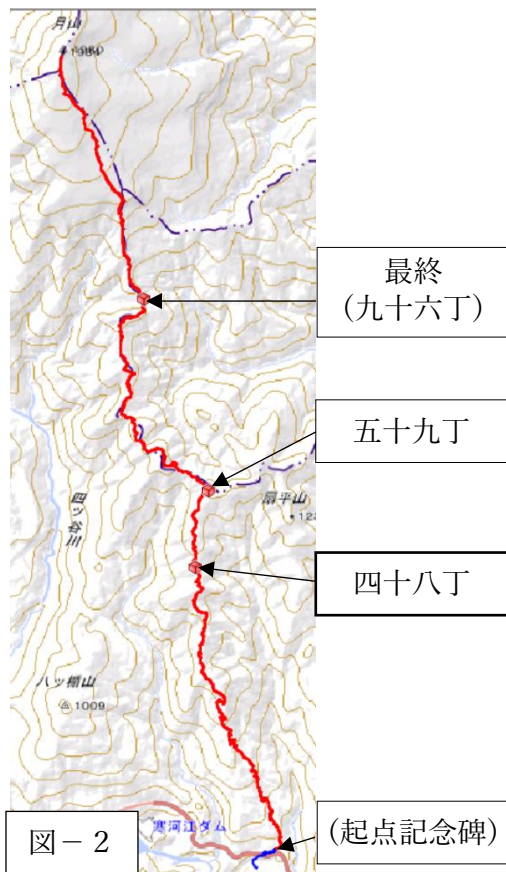


図-2



図-3

四十八丁

九十六丁四十八丁で、「四十八」は阿弥陀如来が菩薩の時に
 請願した項目数に由来するものだろうと着目しているが、現存30
 体の中で、「四十八丁」の刻字が一番不明瞭である。わざと（あえ
 て）そのような材質を選んだのか、浅く刻したのか、風化摩滅し
 たのか、どんな因縁果があるのだろうか。

今は本通りの名称と一致するこの地名を水が滴る「高清水」としているが、「高清水小屋」が掛けられた古来の「高清水」は別記しているとおり、「九十六丁」(石)が安置されている、そこを今は「元高清水」と称している。ところがいつ頃からかは定かではないが、この「五十九丁」地点を高清水と称するようになった。

このように変遷騒動に巻き込まれた因縁深い「五十九丁」は、2021(令和3)年6月30日(火)に布施範行と阿部剛士が発見したものである。

なお、意味深な「36、53、54、55」丁も記載したかったが、現存を確認出来ずにいる。



水場



図-4



「高清水通り」セレナーデ

(原曲「山路越えて」讃美歌)



	(や ま じー	こ - え て	ひ と りー	ゆ け ど	主 の 手ーに	す が れー る	身 は やー	す - け し)
以下、 替え歌の詩	1 ほ ん どー	う - じ と	た か しー	み ず は	い き かーた	こ こ ろー の	ま な びや	ア ー ト
	に ち とー	げ - つ も	つ い でー	す ま い	て ら しーて	て ら さー れ	ま こ とを	む - す ぶ
	2 か み のー	わ - ぎ は	と き にー	は げ し	と き にーは	お だ やー か	こ う なん	じ - ぎ い
	お し てー	お - さ れ	ひ い て	ひ か れ	た い とーう	ご け いー よ	し こ うの	お - し え
	3 こ う ぼー	う - さ ま	で ん ぎょ	う さ ま	ゆ どのーを	お ま もー り	つ き やま	か - ば う
	こ う ぼー	う - さ ま	で ん ぎょ	う さ ま	い ん よーう	ま じ えー る	ち ょ う わの	か - み よ

ほんどうじ た か し ず や
本道寺と高清水通りは 生き方こころの学び舎アート

に ち げ つ つ い
日と月も対で住まい 照らして照らされ誠を結ぶ

か み わ ぎ
火と水の技は時に激し いつもは穏やか硬軟自在

ひ
押して押され 引いて魅かれ 対等互啓（恵）よ、至高の訓え

つきやま
弘法様・伝教様 湯殿をお守り月山かばう

ま じ
弘法様・伝教様 陰陽交える調和の神よ

(注1) 原曲とその楽譜は「讃美歌21」466番

作詞者；西村清雄、作曲者；Aaron Chapin

(日本キリスト教団出版局より確認)

(注2) 楽譜で一番上の歌詞は原曲の歌詞である。

(注3) 替え歌の詩は大沼香作 2022 (R4) 年11月20日 (日)

(注4) 歌い出しの「本道寺と高清水通り」は、往古よりの諸々の歴史を含めた意をいう。

「高清水通り」賛歌

<日月星の星を主役に>

(※A)

御大師名付けた本道寺から
高清水通りに白衣の行者
懺悔ス滅罪六根清浄
月山・湯殿を目指して歩む

文政五年の起点の御旗
高清水までに九十六の
丁石仏に弥勒が住まう
対面その都度首頭が垂れる

(※B)

骨太尾根筋高清水道
五大が刻んだ魅惑を満載
自然の盆栽珍奇なブナや
夫婦清水、石船、子孫を繋ぐ

高台柴明場祭祀の舞台
神祇明鏡、元の高清水
大雪城下間に摩訶不思議かな
天空石橋 今、顔を出す

(※A) [原曲は星の界(よ)・星の世界／讃美歌]



つ きなきみそら に き らめくひかり
お だいしなづ け た ほ んどうじから
ぶ んせいごね ん の き てんのみは た
あ あそのほし か げ き ぼうのすが た
た かしみずど お りに は くいのぎょうじゃ
た かしみずま で に きゅ うじゅうろく の
じ んちははて な し む ぎゅうのおち に
さ んげス めつ ざ い ろ っこんしょうじょう
ちょ ういしほ と け に み ろくがすま う
い ぎそのほし か げ き わめもゆか ん
が っさんゆど の を め ざしてあゆ む
た いめん その つ ど こ うべがたれ る

(※B) [原曲は冬の星座／S 2 2 年文部省唱歌]



こ がらしとだ え て さ ゆるそらよ り
ほ ねぶとおね す じ た かしみずど う
た かだいさい と ば さ いしのぶた い
ち じゃにふり し く く すしきひか り よ
ご だいがきざ ん だ み わくをまん さ い
し んたいめい きょ う も とのたかし み ず
も のみないこ へ る し じまのなか に
し ぜんのぼん さ い ち んきなぶな や
ゆ きじろした ま に ま かふしぎか な
き らめきゆれ つ つ せ いざはめく る
み よとにいし ぶ ね し そんをつな ぐ
て んくうしゃっ きょ う い まかおをだ す

(注1)楽譜はインターネットのフリーサイトより拝借したもの (※2)楽譜直下の歌詞は原曲のもの (注3)替え歌の詩は大沼香作 2022(R4)年11月20日(日)

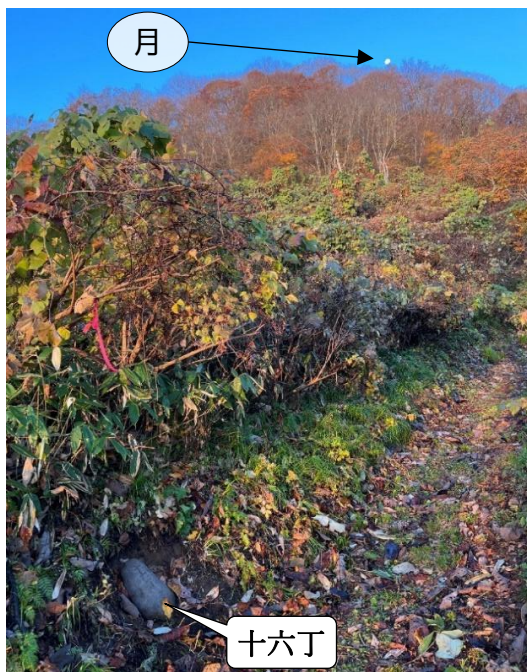
[5] 「日・月・星」の共演

月山より本通りを調査しながらの下山途中、宮林・大沼の二人は『天空石 橋』を発見し、『九十六丁』(石)を発見したその日は一日中快晴で、中秋名月の2022(令和4)年9月10(土)であった。写真は「姥像等石碑群」の手前から寒河江・天童～村山方面の夜景。月は下に見え、赤みがかっていた。背中を(※)北斗が見守り、遠くから太陽が語り掛けて来た。



(※) 北斗とは、北極星、または北斗七星、あるいは合せて両方、星辰ともいう。

2022(R4)年10月29(日)丁石探索イベント時に、布施親族の母娘が「十六丁」石を発見したが、それから足掛け15日目の11月12日(土)の朝、山の彼方に沈み行くお月さまを撮影したもの。入れ替わるように東からお天道様(太陽)が昇って、この付近一帯の紅葉と常緑の笹を眩しいくらいに照らした。「天(太陽と月)・地(紅葉と笹)・人(発見者と撮影者)」が一直線上に並んだ一時であった。この日12日(土)の光輝部分割合は、計算すると88.44%であった、真に縁起が良い数字が並んだ。なお、紅葉は老年者、常緑の笹は壮青年の喩えである。



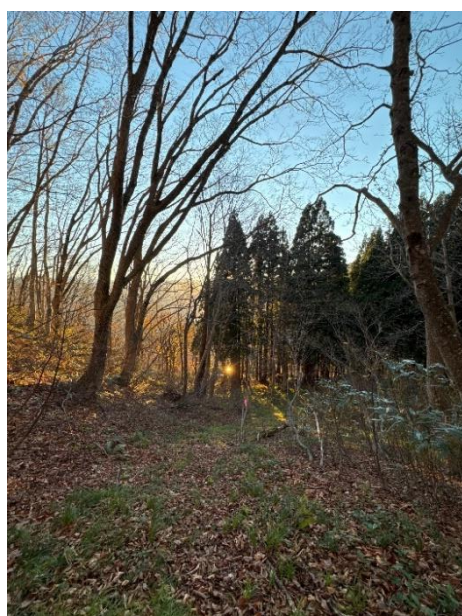
あの時の母娘が当たった十六(丁女)に
日月絡み大潮の生

(※) 海洋潮汐の干満は太陽・月・

2023 (R5) 年12月 8 日（金） 山形新聞記事

2023 (R5) /11/22 (水) 16時 3 分撮影、「高清水通り」風吹反射板下林道への下り

沈みゆく夕日が林の奥に駐車した車の屋根に反射し、縦に並ぶ二つの輝きを見ることができました。山形市上桜田3丁目の大沼香さん(74)が西川町本道寺で11月22日撮影



〔6〕 「高清水通り」調査を推進した「T-FMO」自家発電マンマシーン渦巻活動構図

下記3人は道普請にも大いに係り、丁石探查には他の有志の協力を賜ったが、本通り地勢・史跡等調査に特化した活動を踏まえた「高清水通り案内マップ」編集・作製等に直接従事枠組み部分を「T-FMO（調査隊）」としたものである。

- 少子高齢化の社会にあって、現実的に、地域コミュニティを中心的にけん引しているのは年寄りだ、年寄りが頑張らざるを得ない現実の社会である。この情勢下、本道寺・月岡集落の、合せても30世帯にも至らない小さな小さい限界集落の70歳を超えた2人の爺と、よそ者の70歳を超えた爺の3人の「T-FMO」自家発電ハイブリットマンマシーンがうなりを上げ、一時“地域興し”に投じた活動である。“少し変わった地域興しの新モデル”と自負している。
- なぜ、このような心地良い渦巻活動になったのか？ しがらみや腐れ縁を作らないという自覚を踏まえ、向上心や悔しさを燃料とする自家発電マンマシーンに成ったからである。
 - ✓ 一時期、地域興しに必要とされた「よそ者・若者・バカ者」のキーワードは使われなくなったが、その心は今も十分に意義がある、その精神が自発・自動結集したのであった。
 - ✓ 飲み会や仲間活動で「政治・宗教・スポーツ」の話題はタブーというが、そのような迷信に捉われず何事も開放的に対話した。
- 一般的に、大小を問わず、2名上の集団にはトップ（リーダー）とピラミッド構図の在来型指揮命令統制機能が自生する、しかし、自生しなかった、ここには職務権限の権能作用を生成させなかった、それがかえって奏功したのだ。（大沼は特に権能差配を嫌った。）
- 空海の言う「異生羝羊心」、すなわち「マンキタゲ佞奸根性（いい歳になってもひねくれたねたみ・ひがみ、ねじ曲がった自尊心）」の者がメンバーにいないれば、各人の個性が燦然と光輝を放つ「チーム」に変貌するのだ。（一人でも権威屋・独善屋がいるとチームワークは瓦解する）

1. 調査を担った「高清水通り調査隊（T-FMO）」の立上げと名付け

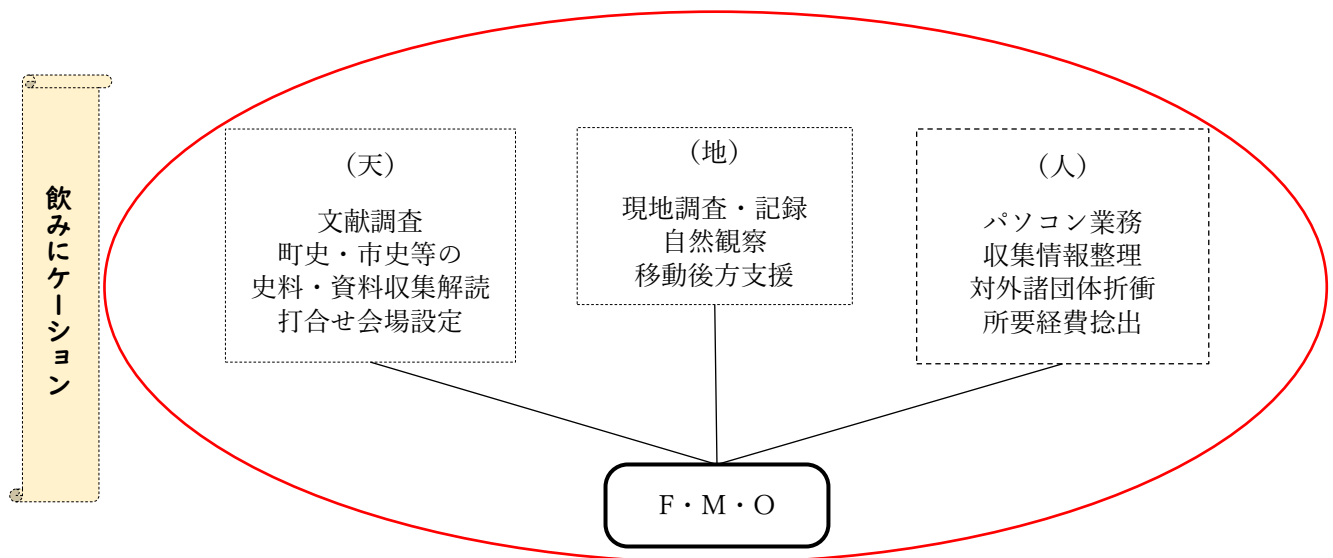
2022（令和4）年7月24日（日）3人が初会合、その心は、それぞれは小さな微生物のような目立たぬものではあるが、心の内に秘めた幻想曲——形式にとらわれず、作者が自由に楽想を展開させて創る曲——様相をオーケストラ風の熱い心を以って取り組んだのがこの一連の渦巻活動であった。

3人				次元転換再築構成	
布施範行の	宮林良幸の	大沼香の		Fは	ファンタジー fantasy（幻想曲）
				Mは	ミトコンドリア mitochondria （ヒト細胞内最微小エネルギー発生源）
F	M	O		Oは	オーケストラ orchestra（交響楽団）

『T』は「高清水通り」のT、Triangle（3人組）のT、Total（総合）のTである。

2. T-FMO 各自の自主行動

□地域行政（町内会等）から正式認知されたグループでは無い □規約的な内部ルールを定め無い。 □責任者（リーダー・代表者）をあえて決め無い □役割分担や担当を決め無い。 □やるべき業務は各自みな認識した・自発した、自らの判断で自らが意気を感じて動いた、主客の相互転換自由展開とした。 □各自が持つ「得意・得手・技」（個性）発揮を丸ごと相互尊重した。 □始終、総てにわたって提案型姿勢（心のブレインストーミング）に徹した。 □無心、無我夢中（利害損得の勘定・感情は微塵も有らず）になった。	世の一般常識、既成概念とは違う
---	-----------------



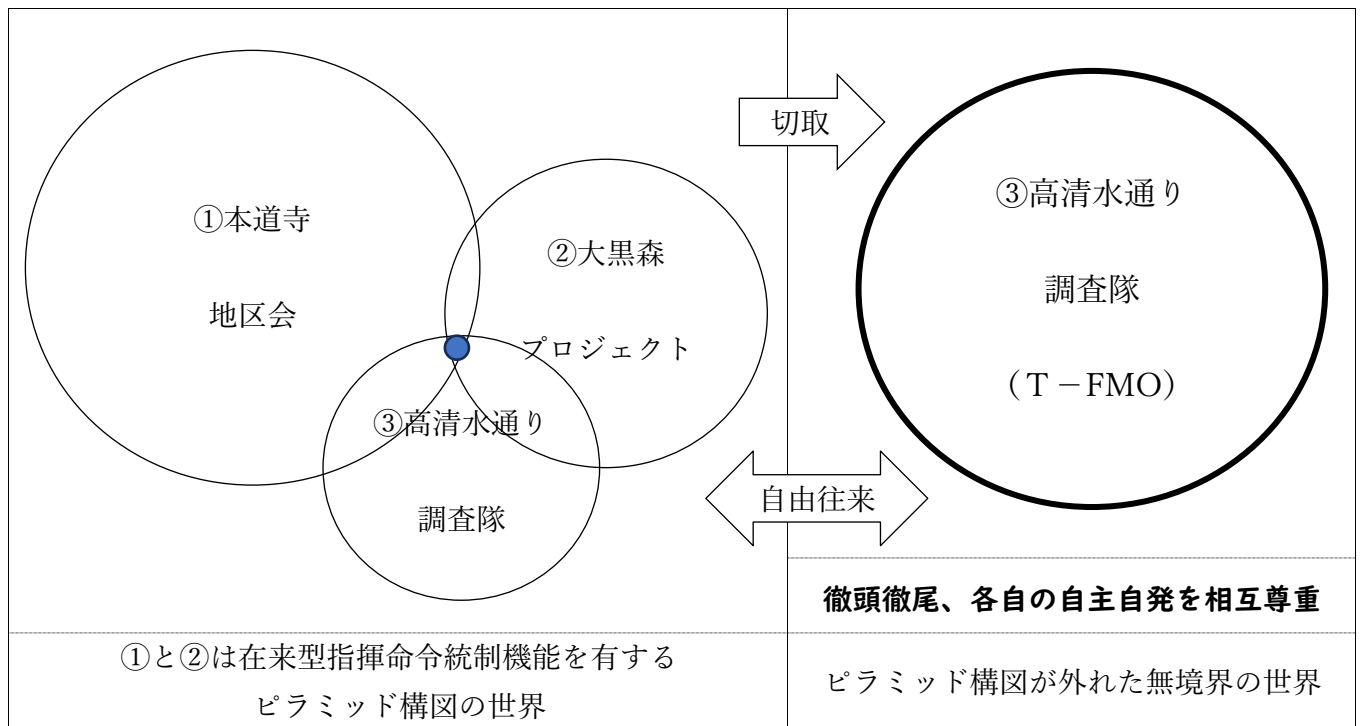
3. 「高清水通り調査隊（T-FMO）」の位置付け

次頁図、③本件「高清水通り」の地勢・史跡等の調査を目的とした有志チーム「高清水通り調査隊」に関する組織団体は、①6集落・5町内会の集合団体である本道寺地区会、②口之宮湯殿山神社境内に眠る石仏等遺跡の発掘調査を目的とした任意活動組織の「大黒森プロジェクト」であり、その連携イメージは次頁左図のとおりである。

ただ、「高清水通り調査隊」の実勢・実体はあくまでも独立し、調査に特化した本件活動を展開した。

①・②とは、案内マップ作製とパネル作製に係る費用手当の面や外部団体との情報交換の観点、所属が重なる人もいることから連携を図ったものである。布施さんと宮林さんは①②③に所属し、大沼は①・②いずれの組織にも加入せずよそ者で③のみの所属である。

必要に応じて立場を自在に行き来した。立場の往来は、行動の自由度と思考柔軟性確保を担保する臨機応変を意図したものである。



「切取・自由往来」とは、「時・処・位」「T・P・O」に応じて柔軟に適時適切なポジションを取ったこと、この動きを矛盾・自家撞着としない。(従来型の固定観念・既成概念では解けない?!)

4. 生み出した成果

①本道寺地区会と②大黒森プロジェクトとの緊密な連携のもとに以下の成果を齎すことが出来た。

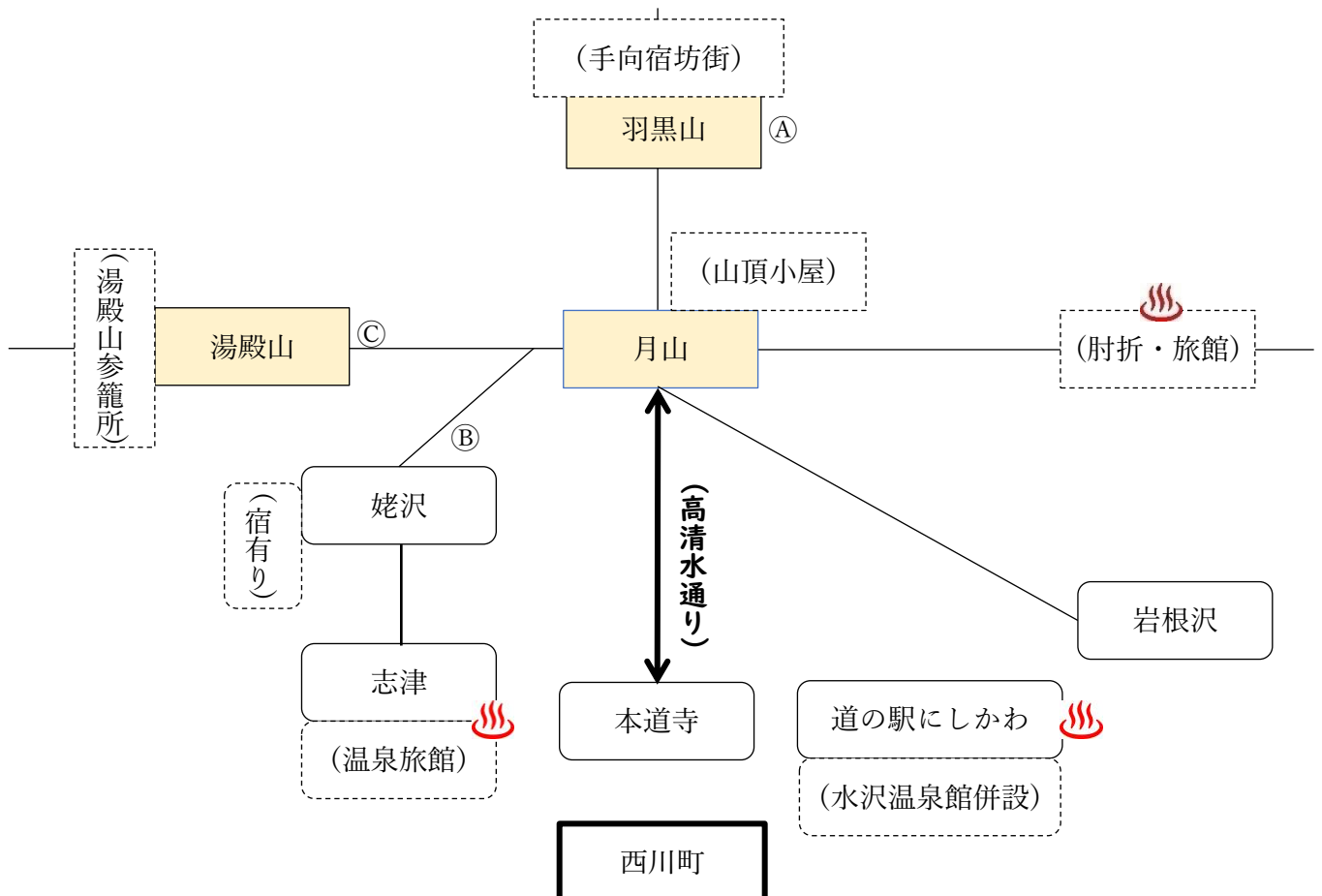
活動成果の集約	2023 年補完
2022(R4)年 7 月～2023(R5)年 3 月までの 9 か月の短期間で 次の大きな四つの成果を成した ✓1 「高清水通り 案内マップ」作製・一般配布 ✓2 調査パネル作製・展示、於「※あいべ」・2023(R5)/3/9(木)～3/26(日) ✓3 調査活動を報告発表、2023(R5)/3/12(日)、於「※あいべ」 ✓4 「高清水通り調査報告書」ダイジェスト版の作成、公開、配布、随時更新 ※1；「あいべ」とは西川町の西川交流センターをいう。 ※2；他に「高清水通り調査報告書」(細部の記録文書)作成中	ダイジェスト版 マップに掲載 2023 (R5)年 9/26 (火) 西川町デジタル
✓本道寺地区会や町内会、「大黒森プロジェクト」等既存組織の承認・決定を得たものではない。従来型に捉われない「少し変わった地域興しのかたち」のモデルとなったものである。 ◎「報・連・相」を徹底した、すなわち、あらゆる「もの・こと」に対し、自由に“口はさみ”OKとした。	だからこそうまくいった (世の一般常識とは逆)

5. 計画性を意識した段階的取組み

縦軸（時間軸）要素の中にも、横軸（拡散志向）展開を意識して、下表のステップを描き、地域振興に助力したく明確な意図を以って計画的に取り組んだ。しかし、硬直化せず柔軟にローリングプランを以って推進した。

第Ⅰステップ	三現（現場・現物・現実）主義 徹底に基づく体験智の展開	道に潜む“不思議と謎”を調査し 新しい視点からの歴史的価値を意義付けて 白日の下に晒す
第Ⅱステップ	書面化、開示・公開・公表	上記の四つの成果
第Ⅲステップ	利活用・応用・敷衍化	- 活動キョッチコピーを設定 “西川町にもう一つの誘客ゾーン ^{プラスワン} + 1！” “高清水通りの新たな魅力発掘と情報発信” - 西川町 HP「みんなでつくるデジタルマップ」 に掲載 - 報道機関への情報提供

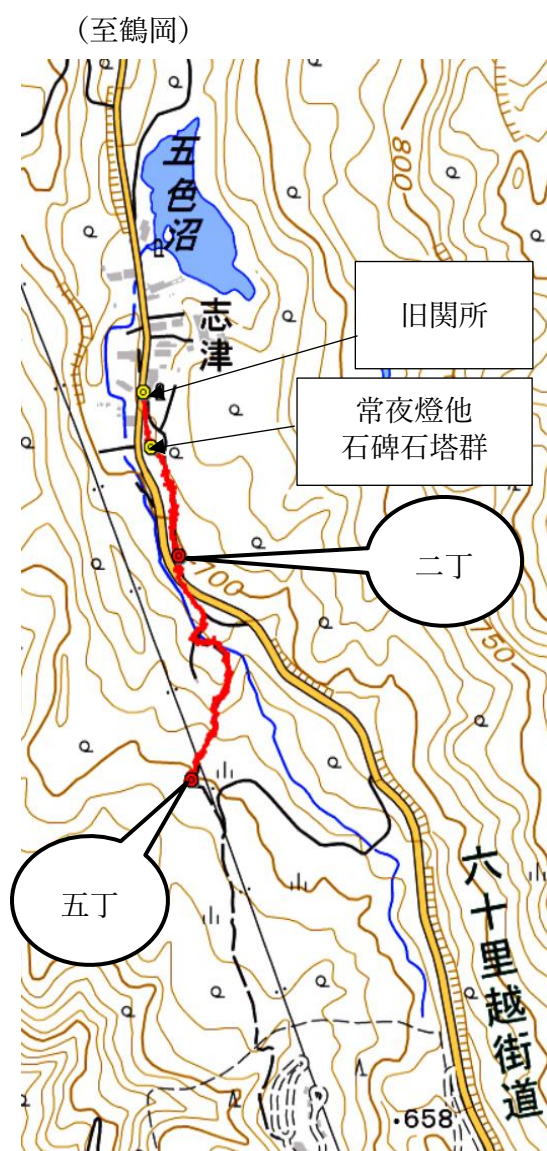
西川町において、登山客・アウトドア志向派に対応する地区は、朝日連峰の麓大井沢地区と、月山の麓志津温泉・姥沢地区、本道寺・岩根沢地区であろうが、月山に着目すると、下図のような登山ルート（概略）がある中で、①・②・③がメジャーと言える。しかし、高清水通り調査活動半ばにおいて、そのメジャールートに「高清水通り」の楔を打ち、西川町観光開発に大いに貢献したいと念願するようになった。このような日本百名山「月山」への登山道がある中において、専用・特化した案内マップを公のものとして作製したことは、「高清水通り」が初めてであろうと思う。



〔7〕 六十里越街道沿いの丁石（参考）

2023(令和5)年8月10日(木)現地調査を行った。高清水通り丁石と類似のものが、六十里越街道西川町志津地内に安置されていることから、話題ツールの一つとして参考的に記述する。

- ・現在2体のみを確認している。全部でいくつなのか、経緯・由緒は不明である。
- ・昔設置していた旧志津関所、あるいは常夜燈を起点としていたのか、ここは、^(註)山から里へ向けて、つまりは山形方面に向けて安置した模様である。他の歴史古道においては、里から峠に向けて、登りきって峠から里に向けて設置したものがある、基点をどこに置くかであり、この例は何も珍しいことではない。(註)二丁は東側斜面に、五丁は道の中央部にあり下って順に見える。それにしても間隔は不釣り合いだが？



(至山形)



「二丁」



「五丁」

登ると逆さに見える。

[8] 羽黒山の丁石 (参考)

2023(令和5)年5月10日(水)現地調査を行った。高清水通り丁石と類似のものが、羽黒山杉並木石段参道沿いに、随神門から羽黒山頂三神合祭殿手前の鳥居(最後)まで約2kmの表参道(石段)に18体(起点・終点+16体=18体)安置されている。大沼は15体確認済。

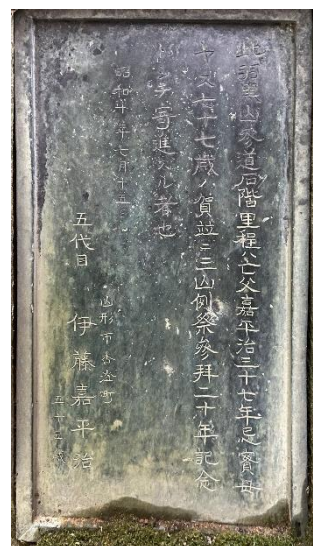
話題ツールの一つとして参考的に記述する。(以下の写真は太田が撮影)



随神門から杉並木石段へ



起点記念碑



同左銘文



随神門から降りて右クランクの左角に「壺（一）丁」



途中の「七丁」と石段



最後の鳥居



左記鳥居を潜った直後右手

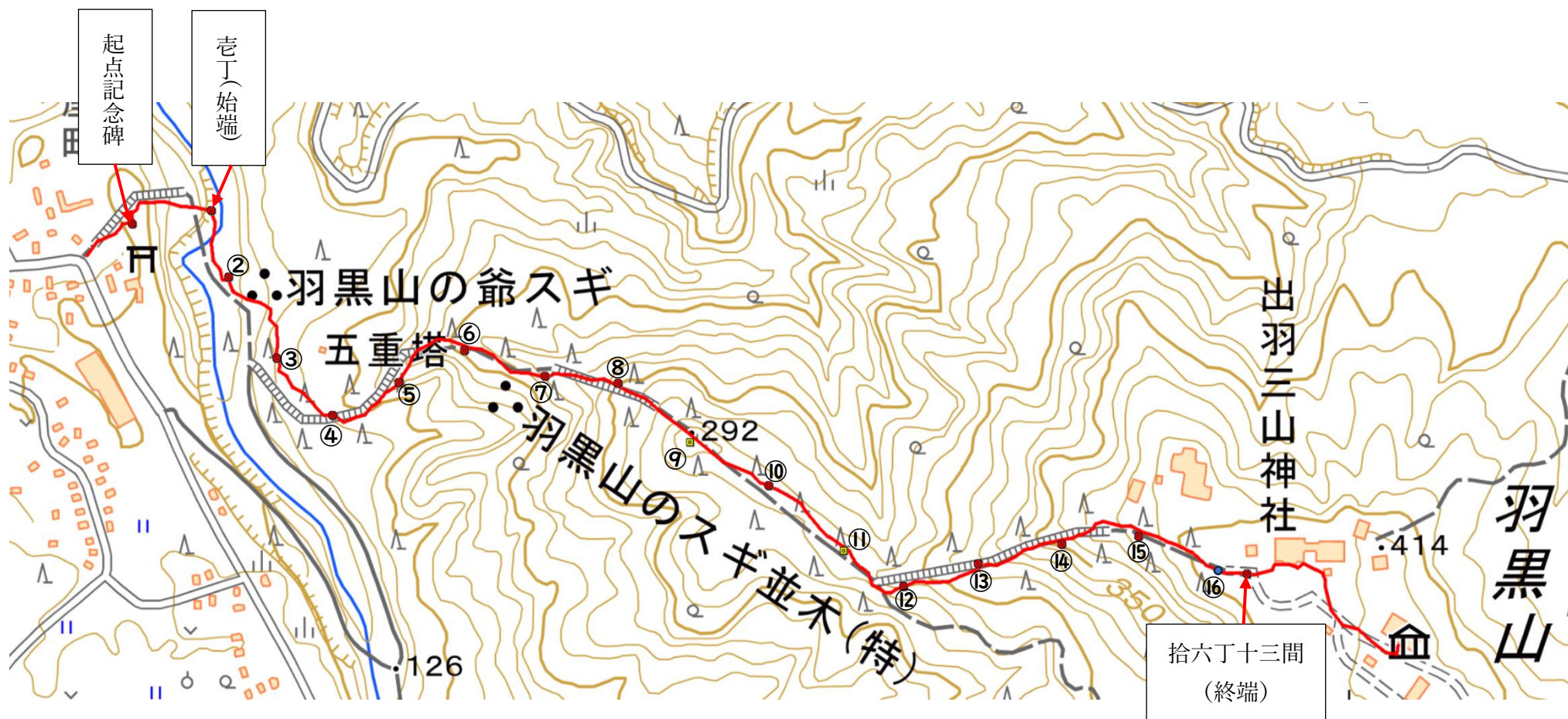


「終点 拾六丁十三間」

羽黒山参道沿い丁石一覧

	一丁(巻)		二丁(貳)		三丁
	四丁		五丁		六丁
	七丁		八丁		十丁
	十二丁		十三丁		十四丁
	十五丁		終点拾六丁十三間	(未確認)	
				九丁	十二丁
				十六丁	

- ・高清水通りと同じ自然石の様だがよりごっつい。同通り丁石大ききの平均は高さ 48cm・幅 28cm・厚さ 10cm ほどであるが、ここのものは約 1.3 倍大きい。
- ・下図は GPS トラックログ（足跡）と丁石の位置である。この調査においては九丁と十一丁と十六丁は（未確認）見逃している。
- ・「高清水通り」の特徴は何といっても「九十六」体という数の多さである。



(end)